

平成 5 年度
神戸市埋蔵文化財年報



1996

神戸市教育委員会

平成 5 年度
神戸市埋蔵文化財年報

1 9 9 6

神戸市教育委員会

序

平成 7 年 1 月 17 日、神戸市を襲った阪神・淡路大震災は、尊い生命を一瞬のうちに奪い、都市基盤を破壊しました。被災した埋蔵文化財包蔵地も 234 ha に達しました。神戸市民にとって、この 1 年は苦難の年になりました。しかし、市民の努力で、また全国各地の支援をいただきながら復興は確実に進んでいます。

そのような中で、復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財保護の整合を図るため、文化庁から基本方針が出されました。さらに、兵庫県教育委員会を通じ、全国各自治体の支援を受け、発掘調査を進めています。

さて、平成 5 年度も貴重な発見が相次ぎました。最も注目されたのは、西求女塚古墳の発掘でした。400 年前の伏見地震で崩壊した堅穴式石室の石材の間から、11 面の青銅鏡が出土し、大きく報道されました。市民の関心も高く、現地説明会には 3,200 名もの方々が参加されました。また、古くから市街地化していた西岡本遺跡、郡家遺跡で古墳が発見されました。墳丘はすでに削り去られていきましたが、その存在が明らかになったことは、その地域の歴史を考えていく上で貴重なものです。

本書は、平成 5 年度に実施した主な発掘調査の成果を掲載するもので、現地調査中に公開できなかった多くの遺跡も、本書を通し、理解していただければ幸いです。

最後に、この年報作成にご協力いただきました関係諸機関、関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成 8 年 3 月

神 戸 市 教 育 委 員 会

例　　言

1. 本書は、神戸市教育委員会が平成5年度に実施した埋蔵文化財調査事業の概要である。事業に関わる発掘調査は、神戸市文化財専門委員会の指導を得て、下記の調査組織によって実施した。

調査関係者組織表

神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部会委員）

榎上 重光　　神戸女子短期大学教授

和田 晴吾　　立命館大学文学部教授

細見 啓三　　奈良国立文化財研究所建造物研究室長

教育委員会事務局

（財）神戸市スポーツ教育公社

教育長 小野 雄示

理事長 福尾 重信

社会教育部長 松田 康宏

専務理事 竹入 正視

文化財課長 杉田 年章

常務理事 谷敷 勝美

埋蔵文化財係長 奥田 哲通

事業課長 村田 微徹

文化財課主査 中村 善則・渡辺 伸行

文化財調査係長 中村 善則潔

事務担当学芸員 口野 博史・佐伯 二郎

調査担当学芸員 丸山 潔

タ 東 喜代秀

タ 西岡 巧次

調査担当学芸員 菅本 宏明

タ 黒田 恭正

タ 口野 博史

タ 西岡 誠司

タ 丹治 康明

タ 安田 滋

タ 千種 浩

タ 斎木 嶽毅

タ 谷 正俊

タ 池田 典孝

タ 山本 雅和

タ 松林 宏典

タ 前田 佳久

タ 橋詰 清孝

タ 須藤 宏

タ 阿部 敬生

タ 富山 直人

タ 川上 厚志

タ 山口 英正

タ 藤井 太郎

タ 内藤 俊哉

タ 石島 三和

タ 浅谷 誠吾

タ 関野 豊功

タ 井尻 格

タ 阿部 功

2. 本書に掲載した位置図は、神戸市立中学校教育研究会社会科研究部編集（神戸市スポーツ教育公社発行）の5万分の1神戸市全図を、各遺跡の位置図は、神戸市発行2500分の1地形図を使用した。

3. 本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当者が執筆し、丸山 潔、橋詰清孝が編集した。

4. 表紙・裏表紙写真は、西求女塚古墳出土鏡である。

目 次

序

例言

I. 平成 5 年度 事業の概要	1
平成 5 年度 埋蔵文化財発掘調査一覧	4
平成 5 年度 神戸市埋蔵文化財調査位置図	11
II. 平成 5 年度の発掘調査	17
1. 北青木遺跡 第 3 次調査	17
2. 本山北遺跡 第 2 次調査	27
3. 西岡本遺跡 第 3 次調査	31
4. 郡家遺跡 下山田地区 第 4 次調査	35
5. 西求女塚古墳 第 5 次調査	43
6. 都賀遺跡 第 4 次調査	51
7. 日暮遺跡 第 5 次調査	55
8. 口若遺跡 第 7 次調査	61
9. 神園遺跡 第 1 次調査	65
10. 日下部北遺跡 第 3 次調査	69
11. 北神ニュータウン内第21・22地点遺跡	77
12. 龍ヶ坪遺跡 第 3 次調査	89
13. 上小名田遺跡	95
14. 淡河・萩原城遺跡 第 1 次調査	105
15. 戸町遺跡 第 10 次調査	109
16. 垂水・日向遺跡 第 9・10 次調査	115
17. 舞子浜遺跡 第 5 次調査	121
18. 舞子浜遺跡 第 7 次調査	125
19. 舞子浜遺跡 第 8 次調査	131
20. 白水遺跡 第 3 次調査	137
21. 白水塚古墳	143
22. 高津橋・岡遺跡 第 4 次調査	147
23. 新方遺跡 北方地点 第 3 次調査	155
24. 三ツ屋遺跡 第 1 次調査	165
25. 小山遺跡 第 1 次調査	177
26. 出合遺跡 第 32 次調査	183
27. 玉津田中遺跡 第 7 次調査	191
28. 玉津田中遺跡 第 8 次調査	205
29. 大谷遺跡	215
III. 平成 5 年度の大規模試掘調査	219
IV. 平成 5 年度の保存科学処理	233

挿 図 目 次

fig. 1 調査地点位置図	17	fig. 45 9号墳〔写真〕	48
fig. 2 調査区全体平面図	18	fig. 46 出土土器実測図	49
fig. 3 3～5区第2造構面平面図	19	fig. 47 スタンプ文のある壺形土器実測図	50
fig. 4 調査地全景〔写真〕	20	fig. 48 細錐車形石製品実測図	50
fig. 5 SK 217 検出状況〔写真〕	21	fig. 49 調査地点位置図	51
fig. 6 SD 201 出土土器実測図	22	fig. 50 第2造構面平面図	52
fig. 7 SD 201 出土土器実測図	23	fig. 51 第4造構面平面図	53
fig. 8 湿地出土土器実測図	23	fig. 52 SB 08〔写真〕	54
fig. 9 湿地出土土器実測図	24	fig. 53 調査地点位置図	55
fig. 10 土坑出土土器実測図	25	fig. 54 調査区平面図	55
fig. 11 SK 225 出土土器実測図	26	fig. 55 A区空中写真〔写真〕	56
fig. 12 調査地点位置図	27	fig. 56 石組遺構1〔写真〕	56
fig. 13 第2造構面全体図	28	fig. 57 A地区石組遺構1出土土器実測図	57
fig. 14 第2造構面全景〔写真〕	28	fig. 58 C区遺構平面図	58
fig. 15 ST 01 平・立面図	28	fig. 59 D区遺構平面図	59
fig. 16 ST 01〔写真〕	28	fig. 60 SX 13 出土土器実測図	60
fig. 17 ST 01 出土土器実測図	29	fig. 61 調査地点位置図	61
fig. 18 ST 01 出土土器〔写真〕	29	fig. 62 第3造構面平面図	62
fig. 19 SK 01 平・断面図	30	fig. 63 SB 204 平・断面図	63
fig. 20 調査地点位置図	31	fig. 64 SX 206 出土土器実測図	64
fig. 21 遺構平面図	32	fig. 65 調査地点位置図	65
fig. 22 出土須恵器実測図	33	fig. 66 遺構平面図	66
fig. 23 出土埴輪実測図	34	fig. 67 SX 03 出土丸軌実測図	67
fig. 24 調査地点位置図	35	fig. 68 出土瓦拓本	68
fig. 25 第2造構面平面図	36	fig. 69 調査地点位置図	69
fig. 26 1号墳石室平・立面図	37	fig. 70 I区造構平面図	69
fig. 27 2号墳石室平・立面図	38	fig. 71 SE 01 平・立面図	70
fig. 28 1号墳石室〔写真〕	38	fig. 72 SE 01 出土曲物	70
fig. 29 2号墳石室〔写真〕	38	fig. 73 II区造構平面図	71
fig. 30 1・2号墳出土土器実測図	39	fig. 74 SK 05 出土土器実測図	72
fig. 31 第3造構面平面図	39	fig. 75 土坑・溝出土土器実測図	72
fig. 32 3号墳石室平・立面図	40	fig. 76 SX 01 出土土器実測図	73
fig. 33 出土土器実測図	40	fig. 77 SX 02・03 出土土器実測図	74
fig. 34 第3造構面全景〔写真〕	41	fig. 78 II区包含層出土須恵器実測図	75
fig. 35 3号墳〔写真〕	41	fig. 79 II区包含層出土須恵器実測図	76
fig. 36 第3造構面土器群出土土器実測図	42	fig. 80 調査地点位置図	77
fig. 37 調査地点位置図	43	fig. 81 Na22地点I・II・II拡張区平面図	79
fig. 38 地震による墳丘の地割〔写真〕	44	fig. 82 Na22地点1号墳平・立面図	80
fig. 39 墳丘を突き破る墳砂〔写真〕	44	fig. 83 Na22地点1号墳石室平・立面図	81
fig. 40 地震で崩壊した石室〔写真〕	45	fig. 84 Na22地点1号墳全景〔写真〕	82
fig. 41 石室想定復元図	46	fig. 85 Na22地点2号墳全景〔写真〕	83
fig. 42 5号墳〔写真〕	48	fig. 86 Na22地点2号墳石室平・立面図	84
fig. 43 6号墳〔写真〕	48	fig. 87 Na22地点3号墳石室〔写真〕	85
fig. 44 7号墳〔写真〕	48	fig. 88 Na22地点3号墳石室平・立面図	86

fig. 89	調査地点位置図	89	fig.135	調査地点位置図	125
fig. 90	遺構平面図	90	fig.136	埴輪棺出土状況全体図	126
fig. 91	SB 01 平・断面図	91	fig.137	1号棺出土状況図	127
fig. 92	SB 02 平・断面図	91	fig.138	1号棺出土状況図	127
fig. 93	SB 03 平・断面図	92	fig.139	1号棺人骨出土状況図	128
fig. 94	SB 04 平・断面図	92	fig.140	1号棺人骨出土状況〔写真〕	128
fig. 95	SD 01 出土土器実測図	93	fig.141	1号棺人骨出土状況〔写真〕	128
fig. 96	土坑出土土器実測図	94	fig.142	2号棺出土状況図	129
fig. 97	IV - 4 区遺構平面図	95	fig.143	2号棺出土状況図	129
fig. 98	調査地点位置図	96	fig.144	1・2号棺出土状況〔写真〕	130
fig. 99	IV - 4 区出土土器実測図	97	fig.145	調査地点位置図	131
fig.100	VI - VII区出土土器実測図	98	fig.146	1号棺粘土被覆状況	132
fig.101	XI区遺構平面図	99	fig.147	1号棺出土状況	132
fig.102	SB 01 平・断面図	100	fig.148	1号棺人骨出土状況	133
fig.103	SB 01 全景〔写真〕	100	fig.149	1号棺人骨出土状況〔写真〕	133
fig.104	XI区出土土器実測図	101	fig.150	1号棺人骨出土状況〔写真〕	133
fig.105	IX ~ X区出土土器実測図	103	fig.151	2号棺出土状況	134
fig.106	調査地点位置図	105	fig.152	2号棺人骨出土状況	134
fig.107	調査区全体図	106	fig.153	2号棺出土状況〔写真〕	135
fig.108	遺構平面図	107	fig.154	2号棺人骨出土状況〔写真〕	135
fig.109	出土遺物実測図	108	fig.155	正立した埴輪出土状況	135
fig.110	調査地点位置図	109	fig.156	調査地点位置図	137
fig.111	第1遺構面平面図	110	fig.157	第2トレンチ全景〔写真〕	138
fig.112	第1遺構面足跡〔写真〕	110	fig.158	SX 01〔写真〕	138
fig.113	第1遺構面足跡〔写真〕	110	fig.159	第1・2トレンチ第1・2遺構面 平面図	139
fig.114	第2遺構面平面図	111	fig.160	第3トレンチ第2遺構面平面図	140
fig.115	第2遺構面 SX 01〔写真〕	112	fig.161	SB 01 ~ 04 平面図	141
fig.116	第3遺構面平面図	112	fig.162	第4トレンチ第1遺構面平面図	142
fig.117	出土土器実測図	113	fig.163	第4トレンチ第2遺構面平面図	142
fig.118	SX 01 出土土器実測図	114	fig.164	調査地点位置図	143
fig.119	調査地点位置図	115	fig.165	調査区位置図	144
fig.120	第1遺構面平面図	116	fig.166	調査区全体図	144
fig.121	SK 01〔写真〕	117	fig.167	埴輪円筒棺 3平・断面図	145
fig.122	ST 01〔写真〕	117	fig.168	埴輪円筒棺 3出土状況〔写真〕	145
fig.123	縄文時代流木〔写真〕	118	fig.169	埴輪円筒棺 3出土状況〔写真〕	145
fig.124	アカホヤ火山灰中の溝筋〔写真〕	119	fig.170	円筒埴輪・朝顔形埴輪実測図	146
fig.125	アカホヤ火山灰中の溝〔写真〕	119	fig.171	調査地点位置図	147
fig.126	縄文人の足跡	120	fig.172	調査区全体図	148
fig.127	縄文人の足跡〔写真〕	120	fig.173	SB 01 平面図	149
fig.128	調査地点位置図	121	fig.174	中央トレンチ全景〔写真〕	149
fig.129	調査区全体図	122	fig.175	南部トレンチ東部〔写真〕	149
fig.130	1号棺出土状況〔写真〕	123	fig.176	SB 02 平・断面図	150
fig.131	1号棺粘土被覆状況	123	fig.177	SB 02 全景〔写真〕	150
fig.132	1号棺小口・透孔閉塞状況	123	fig.178	SB 03 全景〔写真〕	150
fig.133	1号棺透孔閉塞除去	124	fig.179	SB 03 平・断面図	151
fig.134	1号棺人骨出土状況	124			

fig.180	SB 04、SA 01・02 平面図	152
fig.181	SK 16 半・断面図	153
fig.182	出土土器実測図	154
fig.183	調査地点位置図	155
fig.184	調査区Ⅰ第1（左）・第2（右） 造構平面図	156
fig.185	調査区Ⅱ第1（左）・第2（右） 造構平面図	159
fig.186	SE 201 半・立面図	160
fig.187	SE 201 出出土器実測図	161
fig.188	調査区Ⅲ造構面平面図	162
fig.189	調査区Ⅳ第1造構面平面図	162
fig.190	調査区Ⅳ出土土器実測図	163
fig.191	調査地点位置図	165
fig.192	第6区第1～3造構面平面図	167
fig.193	第13区造構面平面図	170
fig.194	第15・16区第1造構面平面図	172
fig.195	第17区第12造構面平面図	173
fig.196	しがらみNo.4 半・立面図	174
fig.197	しがらみNo.5 平面図	175
fig.198	調査地点位置図	177
fig.199	第6・7・8トレンチ造構平面図	180
fig.200	第8トレンチ全景〔写真〕	181
fig.201	調査地点位置図	183
fig.202	造構平面図	184
fig.203	SR 01 出土土器実測図	184
fig.204	SR 02 出出土器実測図	185
fig.205	SX 01・02 平・断面図	187
fig.206	SX 01・02 出出土器実測図	188
fig.207	SD 01 出出土器実測図	189
fig.208	調査地点位置図	191
fig.209	14トレンチ水田畦畔	194
fig.210	SX 401・402 平・断面図	198
fig.211	第18トレンチ第6造構面井堰平・ 立面図	200
fig.212	SB 01 平・断面図	202
fig.213	SB 02 平面図	203
fig.214	SB 03 平・断面図	203
fig.215	SB 04 平面図	203
fig.216	調査地点位置図	205
fig.217	調査地区割図	206
fig.218	第1造構面平面図	207
fig.219	掘立柱建物群平面図	210
fig.220	第2造構面平面図	211
fig.221	第3・4造構面平面図	213
fig.222	SD 205 出出土器〔写真〕	214
fig.223	調査地点位置図	215
fig.224	調査地点位置図	216
fig.225	調査地区全体図	217
fig.226	SB 01 平・断面図	218
fig.227	北区試掘地域全体図	220
fig.228	道場八多地区試掘調査地点	221
fig.229	道場八多地区試掘調査地点	222
fig.230	八多地区試掘調査地点	223
fig.231	淡河地区試掘調査地点	224
fig.232	淡河地区試掘調査地点	225
fig.233	西区試掘地域全体図	226
fig.234	頭高山遺跡試掘調査地点	227
fig.235	頭高山遺跡出土弥生土器実測図	228
fig.236	頭高山遺跡出土弥生土器実測図	229
fig.237	頭高山遺跡出土上師器・須恵器 実測図	229
fig.238	松本地區試掘調査地点	230
fig.239	大谷遺跡試掘調査地点	231
fig.240	野手西方地区試掘調査地点	232
fig.241	上池地区試掘調査地点	232
fig.242	西求女塚古墳丘断層断面土層転写 パネル〔写真〕	233
fig.243	本山北遺跡出土鉄製紡錘車の出土 直後の状態〔写真〕	234
fig.244	本山北遺跡出土鉄製紡錘車のX線 透過写真〔写真〕	234
fig.245	北青木遺跡出土青銅鏡1〔写真〕	234
fig.246	北青木遺跡出土青銅鏡2〔写真〕	234
fig.247	西求女塚古墳出土鐵織處理前〔写真〕	235
fig.248	同左X線透過写真画像強調像〔写真〕	235
fig.249	同左処理後〔写真〕	235
fig.250	繊維付着青銅鏡の窒素ガス封入作業 〔写真〕	235
fig.251	鉄製品付着土砂を慎重にアルコール を使って取り除く〔写真〕	235
fig.252	舞子浜遺跡出土人骨のクリーニング 作業〔写真〕	236
fig.253	舞子浜遺跡出土人骨に付着していた 繊維（？）の実体顕微鏡写真〔写真〕	236

I. 平成 5 年度 事業の概要

1. 普及啓発

事業

〔神戸市埋蔵文化財センター〕

本年度はアーバンリゾートフェア KOBE '93 が開催された。これは「神戸が目指すアーバンリゾート都市づくりの一つの契機として、特定の会場を定めず、まち全体を舞台に新たなまちづくりを体験していただき、そこで得られた提案・提言を新しい神戸の魅力と活力の創造に生かしていくこと」を目的に開催された。埋蔵文化財センターにおいてもその一環として、企画展示「地下に眠る神戸の歴史展IX」、「古代人と動物」を開催した。

「地下に眠る神戸の歴史展」は、昭和55年度に第1回目を旧神戸市立考古館で開催し、今回で第9回目を数える。平成2~4年度の市内出土遺物を中心に、4月27日から6月6日まで開催し、10,609人の入館者があった。また、この展示期間中の5月16日に、立命館大学 和田晴吾教授による講演会「古代山陽道沿いの古墳」を開催した。聴講者は120名であった。

「古代人と動物」は、縄文時代以来の人と動物の関わりをテーマにし、古代の人々が表現した動物に関する遺物を展示した。8月17日から9月26日まで開催し、9,530人の入館者があった。また、この展示期間中の9月12日に、奈良国立文化財研究所 松井 章主任研究官による講演会「古代日本人の動物観」を開催した。聴講者は140名であった。

館外での活動として、総合運動公園で5月1日に開催された花のフェスタ、10月10日に開催されたグリーンフェスタに参加し、埋蔵文化財センターの紹介展示をした。

開館3年度目を迎えた本年度の入館者数は、昨年度に比較し大きな変動はなく、45,320人であった。

〔文化財保護強調週間の催し〕

大歳山遺跡公園（垂水区西舞子4丁目）では例年どおり、11月1日から11月7日までの間、復原した竪穴住居の内部の公開とともに、古代人の生活の一部を実際に体験できるよう、舞踊による火おこし、臼・杵による脱穀等を行った。また、火おこしができた参加者には、「古代人認定書」を配付した。なお、7日間の参加者は1,300名であった。

〔地域活動への参加〕

市内各地の公民館や学校では、さまざまな地域・文化活動が行われているが、各地域の歴史を地元の方々に知りていただくことを目的に、周辺遺跡の出土遺物や写真パネルの展示会を開催している。今年度は以下の場所で、文化財展を開催した。

(1) 西区玉津南公民館 「伊川谷の埋蔵文化財展」(5月22日~5月28日)

今年度で9回目の文化財展で、同公民館の近隣に位置する伊川谷町内所在遺跡から出土した遺物を展示した。

(2) 北区長尾町公民館 「第8回長尾町埋蔵文化財展」(11月1日~11月3日)

長尾町内出土の遺物および遺構のパネル写真等を展示了。

(3) 狩口地域センター 「狩口台きつね塚古墳の出土遺物展」(8月5日～)

垂水区狩口台一帯が、住宅街区整備事業により大規模改変を受けるため、埋蔵文化財調査が長年にわたり継続されてきた。しかし、当事業地内に所在するきつね塚古墳は、当初より保存を図るために範囲確認調査が実施され、住宅街区整備事業の完成で、遺跡公園として古墳の復原整備を行った。

調査の過程で出土した遺物を、現地で展示するため、近接地に建設された地域センター内に、常設展示した。

〔現地説明会の開催と資料配付〕

- (1) 舞子浜遺跡第5次調査 墓輪棺の内部に人骨が良好な状態で残存していたため、市政記者クラブに資料配付をした。(4月22日)
- (2) 西求女塚古墳 慶長元年の伏見地震で崩壊した竪穴式石室と出土した青銅鏡11面を現地説明会で公開した。当日の参加者は3,200名であった。(7月11日)
- (3) 舞子浜遺跡第8次調査 墓輪棺の内部に人骨が良好な状態で残存していたため、市政記者クラブに資料配付をした。(平成6年1月31日)

〔刊行物〕

平成5年度の埋蔵文化財関係の刊行物は以下の6点である。

- | | |
|-----------------------|-----------|
| (1) 昭和63年度 神戸市埋蔵文化財年報 | 額価 2,000円 |
| (2) 平成3年度 神戸市埋蔵文化財年報 | 額価 2,500円 |
| (3) 高塚川古墳群 発掘調査概要 | 額価 800円 |
| (4) 出合遺跡 第27次発掘調査報告書 | 額価 1,200円 |
| (5) 地下に眠る神戸の歴史展 | 額価 200円 |
| (6) 古代人と動物 | 額価 300円 |

2. 文化財

調査事業

本年度の埋蔵文化財発掘調査件数は、前年度までに比べ10件程度の増加を示し、合計86件であった。発掘調査面積（底地面積）は51,784m²、複数造構面での延べ発掘調査面積は85,313m²であった。その調査に要した経費は、およそ12億4千1百万円であった。

開発事業等に伴う埋蔵文化財分布調査依頼は261件で、それに基づく試掘調査は211件であった。埋蔵文化財分布調査依頼の件数に比し、試掘調査件数が多いのは、都市化した部分における遺跡の存否確認に、試掘調査が最も有効な手段との認識から、その徹底がはかられているからである。その結果によって、周辺部のみならず市街地の遺跡数は年々増加している。

原因者別の比率は、発掘調査面積で比較すると、公共事業に伴うものが94%と圧倒的に多くを占める。平成4年度では85%、同3年度では68%で、経済状況の変化と開発行為の原因者が密接に結びついていることがよくわかる。またその結果、民間開発業者が主として資本投資をしてきた、東灘区から垂水区までの市街地化されている海岸沿いの地域での

調査が減少し、周辺部になる西・北区で調査面積の75%を占めるようになった。

3. 市内発掘 調査の概要 本年度発掘調査で最も注目されたのは、西求女塚古墳の堅穴式石室の発掘であった。後円部（平成6年度調査で後方部と判明）墳頂の発掘で、石室石材や被覆粘土らしきものを検出したが、異様な状況であったため調査は難航した。しかし、その「異様な状況」は、調査の進捗とともに、古墳の墳丘が慶長元年（1596年）の伏見地震によって地滑りを起こし、石室が崩壊していたことに起因するものであることが判明した。崩落した石室石材の間隙からは、三角縁神獣鏡7面を含む青銅鏡11面が出土した。昭和60年度の調査で出土した1面と合わせ、計12面となった。石室は、ほとんどその原形を留めていないが、一部築造当初の形態を残している部分から、鐵、刀、劍、槍、ヤスなどの鉄製品が出土した。

西求女塚古墳の他にも、古墳に関連する発見が相次いだ。西岡本遺跡第3次調査では、民家の庭から5世紀後半の前方後円墳かと考えられる墳丘の一部と、円筒埴輪・形象埴輪が出土した。

郡家遺跡下山田地区第4次調査では、7世紀代の横穴式石室2基、小石室1基が出土した。また、北神ニュータウン内第21地点遺跡の丘陵頂部からは、6世紀末から7世紀初の横穴式石室が3基出土した。

これらの新たに発見された古墳は、いずれも古くに墳丘が削平されていて、その存在が予想されていなかった。市街地、丘陵地を問わず、綿密な調査の必要性を改めて知らされる事例であった。

舞子浜遺跡では、本四架橋関連工事に伴う第5～8次調査で、埴輪棺が8基出土した。この遺跡では、昭和35年に下水道工事で偶然に埴輪棺が発見されていたが、その後調査の機会もなく、30数年ぶりの出土であった。いずれの調査も、工事に関連する小範囲での発掘であることから、この付近砂浜一帯にはかなりの数量の埴輪棺が埋置されていると予想されている。

以上の他に、縄文時代遺跡では都賀遺跡第4次調査と祇園遺跡で早期押型文土器が出土した。市内における縄文遺跡は、調査深度や調査方法の変化とともに、近年徐々に増加している。

弥生時代遺跡では、明石川流域で中期の高地性集落である大谷遺跡が発見された。これまで、全く遺跡の存在が知られていなかった丘陵であるが、大規模な試掘調査によって発見されたものである。遺跡の中心部分は現状保存される。明石川およびその支流域の高地性集落は、10遺跡を超える。

歴史時代遺跡では、土地改良事業に伴い淡河・萩原城の発掘調査が開始された。この城郭は、13世紀後半に築城され、16世紀後半に廃城になるまでの300年間、歴史の舞台にたびたび登場した中世城郭である。現況は、本丸・二の丸・南丸・西丸・出丸・家臣屋敷・野々垣廻などの地名を残すとともに、地形の保存状態も極めて良好である。事業者に対し、日下、地形の現状保存を要望している。

以上の他に、数多くの遺跡の発掘調査が実施され、様々な成果を得たが、先の大谷遺跡のほかには、積極的に保存された遺跡はない。

平成5年度埋蔵文化財発掘調査一覧表 (1)

%	調査名	所在地	実施主体	調査担当者	探査面積 延長面積	調査期間	調査内容	調査原因
1	北青木通路第3次調査	東灘区北青木1丁目	神戸市立スポーツ教育公社	吉本宏明 石鳥三和	2,670m ²	5.11. 8~ 6. 3.31	弥生前段~中世の土坑・ピット	市営住宅建設
					5,340m ²			
2	漆江北町遺跡	東灘区漆北町	神戸市教育委員会 内藤 俊哉		50m ²	5. 7. 5~ 5. 7.19	古墳時代~中世の遺物包含層	共同住宅建設
3	市口通路第2次調査	東灘区木山北町1 丁目	神戸市教育委員会	吉山直人 吉本宏明	330m ²	5. 4. 1~ 5. 7.16	古墳時代の土坑、奈良時代の土坑、	市営計画道路中野線
							中世のピット	
4	木山遺跡	東灘区木山南町8 丁目	神戸市教育委員会	吉山直人 石鳥三和			遺物整理作業	立候改修
							金谷ビル	
5	木山北遺跡第2次調査	東灘区木山北1丁目	神戸市教育委員会	内藤 俊哉	65m ²	5. 9.26~ 5. 11. 4	古墳時代の縄穴住居・土坑、平安時代の木構築、中世の墓込み・ピット、シカガ (ST-01)、鐵式土器	共同住宅建設
					120m ²			
6	西岡本通路第3次調査	東灘区西岡本5丁目	神戸市教育委員会	吉山直人	80m ²	5. 10.29~ 5. 12.13	古墳時代中期の古墳調丘	個人住宅建設
							埴輪	
7	西岡本通路第3次調査	東灘区西岡本5丁 11	神戸市教育委員会	吉山直人	275m ²	5. 10.18~ 5. 11.16	古墳時代後期の自然成長、平安時代の縄穴住居、中世末~近世初期の採石址	共同住宅建設
					835m ²			
8	住吉町通路第16次調査	東灘区住吉町6 丁目	神戸市教育委員会	谷川 誠	30m ²	6. 3. 2~ 6. 3. 7	古墳時代後期の堅穴住居、土坑、ピット	東灘山手地区土地区画整理
							廻り塀	
9	郡家遺跡城の堀地区 堅山寺跡	東灘区御影町御影 字城の堀	神戸市教育委員会	西岡 執司	30m ²	5. 6. 28~ 5. 10. 8	弥生後期~古墳後期の柱穴・洗掘、7世紀の古墳3基、平安時代の堅穴住居	共同住宅建設
					1,605m ²		7世紀の古墳3基、平安時代の堅穴住居	
10	郡家遺跡下山田地区 第4次調査	東灘区御影町御影 字下山田	神戸市教育委員会	山口 美正	535m ²	5. 6. 28~ 5. 10. 8	弥生後期~古墳後期の柱穴・洗掘、7世紀の古墳3基、平安時代の堅穴住居	共同住宅建設
					1,605m ²			
11	西家遺跡第16次調査	東灘区御影町御影 字西家	神戸市教育委員会	谷川 誠	30m ²	6. 9.26~ 5.10.14	古墳時代後期の流路、中期の廻り塀	個人住宅
					90m ²		路、後期の遺物包含層、鉢式土器	
12	郡家遺跡第17次調査 第12次調査	東灘区御影町御影 字岸ノ坪	神戸市立スポーツ教育公社	井尻 格	15m ²	5.10.28~ 5.11. 2	古墳時代前段の廻り塀	東灘山手地区土地区画整理
13	西家遺跡第5次調査	東灘区御影町御影	神戸市教育委員会	安田 達 松林 宗典 石鳥二和	443m ²	5. 4. 5~ 5. 9.10	池掘で崩壊した堅穴式石室、中国鏡12面、鉄製品、鋳工製筋隠形瓦製品	遺跡新規探査
					790m ²			
14	都賀遺跡第4次調査	灘区都賀町4丁目	神戸市立スポーツ教育公社	西岡 執司	160m ²	5. 4. 12~ 5. 7.31	縄文早期遺物、弥生中期後期土坑、堅穴式住居、奈良~鎌倉の土坑	市営改良住宅建設
					790m ²			
15	日暮遺跡第5次調査	中央区日暮5丁目	神戸市教育委員会	内藤 俊哉 川上 審志	1,350m ²	5. 4. 1~ 5. 7. 5	中世の堅穴住居・石組み遺構、漢	老人健センター化 建設
					2,000m ²	6. 1. 6~ 6. 1.25	唐物	
16	日暮遺跡第7次調査	中央区東園町1丁目	神戸市教育委員会	井尻 格	190m ²	5.11. 2~ 6. 2. 4	古墳時代前期の堅穴住居・土坑、墓	個人住宅建設
					670m ²		石遺構・ピット	
17	堺本通路第2次調査	兵庫区堺本通5丁目	神戸市教育委員会	吉山直人 原藤 宏	730m ²	6. 2. 3~ 6. 4. 31	縄文時代後期の廻り塀、弥生時代中期の堅穴住居・土坑、墓	民間再開発
							古墳時代の土坑、中世のピット・土坑	
18	堺本通路第3次調査	兵庫区堺本通5丁目	神戸市教育委員会	吉山直人 原藤 宏	270m ²	6. 1. 13~ 6. 3.22	純文時代の廻り塀、弥生時代の廻り塀	神戸三田通路建設
					405m ²		廻り塀・土坑	

平成5年度埋蔵文化財発掘調査一覧表 (2)

No	調査地名	所在地	調査主体	調査担当者	測量面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
20	神・荒田町遺跡 第11次調査	兵庫県尼崎市2丁目	神戸市スポーツ教育公社	思田昌正 阿部敬生	1,152m ² 1,152m ²	5, 4, 1~ 5, 5, 23	桃文時代後期の野廬穴・墓	出土地下鉄車両建設
21	有野地区	北区有野町字福谷 北	神戸市スポーツ教育公社	井川 恒 教育公社	130m ² 130m ²	5, 7, 28~ 5, 8, 12	試掘調査 文化財なし	有野福祉施設整備
22	日下部北遺跡第3次調査	北区淡路町下部 八多中遺跡	神戸市教育委員会 教育公社	菅本 喜明 菅本 喜明	396m ² 446m ²	5, 5, 6~ 5, 7, 10	奈良~平安の井戸・溝・土坑・柱穴 鎌倉時代の溝・土坑・井戸	淡路三木三田御召多遺段
22-2	上小名町遺跡	北区八多町上小名 出	神戸市教育委員会 教育公社	菅本 喜明 菅本 喜明	185m ² 185m ²	5, 5, 6~ 5, 7, 10	奈良~平安の溝・土坑・ピット・溝 ち込み、鎌倉時代の溝・土坑	淡路三木三田御召多遺段
23	日下部遺跡	北区淡路町日下部 八多中遺跡	神戸市スポーツ教育公社	口哲博 教育公社	140m ² 140m ²	5, 11, 4~ 5, 11, 19	試掘調査 古墳・古墳・中世の遺物包含層	土塚又園整理
24	宅原遺跡有井地区 第3次調査	北区長尾町宅原 五反田	神戸市スポーツ教育公社	内間誠司 阿部敬生	525m ² 525m ²	5, 10, 12~ 5, 11, 20	古墳時代後期の土坑・河戸時代の土 坑・ピット・苔状地形	長尾小学校校舎改築
*	宅原跡跡	北区長尾町宅原	神戸市教育委員会	菅本 喜	254m ²	5, 4, 5~ 5, 5, 26	弥生時代の遺物 古墳時代のピット・遺物包含層	下水道敷設 試掘
25	宅原跡跡有井地区 第4次調査	北区長尾町宅原 五反田	神戸市教育委員会 教育公社	山本 慶和 阿部敬生	220m ² 220m ²	6, 3, 7~ 6, 3, 31	古墳時代のピット 中世の落ち込み	下水道敷設 発掘
26	北神ニューエクタウン第21・ 22地点遺跡	北区無垢町上津 上津	神戸市教育委員会 教育公社	谷口正俊 松林安彦 岡田義弘 岡田義弘	7,356m ²	5, 4, 5~ 5, 9, 9 5, 4, 5~ 5, 9, 9 5, 4, 5~ 5, 9, 9 5, 4, 5~ 5, 9, 9	古墳時代後期の横穴式石室塙3基、 中世近世の柱穴・土坑。近世以降洞 址2	北神戸第2地区住宅 造成
27	龍ヶ汗遺跡第3次調査	北区長尾町上津字 龍ヶ汗	神戸市スポーツ教育公社	内間巧次 阿部敬生	1,206m ² 1,065m ²	5, 4, 1~ 5, 9, 25 5, 4, 1~ 5, 9, 25	9~10世紀後半の獨立柱遺物・溝 ・土坑	市道長尾灘遺跡改良
27-2	三事谷遺跡	北区長尾町上津字 内宝冠	神戸市スポーツ教育公社	松林安彦 教育公社	650m ²	6, 5, 6~ 6, 6, 10	平安時代中葉の木棺墓、獨立柱遺物	市道長尾灘遺跡改良
28	上小名町遺跡	北区八多町上小名 田	神戸市教育委員会	山本 雅 山口 美正 池田 敏	2,280m ²	5, 12, 2~ 6, 1, 26	古墳後期の堅穴居・平安~鎌倉 初の獨立柱遺物・土坑・溝・流路	土地改良
29	古尾遺跡 附物遺跡	北区八多町古尾 附物	神戸市教育委員会	松林安彦	756m ²	6, 4, 5~ 6, 4, 26	試掘調査 中世の遺構・遺物	土地改良
*	中遺跡	北区八多町中・下 小名町	神戸市教育委員会 教育公社	阿部敬生	120m ²	5, 6, 27~ 6, 3, 10	中世の土坑・落ち込み・ピット 中世の遺物包含層	下水道敷設 試掘
30	深谷遺跡第2次調査	北区八多町深谷字 西井	神戸市スポーツ教育公社	内間誠司	820m ²	5, 11, 29~ 6, 2, 4	鎌倉~室町時代の土坑・溝、 江戸時代の土坑	土地改良
31								江戸時代の土坑
32		北区八多町中・有 野町二郎	神戸市スポーツ教育公社	阿部敬生	140m ²	5, 12, 20~ 5, 12, 28 6, 2, 2~ 6, 2, 4	中世の土坑	北神戸田圃スポーツ 公園建設
33	古倉山跡	北区八多町新風	神戸市教育委員会	樋原 実	120m ²	5, 7, 28~ 5, 8, 12	試掘調査 工事区域遭跡なし	道路新規修繕

平成5年度埋蔵文化財発掘調査一覧表 (3)

No	調査名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延縦面積	調査期間	調査内容	調査原因
34	篠ヶ坪道跡第4次調査	北区大沢町西原	神戸市スポーツ 教育公社	井尻 格	180m ²	5, 6, 7~ 5, 6, 18	トレンチ調査 中後の水田	山田三田園遺跡改良
35	李氏墓	北区大沢町西原丁 宇鳴	神戸市教育委員会	井尻 格	110m ²	5, 4, 18~ 5, 4, 27	試掘調査 文化財なし	土地改良
36	淡河城跡第1次調査	北区淡河町森原字	神戸市教育委員会	黒田 春花	1,750m ²	3, 6, 7~ 3, 12, 11	中後城郭・礎石柱建物・廻列・溝・ 木格柵・集石・土坑墓 (10cm)・塗 穴住居 (出土?)	土砂改良
37		淡河町		淡田 敏				
38	花原城跡第2次調査	北区淡河町木津	神戸市スポーツ 教育公社	井尻 格	100m ²	5, 7, 5~ 5, 7, 22	弥生時代後期の備 中貝の土坑・落ち込み	北須田改修
39	筑紫道路第1次調査	北区淡河町東道字 筑前	神戸市スポーツ 教育公社	藤井 太郎	800m ²	5, 7, 8~ 6, 8, 11	中世~近世の油溝・土塁	淡河町公廻地設
40	須尾尾跡	北区淡河町南櫛屋	神戸市教育委員会	栗庭 空	1,200m ²	5, 4, 7~ 5, 5, 17	成層調査 中世唐・柱穴	土地改良
41	二条町道跡第2次調査	長田区二条町6丁目	神戸市教育委員会	須藤 宏	40m ²	5, 9, 16~ 5, 9, 27	縄文時代晚期の袋形包谷層	店舗兼住宅
42		日			60m ²		中世の溝・柱穴	
43	五条町道跡第4次調査	長田区六番町5丁目	神戸市スポーツ 教育公社	阿部 敏生	270m ²	5, 10, 20~ 5, 12, 16	縄文時代後期の泥路・中貝の土坑・ 溝・ビット・近世の鉄・廻溝	五条町5丁住宅地区改
		日			810m ²		金	
44	司浜遺跡	長田区武庫道3丁目	神戸市スポーツ 教育公社	松林 実典	1,730m ²	6, 1, 11~ 6, 3, 30	古墳時代・平安時代・中世の遺物	真野小学校校舎改築
		日					近世の水田跡	
45	戎町遺跡第10次調査	須磨区大原町2丁目	神戸市教育委員会	便藤 宏	80m ²	5, 6, 8~ 5, 7, 22	弥生時代前期の遺物包谷層・弥生時・ 店舗建設	
46		日			250m ²		代中期の柱穴・中後?の独立柱建物	
47	戎町遺跡第11次調査	須磨区大原町2丁目	神戸市教育委員会	高山 直人	30m ²	5, 10, 12~ 5, 10, 27	弥生時代中期の土坑・ビット・中世・ 店舗併用住宅地設	
48		日			90m ²		の水田	
49	垂水・日向遺跡 第9次調査	垂水区日向1丁目	神戸市スポーツ 教育公社	丸山 優	300m ²	5, 9, 19~ 5, 10, 20	縄文時代早期の足跡・後期の流木群・ アカホヤ火山灰・廻溝	垂水駅東地区第2種
					1,300m ²		平安時代の独立柱建物	古街地再開発
50	垂水・日向遺跡 第10次調査	垂水区日向1丁目	神戸市スポーツ 教育公社	丸山 優	900m ²	5, 11, 16~ 6, 3, 19	縄文時代草鞋の足跡・後期の流木群・ アカホヤ火山灰・廻溝	垂水駅東地区第2種
					9,900m ²		平安時代獨立柱建物・燒土坑・木棺 墓	古街地再開発
51	五色原占跡	垂水区五色原	神戸市教育委員会	丹治 康明	1,000m ²	5, . . ~ 5, . .	古墳時代の溝 中世	遺物収集確認
52	君子浜遺跡第5次調査	垂水区東君子浜 子公園内	神戸市教育委員会	丸山 優	40m ²	5, 4, 15~ 5, 4, 26	埴輪円筒状1基 (4世紀末~ 5世紀 初)	君子浜古墳整備
					40m ²	5, 11, 2~ 5, 12, 6	埴輪円筒状2基 (4世紀末~ 5世紀 初)、瓦窓、ガラス小皿、鐵刀	関西電力電線移設

平成5年度埋蔵文化財発掘調査一覧表 (4)

No.	調査名	所在地	調査主体	調査担当者 延床面積	調査期間	調査内容	調査原因
53	舞子浜遺跡	垂水区東舞子町舞子公園内	神戸市立スポーツ教育公社	富山直人 300m ²	5. 7. 26 ~ 5. 8. 5	試掘調査 構造土器・埴輪	舞子多開拓整地
53-2	舞子浜遺跡	垂水区東舞子町舞子公園内	神戸市立スポーツ教育公社	庄本雅和 100m ²	6. 3. 22 ~ 6. 3. 25	試掘調査 構造土器・埴輪、弥生時代後期の遺物	舞子多開拓整地
54	舞子浜遺跡第6次調査	垂水区東舞子町舞子公園内	神戸市立スポーツ教育公社	谷正俊 200m ²	5. 12. 7 ~ 6. 2. 14	埴輪筒形埴輪2基(4世紀末~5世紀初)、区画塗	舞子浜遺跡水耕整地工事
55	高尾山古墳群	垂水区小東山	神戸市教育委員会	丹治康明 橋詰清孝		遺物整理作業	記念造成
56	高尾山遺跡	西宮区高尾町4丁目	神戸市立スポーツ教育公社	西園弓次 関野泰	1,316m ² 5. 9. 10 ~ 5. 12. 3	試掘調査 弥生時代中期の住居址、古墳状隆起中の立派址	学園都市建設
57	白木灘路第3次調査	西区伊川谷町西和	神戸市立スポーツ教育公社	安川道 施田毅 2,450m ²	6. 1. 17 ~ 6. 3. 31	古墳時代中期の上層部より、古墳時代後期の水田、平安時代の獨立柱建物	白木灘地区土地収回整理
58	白木灘路古墳	西区伊川谷町西和 李シンド山	神戸市教育委員会	山本雅和 205m ²	6. 2. 15 ~ 6. 3. 3	堆積円筒形1基	宅地開発
59	雪野遺跡	内区樋谷町菅野	神戸市教育委員会	井尻格 110m ²	5. 11. 5 ~ 5. 11. 10	試掘調査、古墳時代のピット・墓竈込み、中世のピット・遺物包含層	土地改良
60	源木遺跡	西区樋谷町菅野	神戸市立スポーツ教育公社	井尻格 30m ²	5. 11. 10 ~ 5. 11. 11	試掘調査 中世のピット・遺物包含層	小部羽石壁改修
61	松木遺跡	西区樋谷町松木	神戸市教育委員会	藤井太郎 80m ²	5. 4. 5 ~ 5. 4. 12	弥生時代の土坑 中世の遺構・遺物	土地改良
62	水谷遺跡	西区玉津町水谷	神戸市教育委員会	内藤俊哉 200m ² 250m ²	5. 8. 9 ~ 5. 9. 30	遺物址、落ち込み 近世~近代の柱列	共同住宅建設
63	高津櫛・同遺跡 第1次調査	西区玉津町高津櫛 宇附	神戸市教育委員会	原藤宏 350m ²	5. . ~ 5. .	東晉時代の櫛穴仕掛け、獨立柱建物、土坑、奈良時代の獨立柱建物、櫛穴	宅地造成
64	今津遺跡	西区玉津町今津	神戸市教育委員会	山口英正 40m ² 80m ²	5. 6. 8 ~ 5. 6. 15	中世の遺物群集 遺構なし	宅地開発
65	板谷遺跡	西区玉津町板谷	神戸市教育委員会	浅谷誠吾 1,010m ² 1,800m ²	5. 6. 16 ~ 5. 9. 2 5. 12. 7 ~ 6. 3. 31	弥生中期の土坑、古墳後期の獨立柱建物、井戸、余良堀跡、中世獨立柱建物	明石木見跡新造
66	新方遺跡	西区玉津町新方字 西内原	神戸市教育委員会	淡谷謙吾 54m ²	5. 4. 5 ~ 5. 4. 7	試掘調査 陥没・古墳・中世の遺物包含層	区画整理
67	新方遺跡	西区玉津町新方字 西力、上池	神戸市教育委員会	松林圭典 78m ²	5. 12. 18 ~ 5. 12. 24	試掘調査 中世の遺構・遺物	区画整理
68	二ツ星遺跡	西区玉津町二ツ星	神戸市教育委員会	前田伸久 840m ² 1,570m ²	5. 4. 1 ~ 5. 4. 30	弥生時代中期の土坑 平安時代後半の塹・土坑、ピット	土地区画整理

平成5年度埋蔵文化財発掘調査一覧表 (5)

番	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延焼立面積	調査期間	調査内容	調査原因
68	二ツ星遺跡 -2	西区玉津町二ツ星	神戸市教育委員会	前田 俊久	3,121m ²	5. 5. 1~ 6. 3.31	弥生時代後期の溝、古墳時代後期の	土地区画整理
				阿部 功	8,478m ²		しがらみ、平安時代末の櫛立柱建物	
69	二ツ星遺跡第3水筒塗 敷地	西区玉津町二ツ星	街神戸市スポーツ 教育公社	口野 博史	89af	5. 7.14~ 5. 8. 6	古墳時代の溝	小部明石灘造路改良
							古墳時代の整穴住居	
70	小山遺跡	西区玉津町小山	街神戸市スポーツ 教育公社	瀬木 輩	1,920m ²	6.11. 2~ 6. 3.31	弥生時代の土坑 古墳時代の整穴住居2・土坑・ピット	特定土地区画整理
71	吉田市遺跡	西区森友1丁目	神戸市教育委員会	前本 実羽	260m ²	5. 4.13~ 5. 4.20	試掘調査	玉津遺跡センター・松
							構造なし	張
72	持子遺跡	西区持子2丁目	神戸市教育委員会	谷 正俊	102m ²	5. 9.24~ 6. 9.29	中世の墓跡(14世紀?)	宅地造成
73	出合遺跡	西区玉坂台	神戸市教育委員会	後谷 風吾	230m ²	5. 4.19~ 5. 6. 4	5世紀末～6世紀の溝・流路・ピット 骨式系土器	出合地域福セントラル 建設
74	三津田中通路平野地区	西区平野町中津	神戸市教育委員会	橋松 信孝 川上 厚志	2,317m ²	5. 4. 5~ 6. 2.11	弥生時代溝、弥生末～古墳の整穴住	土地改良
				西井 大郎	10,251m ²	5.12.13~ 6. 2. 4	溝、古墳の流路、糞糞、中世の流路	
75	第7次調査	西区平野町下村	街神戸市スポーツ 教育公社	口野 博史 阿部 功	1,150m ² 3,300m ²	5.11.22~ 6. 3.25	構造の土坑・溝、弥生の整穴住溝、 溝、土坑、中世の櫛立柱建物、溝、 陶器	宮前田中通路委員会 建設
76	*津田中通路平野地区 第8次調査	西区平野町下村	街神戸市スポーツ 教育公社	川上 厚志 阿部 功	1,070m ²	5. 4. 5~ 6. 5.20	試掘調査、弥生土器・サヌカイト・ 石器・茎片刃刀斧	神戸ビーフ育成牧場 建設
77	大谷遺跡	西区平野町印跡	街神戸市スポーツ 教育公社	瀬木 誠	1,700m ²	5. 7. 5~ 5. 9.23	弥生時代中頃の櫛穴住溝・土坑・ピット	神戸ビーフ育成牧場 建設
				大谷	教育公社			
78	印跡遺跡	西区平野町印跡	街神戸市スポーツ 教育公社	内藤 俊哉	1,200m ²	5.12.17~ 6. 4.22	古墳時代の流路	野川明石灘造路 6年度施設
							7cの櫛立柱建物3棟・溝	
79	墨出遺跡	西区平野町墨出	街神戸市スポーツ 教育公社	丸山 真	18m ²	5.11. 8	縄文時代の土坑・ピット	夷和・青葉継続 建設
80	木添遺跡	西区伊野谷町木添	街神戸市スポーツ 教育公社	阿部 敏牛	32m ²	6. 1.13~ 6. 1.14	試掘調査	河原改修 建設
							寺跡小引の土坑・中世のピット	
81	佐古宮町遺跡	東灘区佐古宮町6 丁目	兵庫県教育委員会	水口 富夫	8af	5.11.12	試掘調査	島佐佐共能公社 住宅建設
							弥生時代匂香層	
82	花隈遺跡	中央区下山手通5 丁目	兵庫県教育委員会	平田 博幸 井本 有二	163m ²	5.12. 6~ 5.12.28	流路	(仮称)ひょうご花 と緑の文化創造施設 建設
83	兵庫津遺跡	兵庫区御崎木町1 丁目	兵庫県教育委員会	水口 富夫	18m ²	5. 9.21~	試掘調査	神戸税関御崎建設 建設
							文化財なし	
84	清水通り遺跡	北区八多町中	兵庫県教育委員会	久保 仁幸	1,076m ²	5. 5. 6~ 5. 7.19	中世 潟・土坑・柱穴	山陽日勤造路建設 建設
				仁尾 一人				

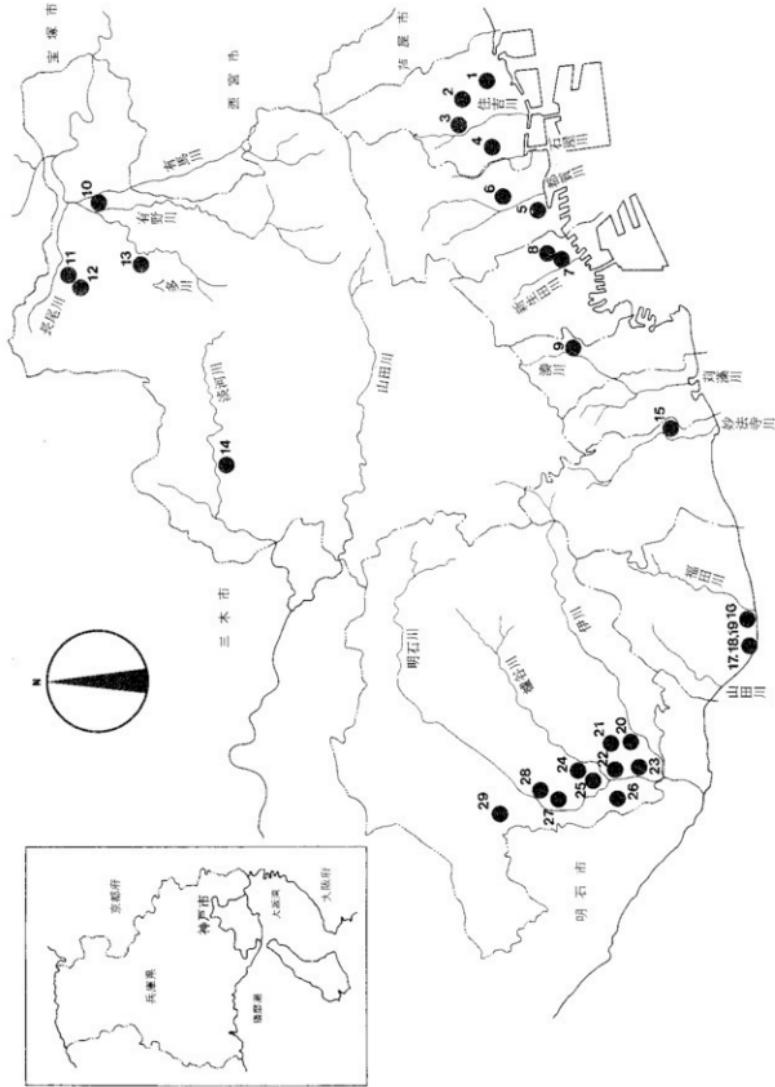
平成5年度埋蔵文化財発掘調査一覧表 (6)

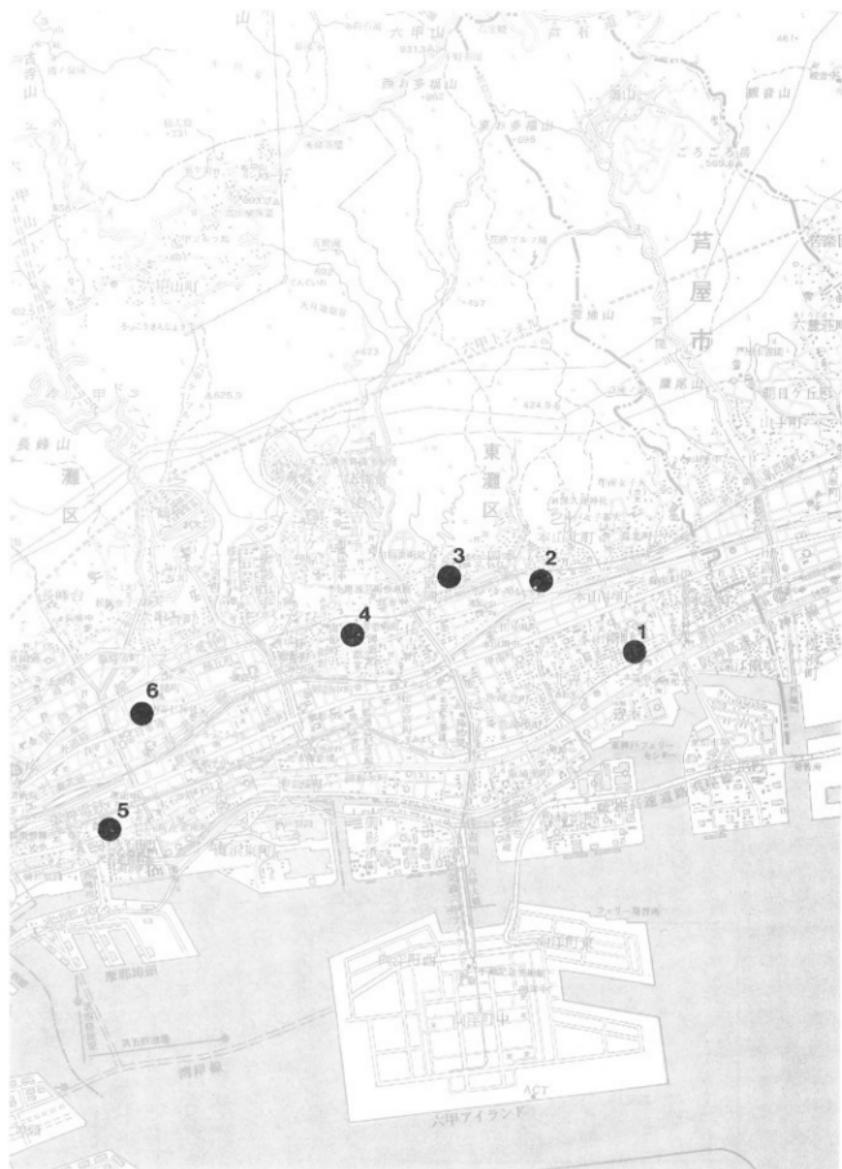
No.	調査路名	所在地	調査主体	調査担当者 監視者面積	調査期間	調査内容	調査原因
85	八多巾道跡	北区八多町中	兵庫県教育委員会	久保弘幸 仁尾一人	3,288m ²	5, 7, 30~ 6, 1, 7	古墳時代後期~中世(室町時代)に山陽自動車道建設 かけての集落跡 漢・柱穴・土坑
86	八多巾道跡(5地区)	北区八多町中	兵庫県教育委員会	荒木一宏 二坂謙吾 八木健太郎	135m ²	5, 10, 12~ 5, 10, 18	古墳時代後期~中世(室町時代) 山陽自動車道建設
87	小名田跡	北区八多町下小名 田	兵庫県教育委員会	久保弘幸 仁尾一人	386m ²	6, 1, 11~ 6, 3, 18	縄文時代(13世紀前半頃)の居住跡 山陽自動車道建設 宮殿
88	長板遺跡	西区伊川谷町長板 宇文郷	兵庫県教育委員会	西口和彦 藤原清尚 岸本一宏 森 美紀 三重根智香 中村古寿	2,381m ²	5, 6, 14~ 5, 9, 27	古墳時代 漢・整穴住居1棟 绳文時代中期末~後期前半 土坑多 数
89	神戸西バイパス第4・5	西区上脇字池中川、 池ノ内地	兵庫県教育委員会	西口和彦 藤原清尚 岸本一宏 森 美紀 三重根智香 中村古寿	351m ²	5, . . ~ 5, . .	試掘調査 弥生時代~中世の集落跡
90	神戸吉吉跡	西区寺出町田井	兵庫県教育委員会	藤原清尚 岸本一宏	1,688m ²	5, 6, 19~ 5, 11, 15	試掘調査 平安時代末~鎌倉時代 崖立建物3棟 全國町査 同時期の空堀に伴う灰坑
91	上脇遺跡	西区伊川谷町上脇 字中間地	兵庫県教育委員会	西口和彦 藤原清尚 岸本一宏 森 美紀 三重根智香 八木健太郎	3,879m ²	5, 10, 4~ 6, 3, 25	古墳時代中~後期~鎌倉時代の集落 跡 古墳時代 漢丸方形整穴住居15 棟 推 7世紀 掘立柱建物
92	長板遺跡	西区伊川谷町長板 字塩内	兵庫県教育委員会	西口和彦 藤原清尚 岸本一宏 森 美紀 三重根智香 八木健太郎	120m ²	5, 10, 4~ 6, 3, 25	試掘調査 中世の遺物包含層
93	郡家遺跡第9次調査	東灘区御影町御影 僅ノ坪	六甲山麓遺跡調査 会	古川久雄	340m ²	5, 4, 22~ 5, 6, 21	古墳時代崖立柱建物
					680m ²		共同住宅建設
94	吾妻塚跡第2次調査	中央区吾妻塚5丁目	六甲山麓遺跡調査 会	古川久雄	171m ²	5, 11, 10~ 6, 1, 21	平安時代の木棺墓
					342m ²		地域福祉センター建 築
95	本山遺跡	東灘区本山北町	淡津文化財協会	阿部嗣治	430m ²	6, 1, 6~ 6, 3, 1	中世の漢・上坑
					1,290m ²		共同住宅建設
96	八幡遺跡第2次調査	灘区八幡町	淡津文化財協会	村尾致人	297m ²	5, 4, 19~ 5, 5, 22	古墳時代の整穴住居・掘立柱建物
					594m ²		マンション建設
97	下小名田遺跡	北区八多町下小名 田	淡津文化財協会	村尾致人	800m ²	5, 8, 16~ 5, 9, 29	古墳時代の大漢
					1,600m ²		遺跡建設 平安時代の掘立柱建物・土坑・井戸

平成5年度埋蔵文化財発掘調査一覧表 (7)

No	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	面積(㎡) 延べ面積	調査期間	調査内容	調査原因
98	草原塗跡第5次調査	北区後河町草原	浜神文化財協会	村尾 政人	1,687m ²	5. 5.25 ~ 5. 6.13	平安~鎌倉時代の掘立柱建物・六角 形井戸	土地改良
99	萩原塗跡第6次調査	北区後河町萩原	浜神文化財協会	村尾 政人	1,316m ²	5.10.30 ~ 6. 1.12	平安時代末の掘立柱建物・井戸・土 坑	土地改良
100	萩原塗跡第7次調査	北区後河町萩原	浜神文化財協会	村尾 政人	530m ²	6. 1. 5 ~ 6. 3.24	鎌倉時代の窓・土坑 平安時代末の掘立柱建物・土坑墓	土地改良
101	路子浜塗跡	墨田区亥鼻子町	高山歴史学研究所	高山 正久	700m ²	5. 5.10 ~ 5. 7. 8	绳文土器・蛇骨枕	路子多聞塚発掘
102	新水日向塗跡	墨田区曳舟下町	妙見山麓遺跡調査 会	神崎 勝	3,150m ²	5. 4.26 ~ 5. 12.24	鎌倉時代の掘立柱建物 古墳時代の窓・掘立柱建物・整穴住居 弥生時代の整穴住居	市街地再開発事業
103	白木塗跡	葛区伊川谷町高柳 宇戸ノ内		眞野 修	500m ² 1,800m ²	6. 1.10 ~ 6. 3.18	鎌倉時代の掘立柱建物 古墳時代の四六住居・窓	土地区画整理事業
104	今津塗跡	西区三津町今津	高山歴史学研究所	高山 正久	2,800m ²	5.11. 1 ~ 6. 3.31	平安時代の掘立柱建物 室町時代の掘立柱建物	土地区画整理事業
105	日輪寺塗跡	西区玉津町小山	日輪寺塗跡調査会	古川 表彦	1,200m ²	5. 5.10 ~ 5. 7.16	平安時代の祭祀遺構・土坑・柱穴・ 清	市街地建設
106	玉津田牛塗跡第6次調査	西区平野町福中	浜神文化財協会	阿部 順治	480m ²	5. 5.10 ~ 5. 6.14	古墳時代の窓・土坑・柱穴	土地改良

平成5年度 神戸市埋蔵文化財調査位置図
(各遺跡の番号は掲載遺跡と一致)

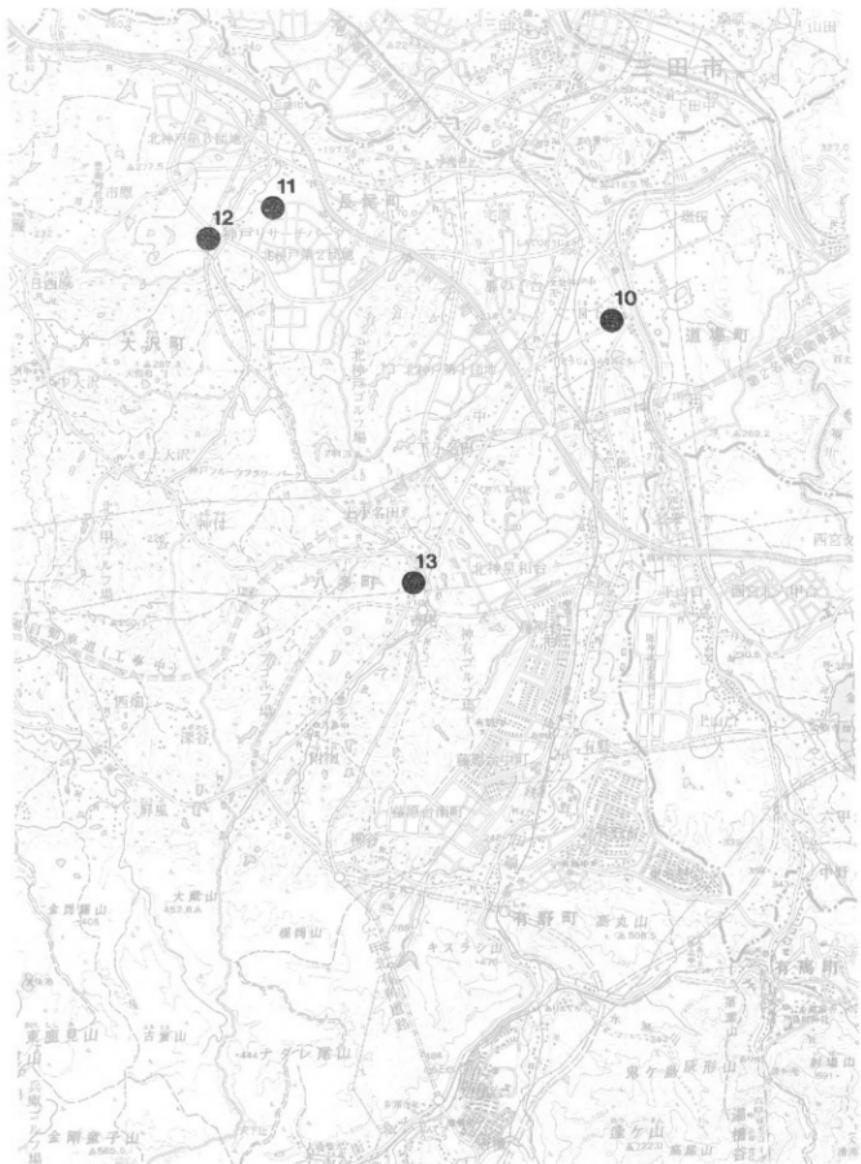




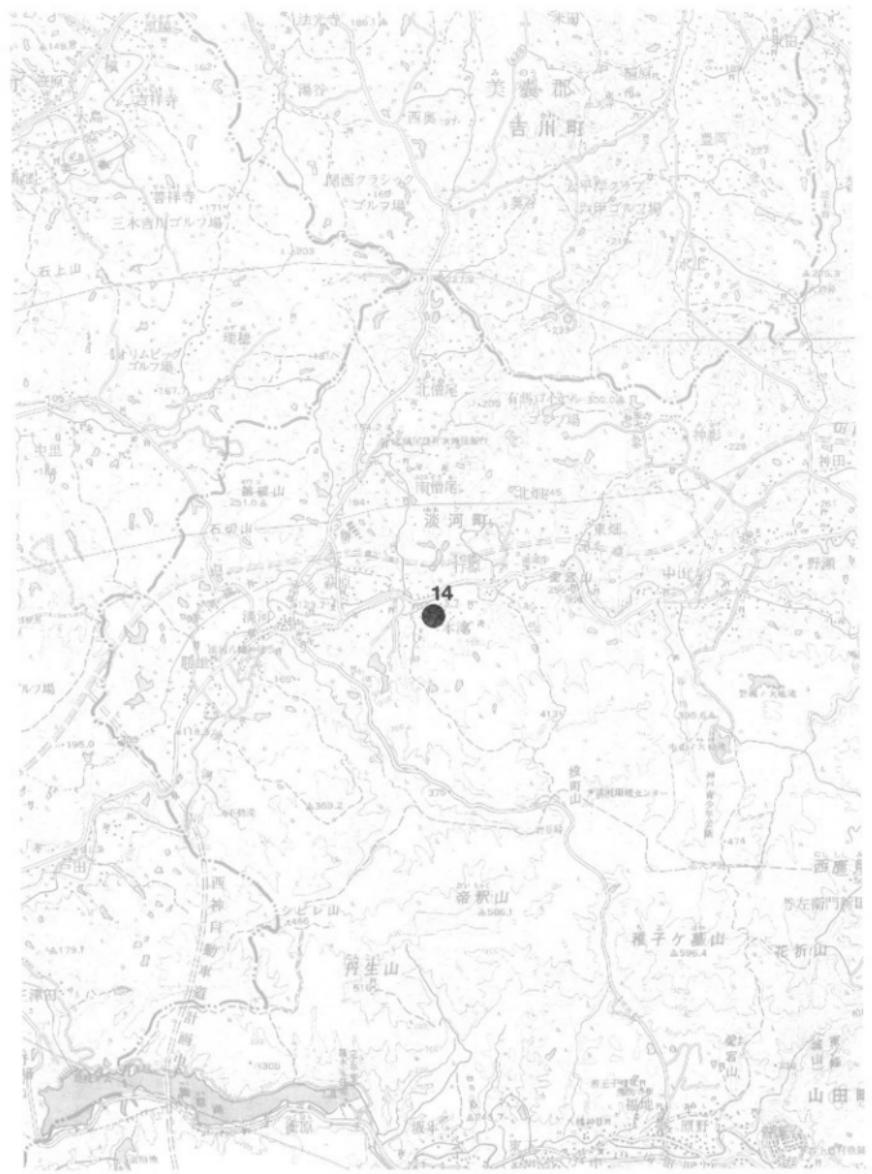
調査地点位置図 1



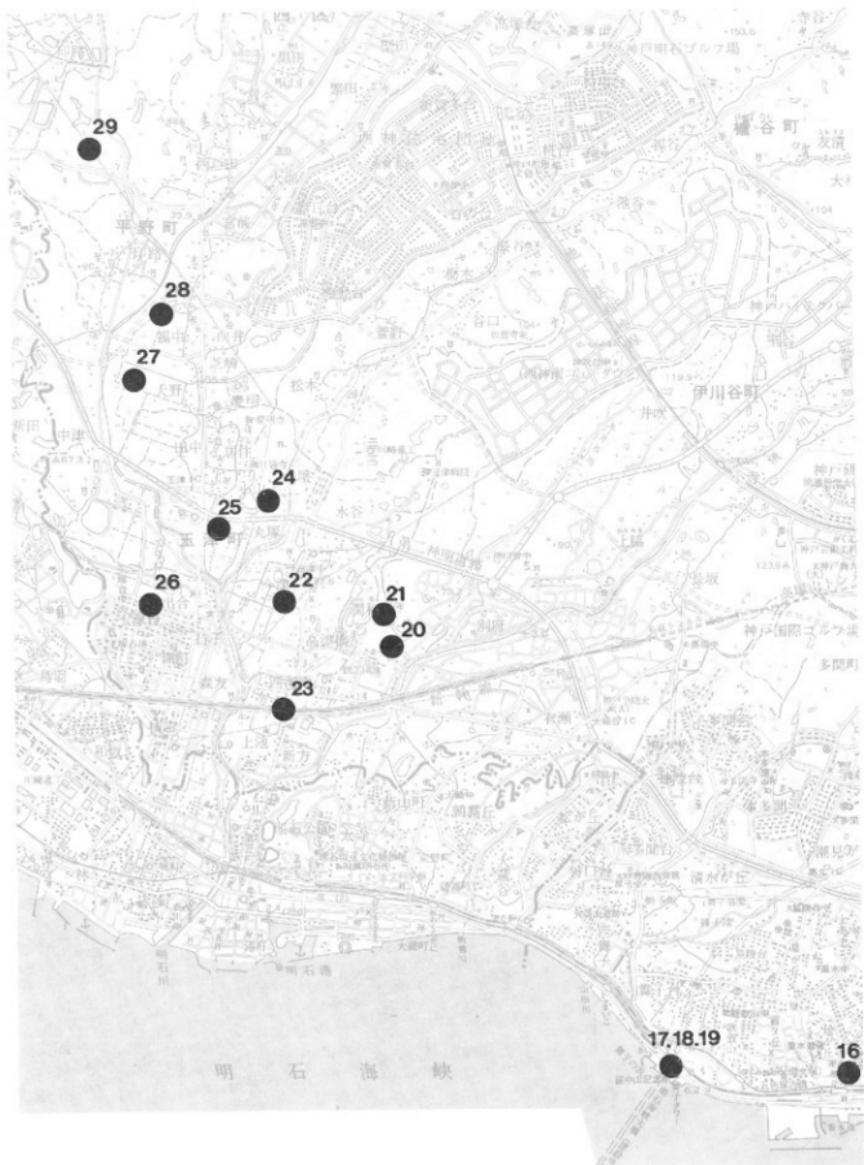
調査地点位置図 2



調査地点位置図 3



調査地点位置図 4



調査地点位置図 5

II. 平成5年度の発掘調査

1. 北青木遺跡 第3次調査

1.はじめに

昭和59年、県営住宅改築に際して遺跡の存在が確認され、兵庫県教育委員会により発掘調査が実施された。その結果、「砂堆」を形成すると思われる海成砂層の上面で、溝、土坑、杭により護岸整備された流路等が検出された。これらの遺構からはいずれも第1様式中段階の土器のみが出土したため、当遺跡は砂堆上に弥生時代前期中頃の一時期だけ営まれた、西摂地域で最も古い弥生集落のひとつと考えられている。

今回の調査は、上記の第1次調査地の東に隣接する地点で、市営住宅の建設に伴い実施した。

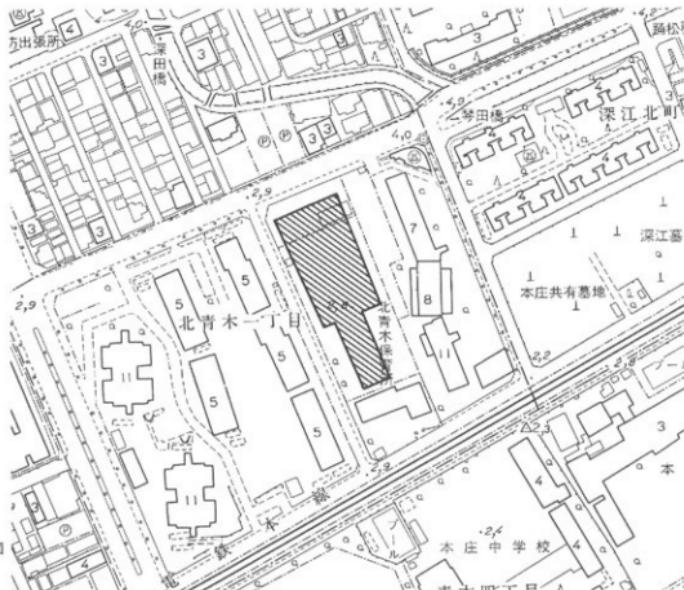


fig.1
調査地点位置図
1 : 2500

2. 調査の概要

調査に際し、調査区を南北に20mごとに区画し、南から順に1~5区とした。うち1区では、現代の擾乱層下で、古墳時代から中世にかけての土師器、須恵器を出土する包含層二層を検出し、その下層で第1遺構面を確認した。しかし調査地の中央、2~3区では、包含層下層には湿地性の粘土が堆積し、北側4~5区では包含層は確認できず、擾乱層直下で黑色砂を検出した。

第1遺構面 調査区の東南隅で、東西方向にのびる溝の一部を検出し、遺構名をSD01とした。遺構の大半が調査地の外となるため、規模、性格等の詳細は不明である。8世紀代と思われ

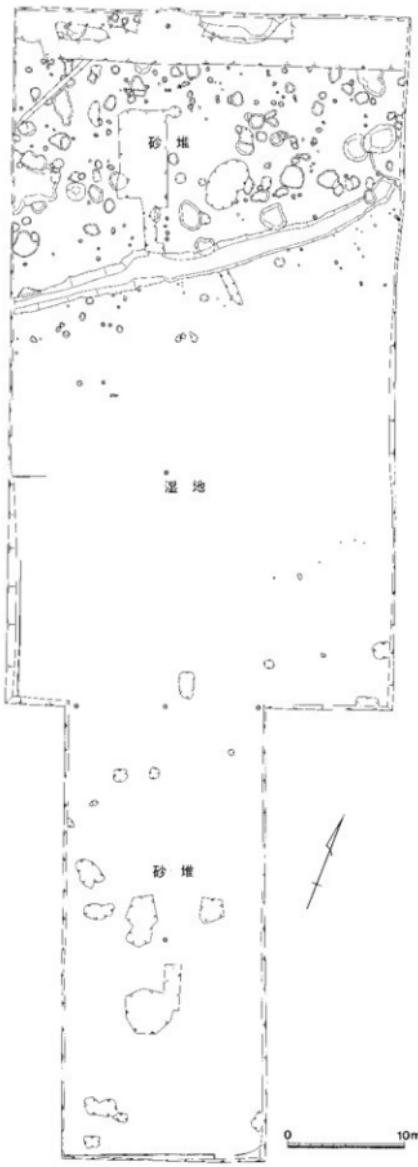


fig.2
病査区全体平面図

る須恵器の坏身が出土している。またSD 01の北側で、土坑SK 01を検出した。SK 01は、東半分が搅乱によって失われており、SD 01同様詳細は不明であるが残存した部分からの推定規模は、径約1.8m、深さ約20cm程度と考えられる。また、調査区の北側でSK 02、SK 03の2基の土坑を検出した。SK 02は径約70cm、深さが約14cm、SK 03は径約60cm、深さが約18cmである。いずれも古墳時代以降の土器を出土している。

第2遺構面 1区の第1遺構面の下層では、弥生土器をわずかに含む層2層を検出した。さらにその下層は白色砂層となる。第1次調査の際「砂堆」を形成する海成砂層と考えられた層である。この砂層は、調査区北半の4～5区では、上記の黒色砂層下から検出された。また、調査区の中央部分にひろがる粘土層の堆積は、第1次調査でも報告された「堤間湿地」であると思われる。

砂層上面の遺構は、ほとんどがこの湿地より北側に集中しており、湿地以南では、湿地の方向に並行して打たれた杭7本が検出されたのみである。湿地以北で検出された遺構は溝2条、土坑41基、不明遺構1基、ピット多数である。これらの遺構の個々の時期については出土遺物を検討する必要があり、整理作業の終了を待ちたいが、調査時の所見では、弥生時代前期から古墳時代までの幅広い時期にわたっている。

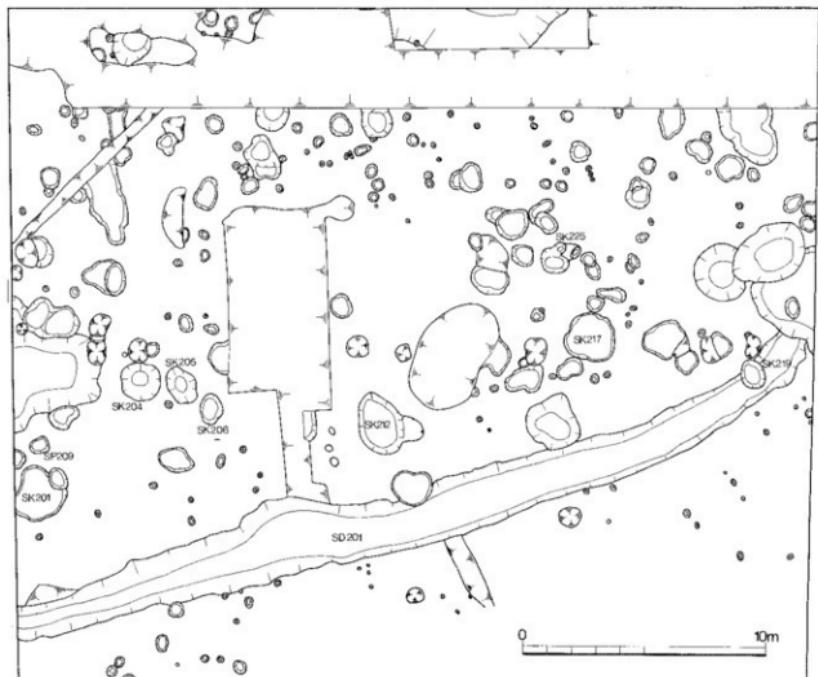


fig.3 3～5区第2遺構面平面図



fig.4 調査地全景

- SD 201 湿地の北側を、東西に走る溝である。深さ約60cm、幅約4mで、東端では北に向かって曲がっている。埋土は大きく3層に分けられ、上層からは弥生時代前期を中心にわずかに中期を含む土器が、中・下層からは弥生時代前期および縄紋時代晩期の土器が出土した。前期の土器はいざれも第I様式中段階のもので、彩文土器片も数点出土している。また、中層からは堅果類と思われる種子の炭化したものが多量に出土した。溝は湿地の方向に並行して掘削されているが、その性格は不明である。
- SX 201 調査区の北端で、その一部を検出した。深さ約80cm、検出された部分での最大幅約6.3mである。
- SK 201 北東部分をピットに削られているが、径約2.5m、幅約20cmの不整円形で、底で拳大の礫と土器片を検出した。出土した土器片は、弥生時代中期～後期のものである。
- SK 217 径約2m、深さ約40cm、拳大の花崗岩をサークル状に積み上げた遺構である。内部に木枠の腐食したものが残っており、礫の間に多量の土器片を含んでいる。
- SK 219 SD 201を削って造られている。径1.0m、深さ約35cmの橢円形で、底面で庄内式の壺1点が破損した状態で出土した。
- SK 225 長径約1.7m、深さ約20cmの不正形の土坑で、弥生時代後期～庄内式の土器を含む。また大型鎌刃石斧1点も出土している。

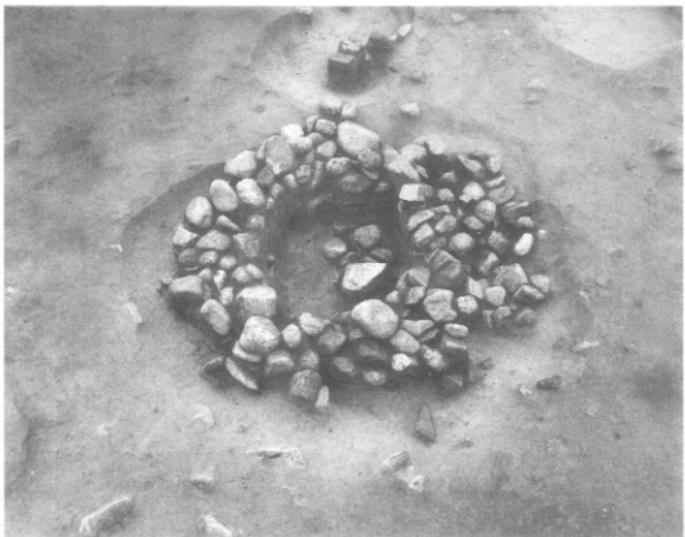


fig.5 SK 217 検出状況

湿地 濡地は、やや北東に傾いた東西方向で調査区を横切っている。上層では古墳時代の土器を確認しているが、中・下層では弥生および縄文土器のみが出土している。とくに湿地底面直上からは縄文時代後期の元住吉山式の土器が3点出土している。また下層で多数の木、木製品が出土しており、埋土中に植物遺体も多く含まれていた。湿地の南北の幅は約30m、東西の広がりは不明である。湿地底面は標高がほぼ0mである。

**弥生時代
以下層** 弥生時代より下層を確認するため、調査区中央部分で断ち割りを行った。その結果、1～3区と5区で、薄い海成砂層の堆積のくりかえしを、4区で拳大から人頭大の礫層を確認した。1～3区で検出した砂の堆積は、海岸部で波がうごよせる際に運ばれた砂による、特徴的な層をなしており、弥生時代の遺構面を形成する砂層が堆積する以前は、この地域が海岸であったと考えられる。4区で検出した礫層は、北から流れてきた土石流と考えられるが、この礫層からは、貝殻条痕文をもつ縄文土器片が出土している。礫層は、3区で海成砂層の下へ潜るようにして堆積しており、縄文時代に土石流が海へ流れ込み、その後海退の過程で海岸が形成されたと考えられる。さらに海退が進んだ結果、風性の堆積によって砂丘が形成され砂丘上に弥生時代の集落が営まれたのであろう。

出土遺物 今回の調査では、土器が28点、コンテナ約50箱、弥生時代の石器約30点、木製品、石棒などが出土している。特に縄文時代後、晩期の土器も複数出土しており、注目される。

3.まとめ 過去の調査成果から、北青木遺跡はこれまで弥生時代前期のごく一時期にのみ営まれた集落と考えられてきたが、今回の調査の結果、弥生時代から中世までの複合遺跡であることが明らかになった。当調査区では、遺跡の詳細な性格については知ることは出来なかつたが、おそらくこの付近、当調査区以北に集落の中心が存在すると推測される。

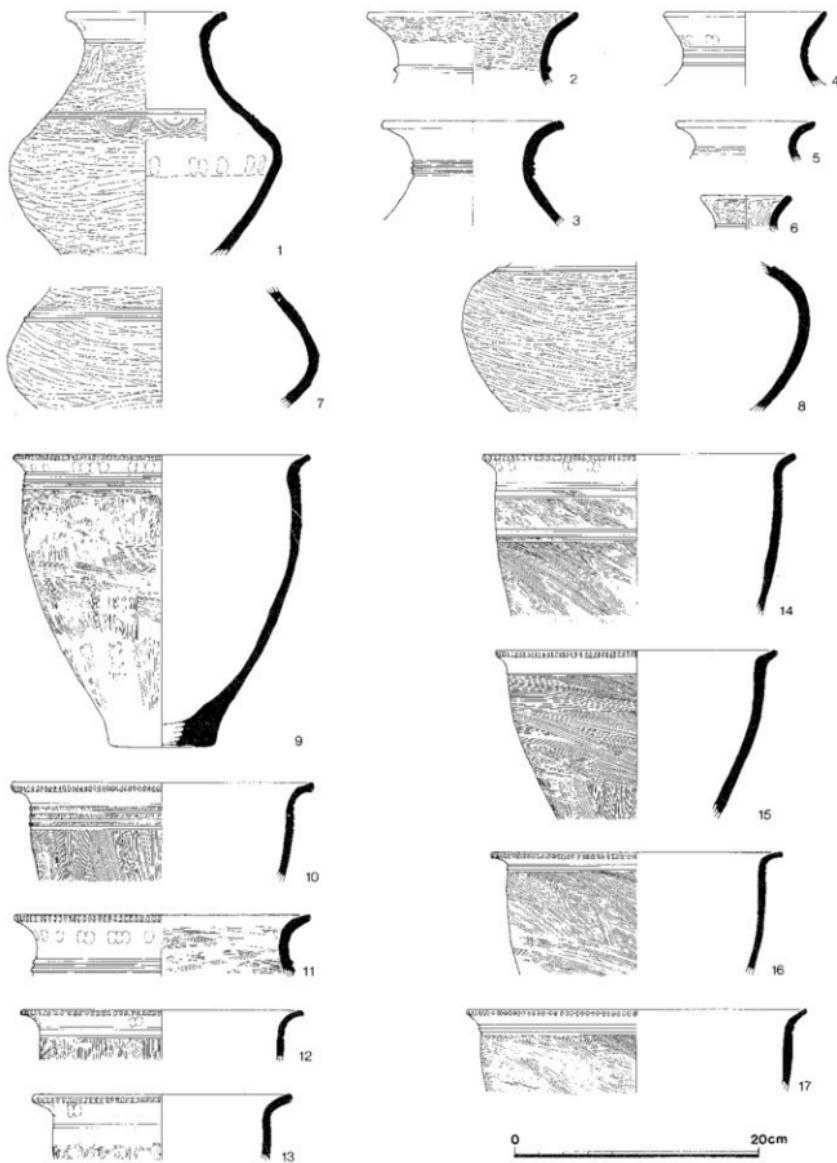


fig.6 SD 201 出土土器実測図

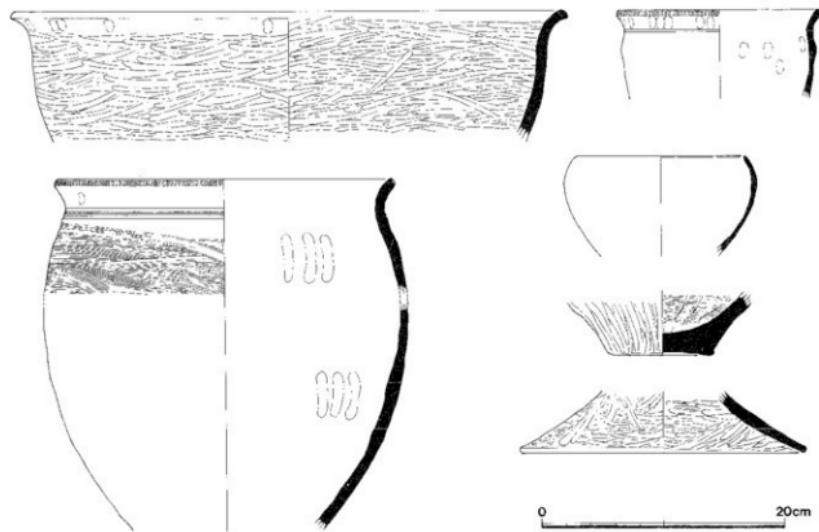


Fig.7 SD 201 出土土器実測図

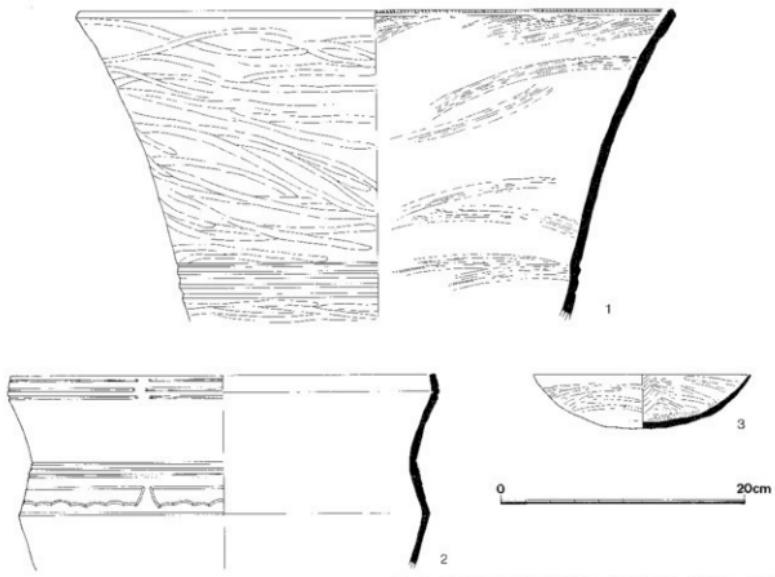


fig.8 湿地出土土器実測図 (1・3 : 第6層 2 : 3～4層)

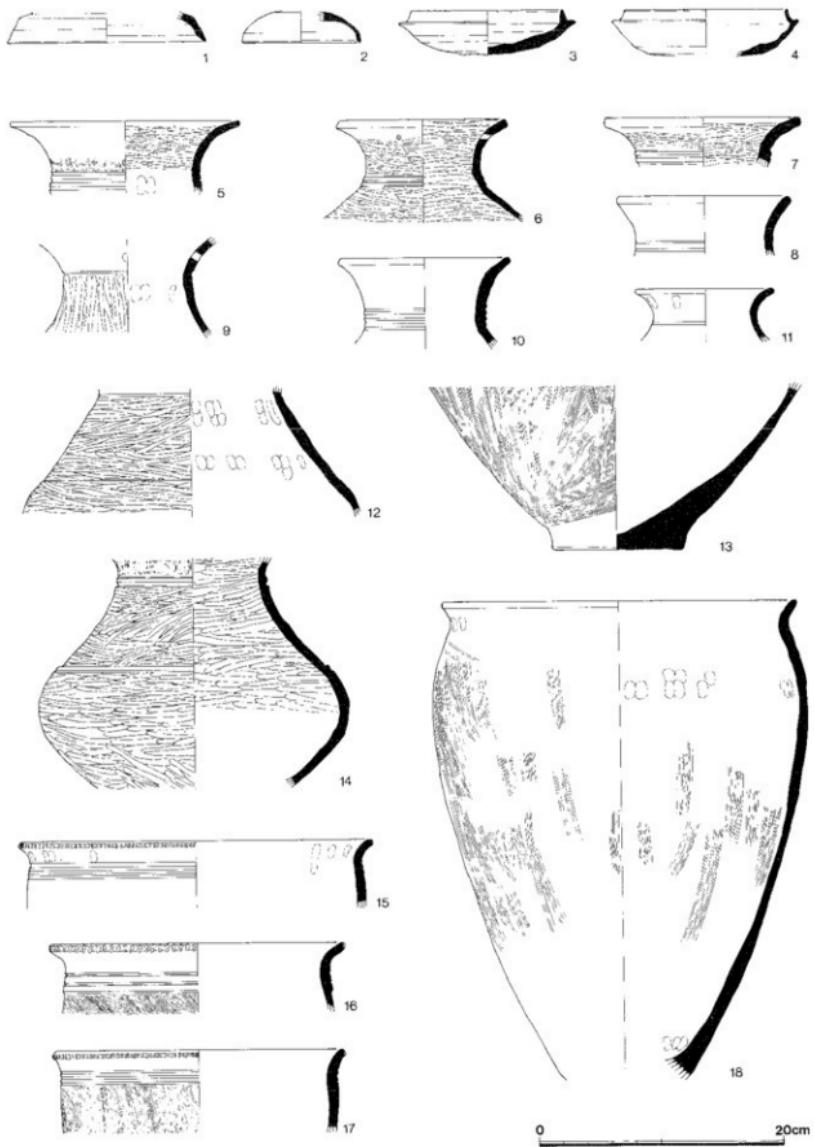


fig.9 濡地出土土器実測図 (1~4 : 1~2層 5~18 : 3~6層)

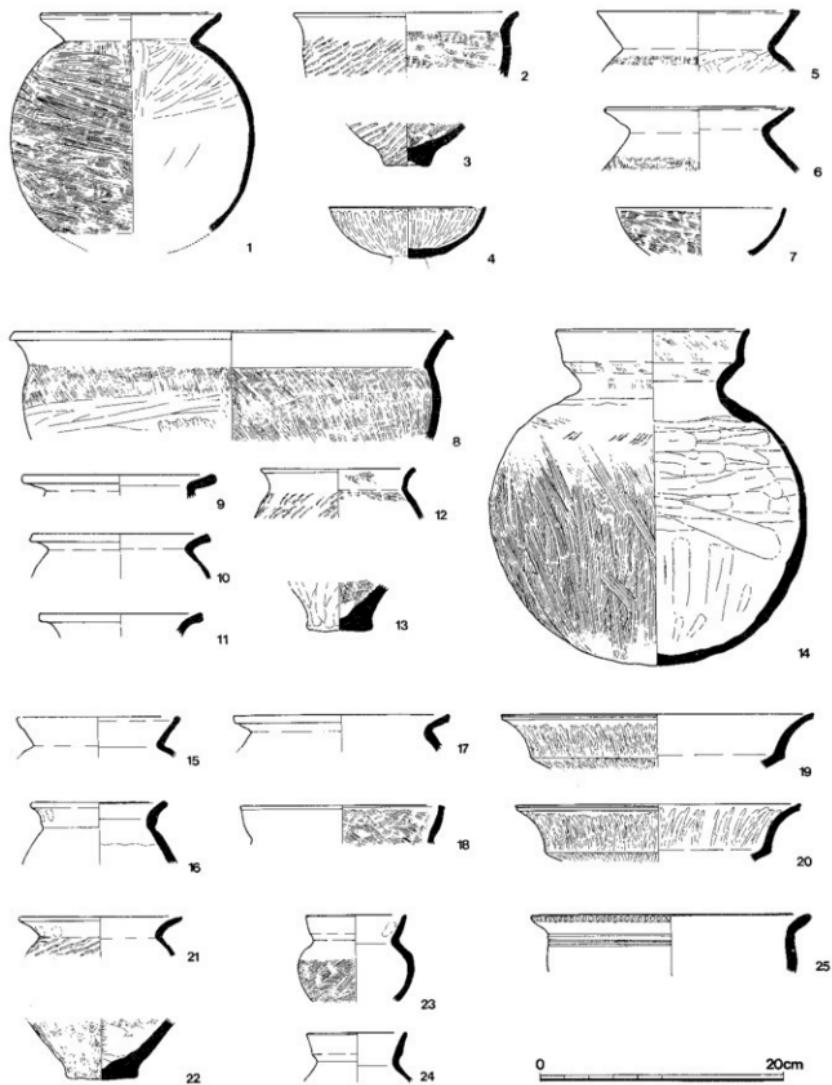


fig.10 土坑出土土器実測図
(1~4 : SK 201 5~7 : SK 217 14 : SK 219 15~20 : SK 237 21 : SK 210 22 : SK 246 23 : SK 212 24 : SK 236)
25 : SK 238)

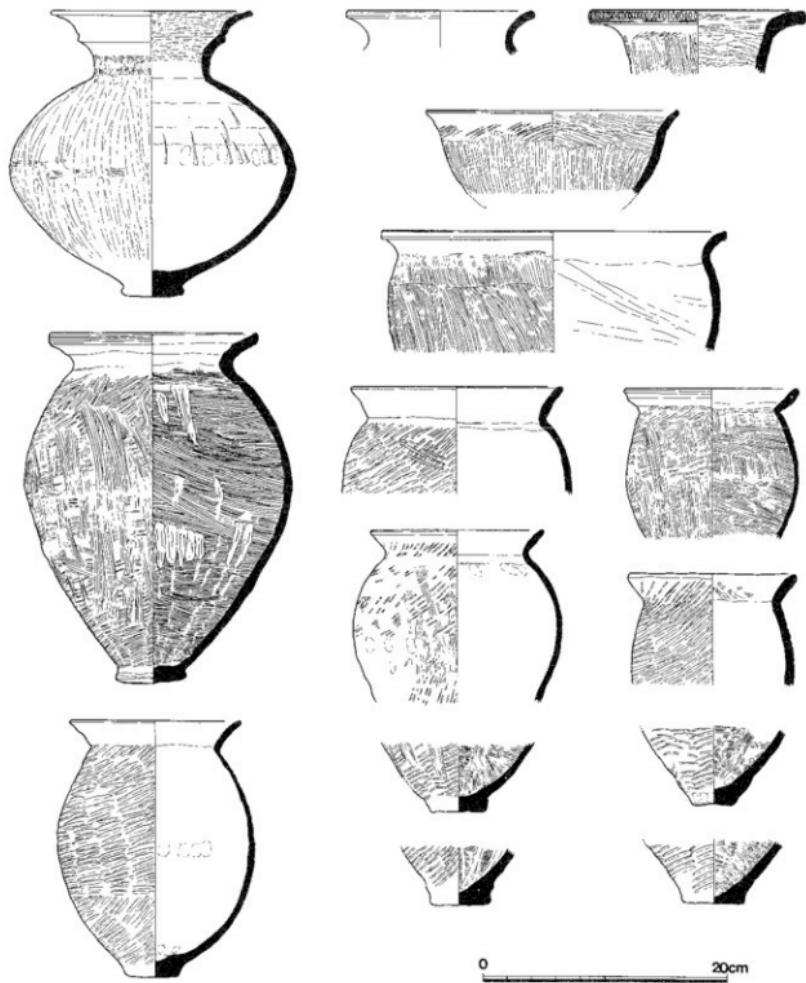


fig.11 SK 225 出土土器実測図

2. 本山北遺跡 第2次調査

1. はじめに

当調査区は、本山北遺跡のほぼ中央にあたり、平成4年度に、六甲山麓遺跡調査会によつて行われた、第1次調査地の南に隣接する場所に位置する。今回の調査は、マンション建設に伴うもので、工事によつて埋蔵文化財に影響を与える部分約65m²を対象にしたものである。

2. 調査の概要

調査は、表土、旧耕土層を重機にて掘削した後、遺物包含層以下を人力により掘削、検出作業を行つた。

調査地の基本層序は、表土、旧耕土、床上の下に中世の土器を含む淡黄灰色砂、黄灰色粘質土、古墳時代の遺物を含む黒灰～褐灰色粘質土、中世前期～古墳時代の遺構面である黄褐色砂礫となる。

遺構面は、黄灰色粘質土および黄褐色砂礫をベースとして2面確認された。

第1遺構面

黄灰色粘質土面において落ち込み状遺構、ピット数基を検出した。遺構埋土の遺物等から、中世後期以降の時期が考えられる。

第2遺構面

黄褐色砂礫面において、平安時代の木棺墓1基、古墳時代前期の竪穴住居2棟、土坑3基等を検出した。

ST 01

ST 01は、調査区の南端において検出された。掘形は2.1×1.0mの隅丸長方形で、残存高は27cmである。木質等の痕跡は認められなかつたが、埋土および鉄釘の出土状況などから1.6×0.5mの木棺が安置されていたと考えられる。また、堆積状況から天板及び西

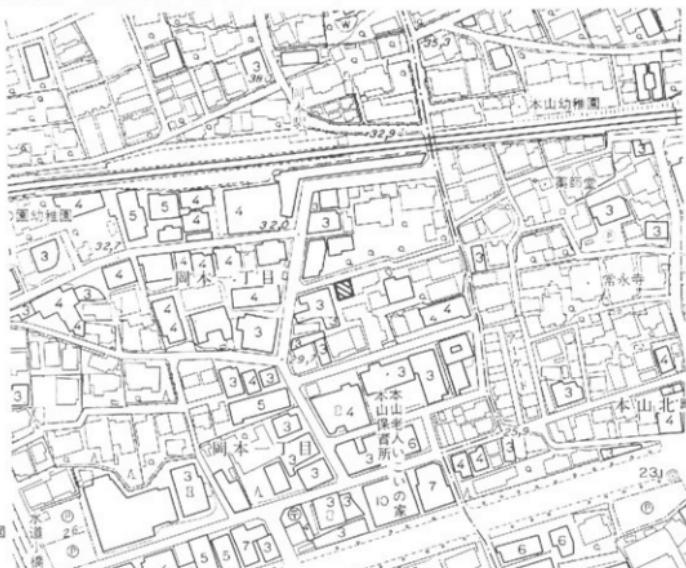


fig.12
調査地点位置図
1:2500

側板から崩壊したものと考えられる。

出土遺物は白磁碗・盃、青白磁瓜形合子、土師器皿、鉄が熔着した取瓶、鉄製紡錘車、鉄釘、ガラス玉がある。また、遺構の北部分においては、ヒトの歯の痕跡を検出した。ガラス玉は、この周辺に集中するため首飾りとして装着されていたようである。その他の遺物は大きく2群に分けられるが西壁内と棺上に置かれていたようである。

時期は、副葬遺物より12~13世紀代のものと考えられる。



fig.13 第2遺構面全体図



fig.14 第2遺構面全景

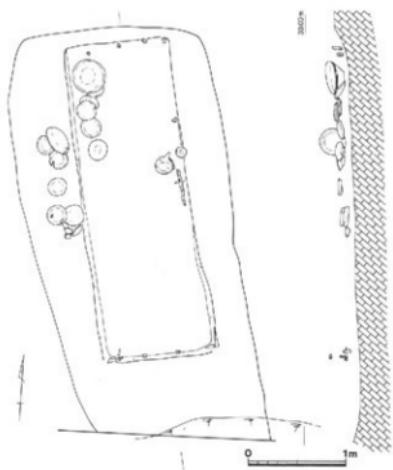


fig.15 ST 01 平・立面図



fig.16 ST 01

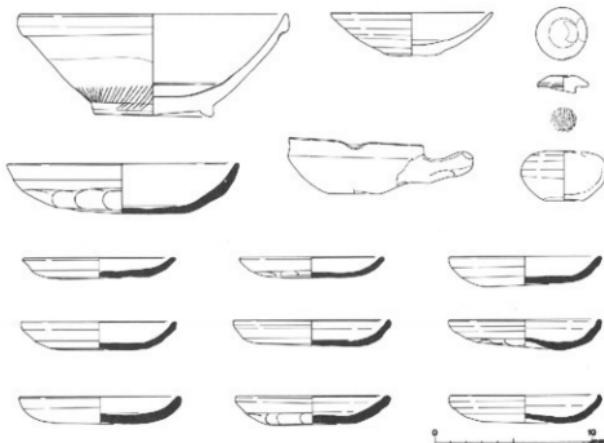


fig.17 ST 01 出土土器実測図



fig.18 ST 01 出土土器

SB 01 SB 01 は、調査地中央部において検出された隅丸方形の竪穴住居である。一辺 4.3m、深さ 40cm を測る。床面において、ピット 4 基を検出したが主柱穴は確定できなかった。また、東辺および北辺のほぼ中央において、70×50cm 程度の土坑をそれぞれ 1 基づつ検出し

た。この土坑の周壁側の壁の立ち上がりは、直から、ややオーバーハング気味である。周壁溝は、南辺から東西辺に少しづつ延びる「コ」字状に検出されている。

この堅穴住居は、かなり肩崩れがみられ、埋土についても、上層と下層についてかなり明瞭に区別される。

SB 02 SB 02は、調査区の北西部において北西コーナー部を検出した。約3分の2が調査区外へ拡がる。隅丸方形のプランで周壁溝をもつ。深さ10cmほどで、ピットを4基確認した。

SK 01 SK 01は、南北1.2m×東西1.8mの格円にちかい隅丸長方形のプランをもち、深さは40cmを測る。四隅で直径20cmほどのピットが4基検出されたが、これも本遺構に付随するものようである。

埋土には炭化物等も混じり、桃の種も数個出土した。遺物は、古墳時代前期の土師器と共に韓式系土器、滑石製白玉などが出土している。

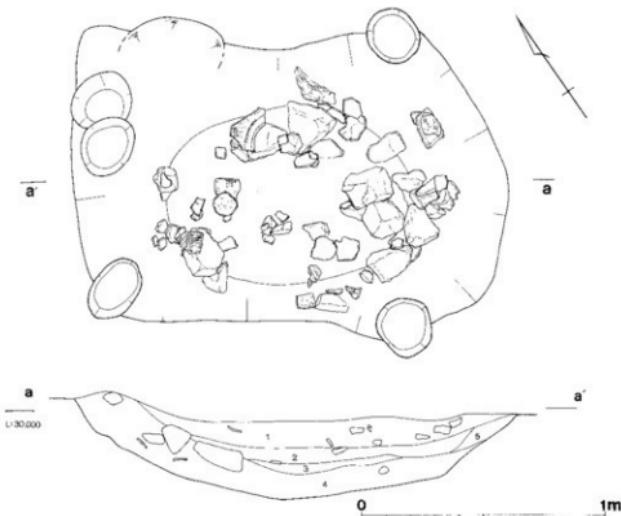


fig.19 SK 01 平・断面図

土石流 調査区の西半分ほどは、何度かにわたる土石流が流れこんでいる。土石流1は、その最も大規模なもので、深さ30mを測り北西から南へ流れる。遺物は弥生時代後期～古墳時代のものが含まれる。

3.まとめ

今回の調査区においては、限られた小面積の調査にもかかわらず、古墳時代前期の堅穴住居2基、土坑、中世前期の木棺墓等、大きな成果を得ることができた。

遺物についても、韓式系土器や鐵製鋤車、ガラス玉など注目すべきものが多い。

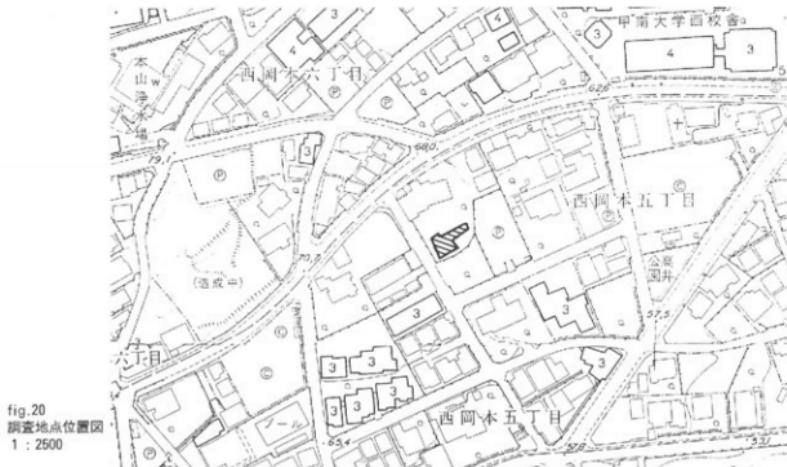
第1次調査の成果ともあわせて調査地周辺は遺跡の中心部にあたっているようである。しかし本山北遺跡の調査については、まだ端緒についたばかりであり、今後さらに調査成果の蓄積をとおし、その性格などを判断していくことが重要である。

にしおかもと 3. 西岡本遺跡 第3次調査

1. はじめに

西岡本遺跡は縄文時代から近世までの複合遺跡である。しかし、早くから、開発が進んでいた地域であったため、その状況は、あまり知られていなかった。ところが、昭和63年に西岡本6丁目でマンション建設に伴う、第1次調査が実施され、縄文時代早期の竪穴住居のほか、古墳時代後期の古墳が発見され、周辺部がかつて、群集墳が形成されていた地域であることが明らかとなった。

今回の発掘調査は、個人住宅の建設に伴う駐車場部分の発掘調査であった。調査途中で、埴輪の樹立されていた痕跡が確認されたほか、多数の埴輪が確認された。この遺構の性格を確認するために、一部拡張を行い調査を進めた。



2. 調査の概要

今回の調査では古墳1基を検出し、それに伴う埴輪樹立痕跡とともに、多量の円筒埴輪片と共に、形象埴輪も出土した。

古墳の墳形は明らかにできなかったが、検出状況から、前方後円墳の可能性がある。

埴輪は一箇所に集中して出土しており、集積のち廃棄された状況ともとれるような出土のあり方であった。

埴輪が確認された最初の層位では奈良時代の完形の土器が同時に出土しており、恐らく、奈良時代には、古墳はその姿を失っていたものとみられる。また、中世の深い掘り込みに落ち込んでいる巨石の上に埴輪の出土している層が被っている状況もみられた。これは、中世の掘り込みの埋土に埴輪が多量に混入していることから、埴輪の出土部分の一部にかかるように掘り込みが掘られた結果であると考えられる。以上のことから、次のような状況が想定される。

古墳が築造され、埴輪が樹立される段階、一部の埴輪が倒壊もしくは壊れる段階、奈良時代に集積・廃棄の後、上部を整地する段階、中世に掘り込みを作る段階、巨石が深みに落ち込み、法面が崩壊し埴輪を含む層が巨石に被さる段階、掘り込みが完全に埋没する段階の以上である。法面の崩壊は、地割れのようなひびをいくつか平面上で確認しており、その可能性は高いものと考えられる。また、埴輪の原位置に関しては、奈良時代に全ての埴輪が投棄された可能性もあるが、最下層は埴輪単独の出土であり、奈良時代の遺物を含んではいなかった。そのほか、埴輪樹立痕跡付近で検出した円筒埴輪の基底部が、遺物整理の結果、ほぼ完形に近い形で復元された。このことから、円筒埴輪はほぼ原位置を保った状況で出土していると考えられる。その他の埴輪に関しては極く限られた位置に樹立されていたものと考えられ、古墳時代当初の原位置は保っていないものの、そう大きくは動かされていないものとみられる。

埴輪と共に須恵器も幾つか出土している。器財埴輪は、蓋形埴輪・家形埴輪？・楕形埴輪？が、動物埴輪としては、馬形埴輪？・人物埴輪としては巫女のほか不明の女性像2体、円筒埴輪・朝顔形埴輪・須恵器器台・壺・坏などが出土している。

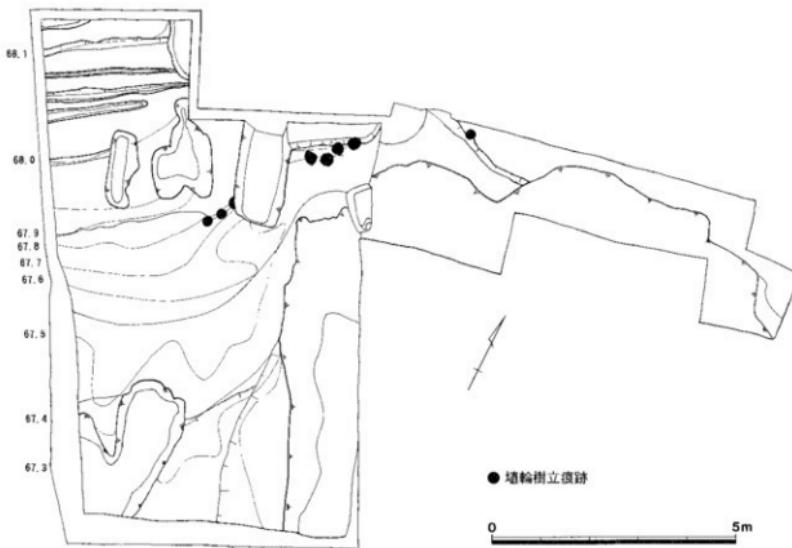


fig.21 遺構平面図

3.まとめ

今回の調査で、古墳の検出とともに、多数の埴輪の出土がみられた。この地域でも、5世紀後半には、埴輪を多く立て並べた古墳が存在していることが明らかとなった。住吉宮町遺跡で確認されている住吉東古墳の状況に似ており、このような古墳が、六甲山南麓に分布していた可能性を考えさせる。六甲山南麓における5世紀後半の古墳時代を考える上で、重要な資料を提供した調査であった。

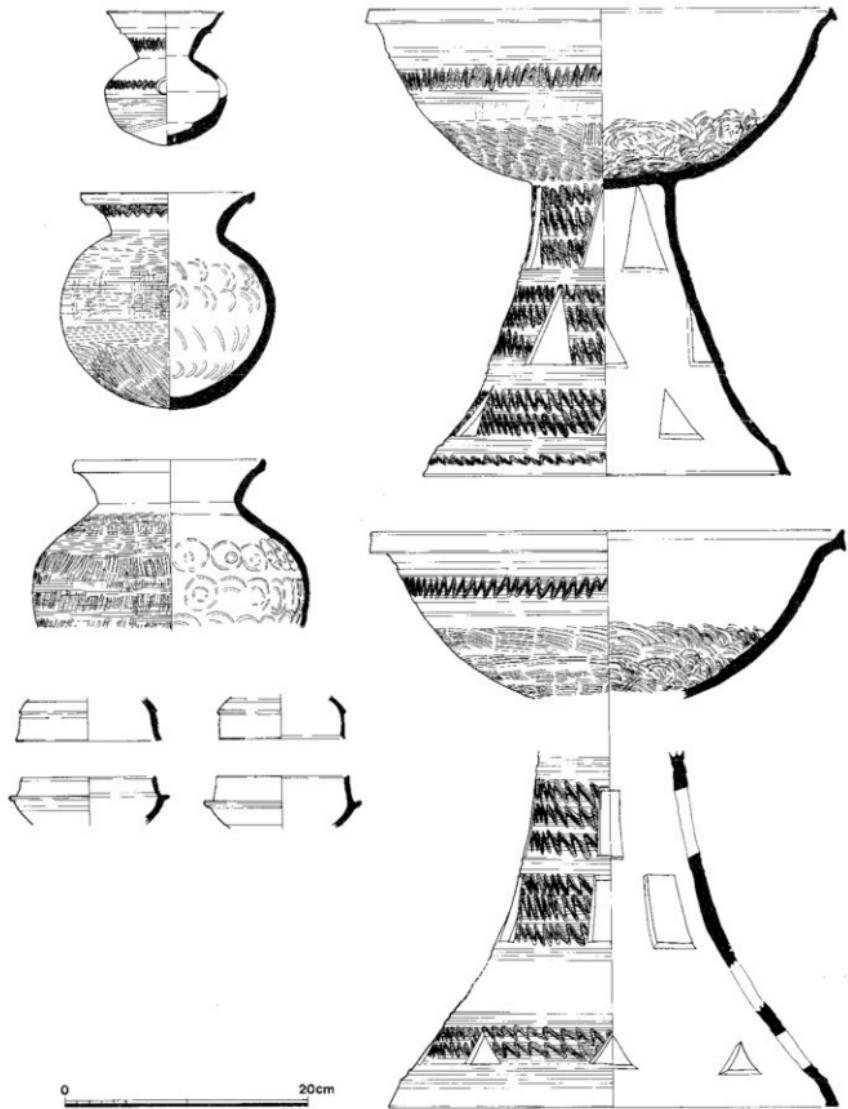
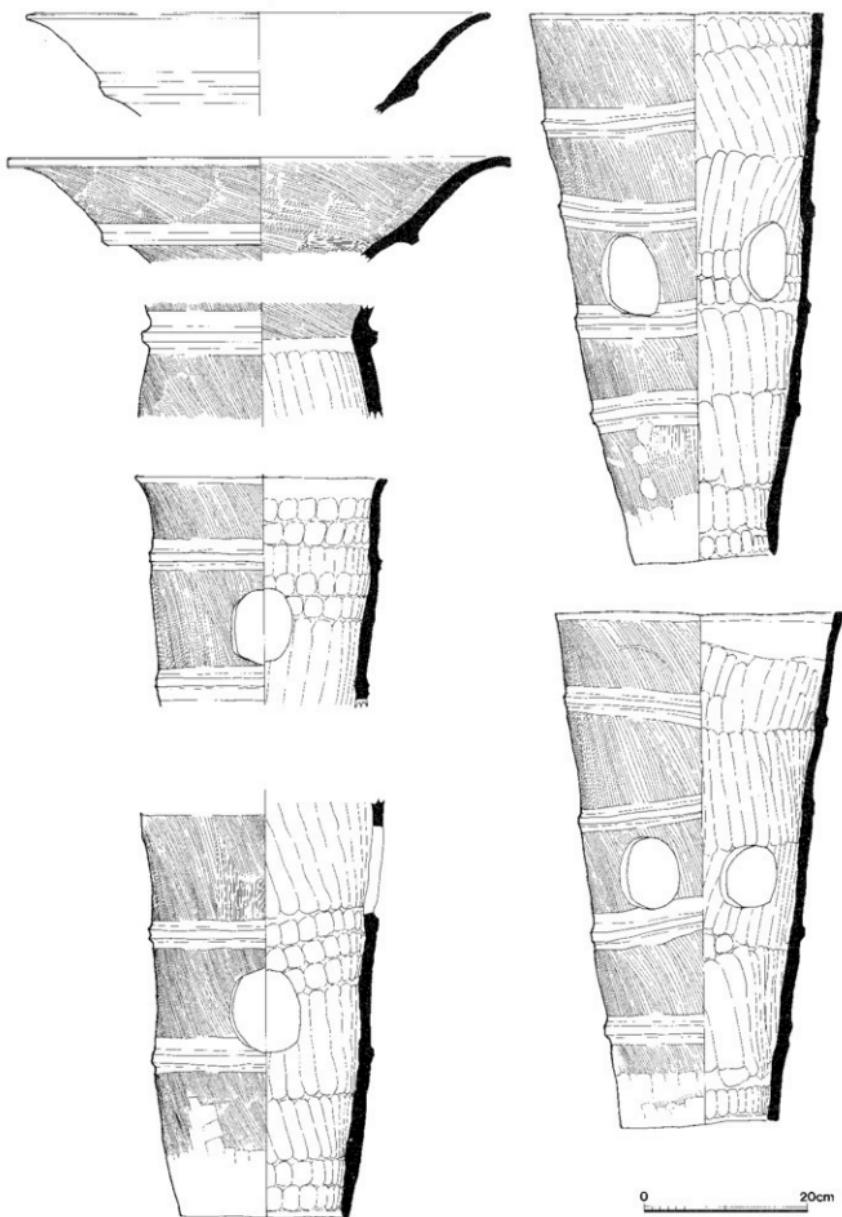


fig.22 出土須恵器実測図



0 20cm

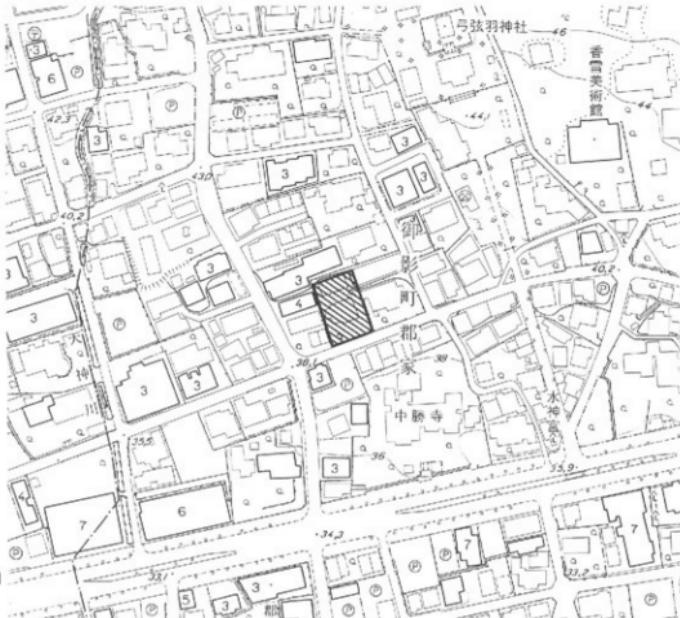
fig.23 出土埴輪実測図

4. 郡家遺跡 下山田地区 第4次調査

1. はじめに

郡家遺跡は40次を越える調査によって、弥生時代後期から中世にかけての複合遺跡である事が判明している。特に、『菟原郡衙』推定地として知られ、奈良時代から平安時代の遺構、遺物の検出例が増加している。

下山田地区は郡家遺跡の北東部に位置し、これまで3次にわたる調査が行われている。第1・2次調査では平安時代の掘立柱建物が、第3次調査では石列等が検出されている。今回の調査地は、下山田地区第3次調査区に南接する場所にあたり、北西から南西に傾斜する緩斜面上に位置する。基本層序は、整地層、近現代の耕作土層、洪水層が堆積しており、洪水層下で、第1遺構面が検出された。



2. 調査の概要

調査区の南西隅で、掘立柱建物1棟と用途不明遺構4基が検出された。

第1遺構面 1間以上×3間以上の掘立柱建物である。柱穴内出土の遺物は細片で時期は不明である

SB 01 が、層位より中世の遺構であると考えられる。

SX 01～05 深さ5～10cm程度の浅い遺構である。遺物の出土はなく、用途は不明である。

第2遺構面 古墳時代終末期の古墳2基、7～8世紀の溝1条が検出された。古墳の検出は、郡家遺跡では初めてである。

1号墳 墳丘は、洪水及び住宅建設時の整地及び搅乱によって失われており、北側に拡張したトレンチにおいても確認できなかったため、墳形は不明である。羨門部から東西に基底石と考えられる石材が1部残されており、方形墳である可能性が高い。

掘 形 最大幅550cm、全長約480cmの隅丸方形のプランで、地山面を60cm掘り込んでいる。石材据え付け部分は更に掘り下げ、1段目の石材の安定を計っている。

石 室 天井石を全て失い、側壁多くの石材が失われているが、1部では床面から3段目まで石材が遺存していた。

幅100cm、全長340cmを測る。閉塞は羨門部に自然石で行っている。石材は比較的大きなものを、奥壁と羨門部に用いている。2段目及び3段日の構築の際は、石材の安定のため、接点に小石を充填している。

羨門部から南側に側壁は延びず、掘形も完結することから、羨道を付設しないタイプの石室である。



fig.25 第2遺構平面図

遺物 石室内からは、須恵器台付長頭壺1点、土師器壺胴部、齒が出土した。齒は植台と考えられる自然石及び土師器壺胴部の付近で検出されている。出土状況より、土師器壺の胴部は土器枕として使用されていたと考えられる。台付長頭壺は、左側壁に接して正立状態で検出された。

閉塞石の外側で須恵器短頭壺が1点検出された。閉塞時の供獻遺物である可能性があるが、原位置を保っている可能性は低い。

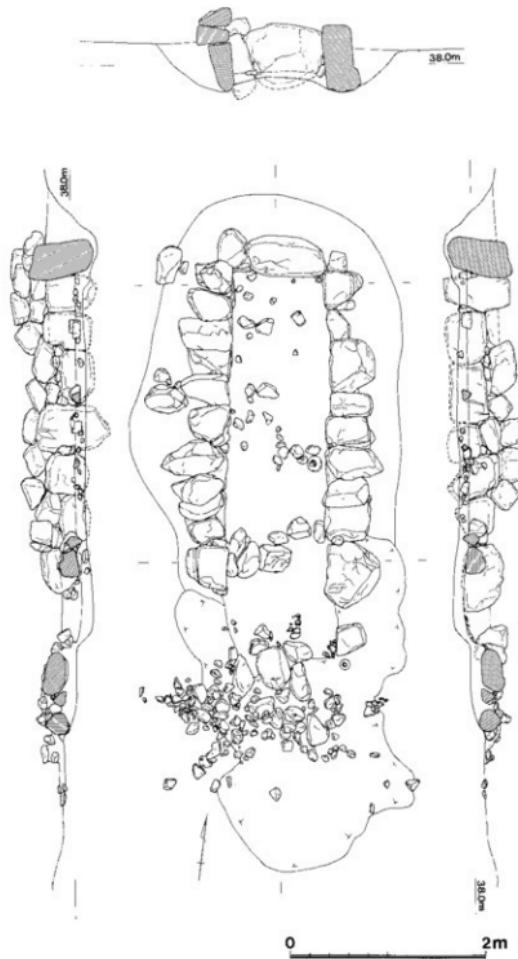


fig. 26 1号填石室平・立面図

2号墳 墳丘の盛土は、1号墳同様全て失われており、墳形、規模は不明である。

掘 形 幅160cm、長さ290cmの隅丸方形のプランで、約50cmの深さを測る。東側は2段に掘削しており、約30cmのテラス面を持つ。

石 室 天井部分ではなく、側壁も一部失われているが、大部分は3段分の石材が残されている。石室のプランは幅50cm、全長約200cmを測る。終末期に出現する小石室と呼ばれる単葬の石室である。

基底石は、西壁は掘形の壁面に接するように設置しているが、東壁はテラス面から掘り込まれた下段の掘形に接する様に設置している。比較的大きな石材を両小口に縦位に設置し、側壁は横位に設置している。

遺 物 石室内からは、須恵器台付長頭壺1点、土師器皿1点、歯が出土した。歯の出土状況から、頭位は南と考えられる。棺等の痕跡は残っていなかった。

1号墳の墳丘の規模を確認するために設定したトレーナーで東西に流れる溝を検出した。

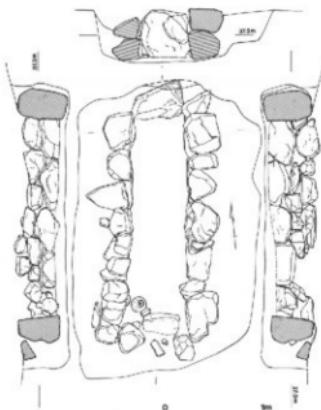


fig.27 2号墳石室平・立面図

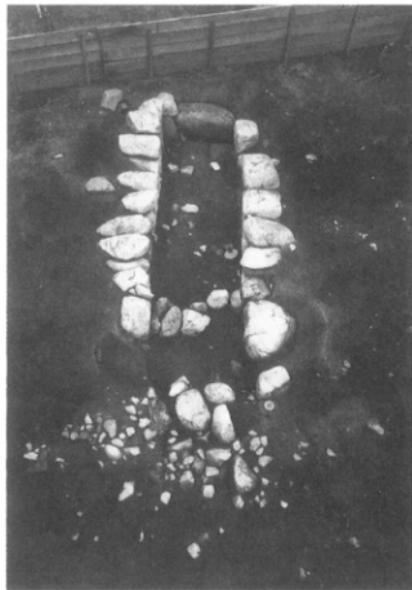


fig.28 1号墳石室

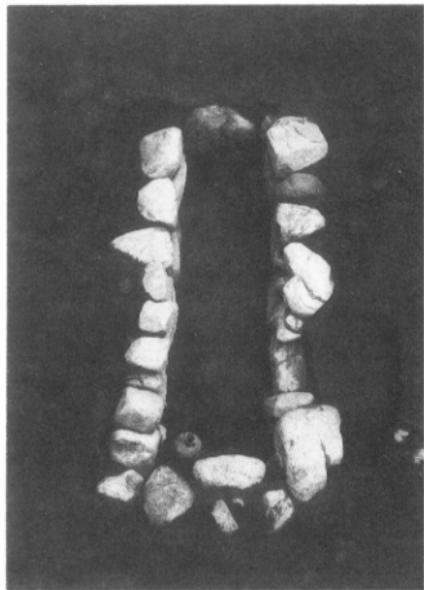


fig.29 2号墳石室

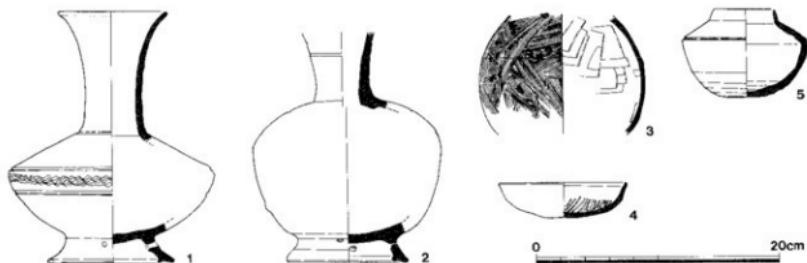


fig.30 1・2号墳出土土器実測図 (1～3：1号墳石室床面 2～4：2号墳石室床面 5：1号墳閉塞部)

幅100cm、深さ40cm程度の溝で、最終埋土層より須恵器台付長頸壺1点、土師器壺1点が出土した。両個体とも、ほぼ完形に復元できた。

第3遺構面 第2遺構面のベース層は、弥生時代後期と古墳時代後期の遺物を包含しており、これを除去すると、古墳時代後期の遺構面となる。調査区北西部では、古墳時代後期の遺構面が

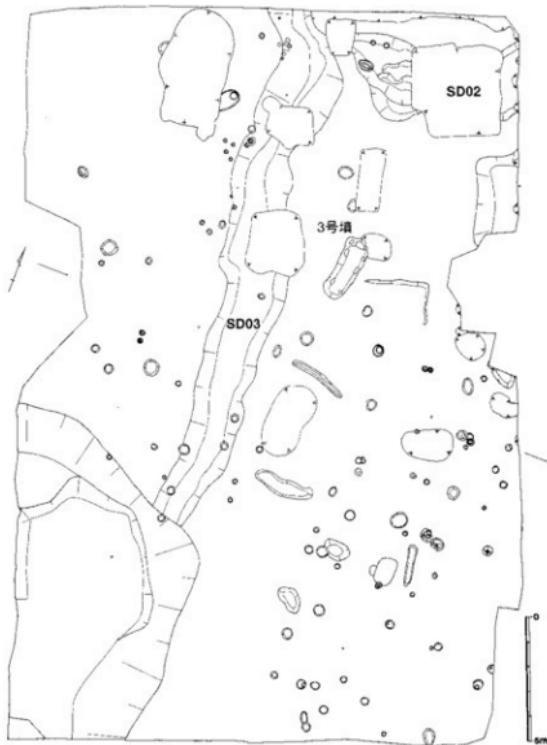


fig.31 第3遺構面平面図

失われており、弥生時代後期の遺構面が検出された。

古墳時代後期 調査区東半部を中心に、古墳時代後期の遺構面が検出された。検出された遺構は、溝、柱穴、土坑等である。

3号墳 石室のみが残されており、幅60cm、全長190cmを測る。遺存状況は悪く、基底石の1部が残されているのみである。墳形、規模等は不明である。遺物の出土はないが、層位から古墳時代後期以前の遺構である。

SD 02 幅200cm程度の溝で、西へ流下する。埋土内より6世紀後半の須恵器甕片、坏身、坏蓋が出土した。坏身と坏蓋は組み合わせた状態で出土した。

SD 03 調査区のほぼ中央を南へ流れる流路である。弥生時代後期から6世紀代の遺物が出土した。

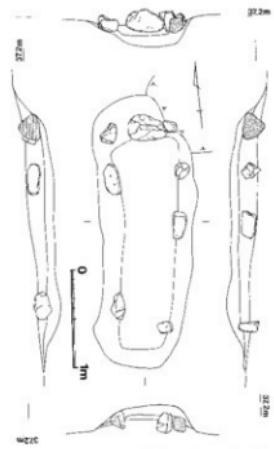


fig.32 3号墳石室平・立面図

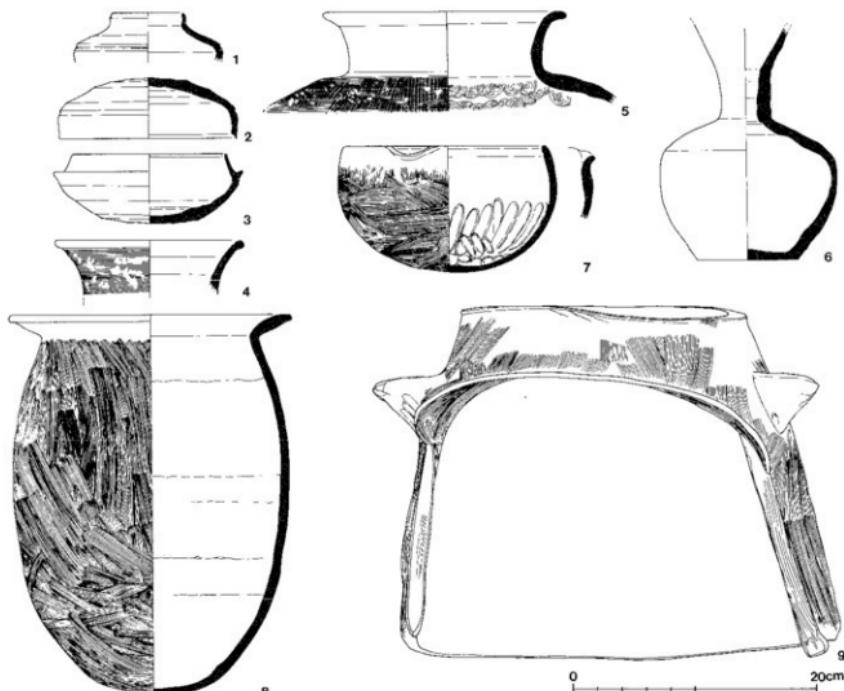


fig.33 出出土器実測図 (SD 01: 6・9 SD 02: 1～5 SD 03: 7・8)



fig.34 第3塚構面全貌

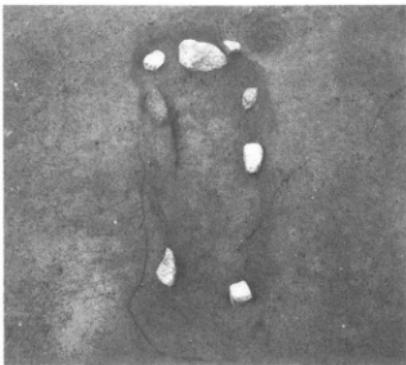


fig.35 3号墳

柱穴 100を越える柱穴が検出された。大半が掘立柱建物に伴うと考えられる。建物の規模、数は検討中であるが、かなりの数の建物が重複して存在していると考えられる。

SX07 検査区南西隅で検出された遺構で、SD 03が接続する。遺構の一部のみの検出で、詳細は不明であるが、埋土は停滞した水に堆積したものと考えられ、湿地状の窪地であると推定される。埋土から古墳時代後期の遺物とともに、獸骨が出土している。

弥生時代後期 検査区西北部は、古墳時代後期の遺構面が失われており、直径50cm以下の礫群の堆積が認められ、土石流の痕跡であると考えられる。礫群の直上から、弥生時代後期の遺物が出土している。出土状況から、礫の堆積後に投棄した遺物であると考えられる。

礫群を除去すると、土坑が10数基検出された。直径60~80cm、深さ20~40cmの土坑で、10cm程度の円錐を充填している。いずれも遺物の出土はない。

3.まとめ 六甲山南麓地域は宅地造成、道路建設を初めとする開発が急速に進み、地形の改変が古くから行われてきた。また、土層観察から幾度もの水害が起ったことが窺え、旧地形を留めにくい条件下にある。元来東灘区域においても、多くの後期古墳が築かれたと考えられるが、確実に存在が確認できるのは、野寺群集墳、岡本梅林古墳群、八幡谷古墳、岡本北遺跡、住吉宮町遺跡等に過ぎない。

これまでの調査では、当遺跡内で古墳時代の墓域の検出はなく、住吉宮町遺跡等で検出された同時期の古墳群を墓域に求めようとしていた。今回の検査区で3基の古墳の存在が確認されたことにより、近接して多くの古墳が存在する可能性が高く、従来の郡家遺跡の墓域觀に再考を促す資料となった。

2号墳の石室は、小石室と呼称されるタイプで、古墳群の最終期に出現する單葬墓である。この新しいタイプの埋葬施設の導入は、被葬者層の拡大と、先進地域の影響が考えられ、郡衙設営へつながる人々の動きを示す傍証となる可能性がある。

また神戸市内においては、古墳時代終末期の古墳数は少なく、市内の古墳時代の終焉を知る資料を提供した。

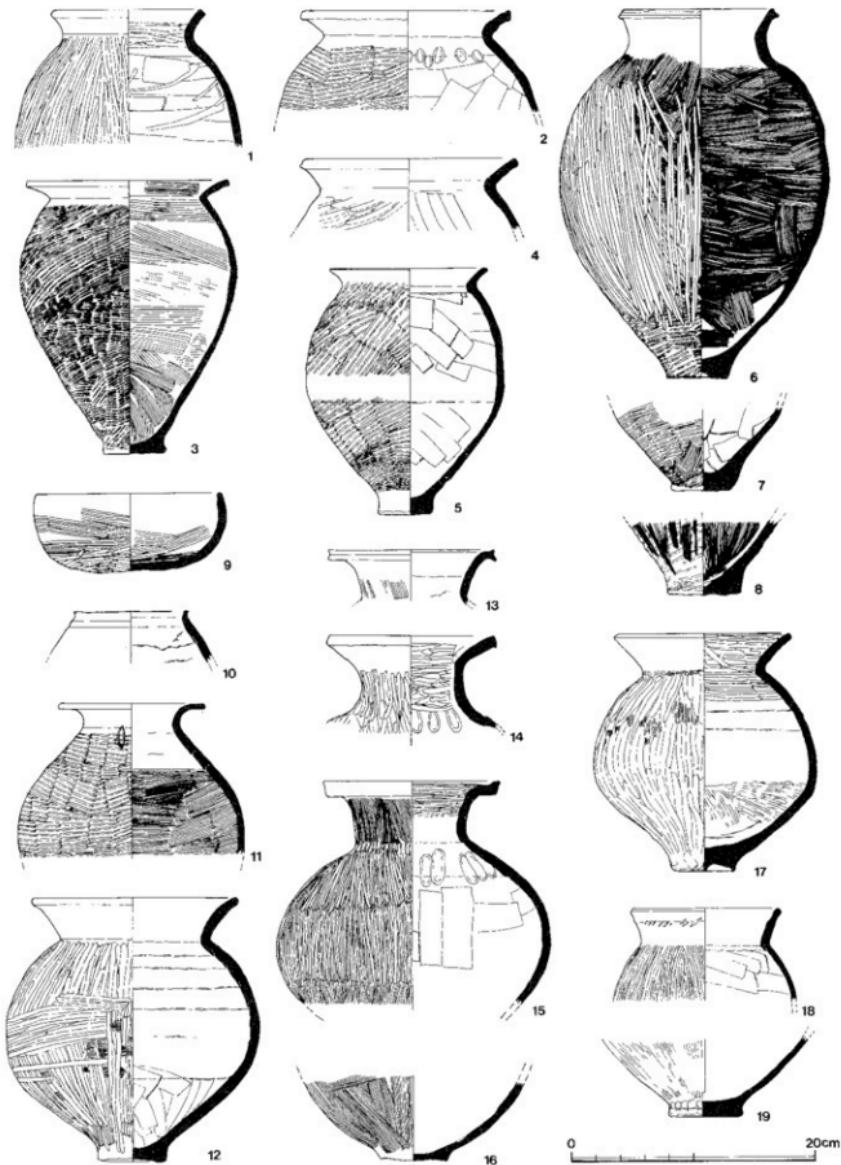


fig.36 第3澆溝面土器群出土土器測量圖

5. 西求女塚古墳 第5次調査

1. はじめに

神戸市灘区に所在する西求女塚古墳は東求女塚古墳・処女塚古墳とともに、菟原処女の悲恋伝説にまつわる菟原壯士の塚として、古くは「万葉集」に詠まれ、「大和物語」や謡曲「求女塚」などにも登場し、古くから知られていた前方後円墳である。

この古墳は昭和39年より公園として供用されていたが、古墳整備のための資料を得る目的で、公園内を昭和60・61年度の2度にわたって試掘調査を実施した。

また、公園の北側をマンション建設等にともなってこれまで2度の調査を行っている。今回の調査は平成4年度から継続しており、第5次調査になる。

昭和60年度の第1次調査時に、後円部の墳頂付近で埋葬施設の一部と考えられるものが見つかっていたが、その構造や規模などを明らかにすることはできなかった。今回の調査は、この埋葬施設の構造や規模を確認するために、墳頂部分を括げて、調査を行った。

神戸市の市街地の背後には、活断層によって隆起した標高600～900mの六甲山系が連なっている。六甲山系は花崗岩で形成されており、その崩壊した土砂によってその南側には複合扇状地が発達している。西求女塚古墳はこの扇状地末端に立地し、標高約6mの微高地に造られている。また、昭和初期の埋め立て以前の旧海岸線からは約200m、築造当時の海岸線からは100m前後の位置に立地すると考えられ、海上からもよく見えたことと思われる。

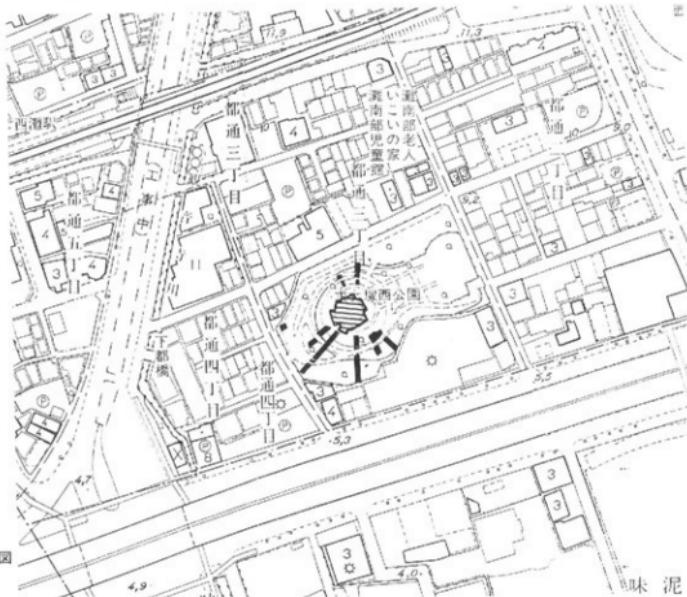


fig.37
調査地点位置図
1:2500

2. 調査の概要 西求女塚古墳は前述のように現在は公園として供用されているが、周囲は市街化が早くから進んでおり、住宅に取り囲まれている。そのため古墳周囲の旧状は明らかではないが、周辺の調査では、明確な崩壊は確認されていない。また公園内をトレンチ調査した結果、墳丘盛土層は公園の敷地外まで続いているが、後円部の裾は公園の外にある。また、後述するように地滑りによって墳丘がかなり崩れているため、正確な規模・形状は現在のところ明らかでないが、全長は120m前後、後円部径70m前後と推定される。

墳丘は最下段が若干、原地形を削り出しているが、ほとんどが盛り土によって造られている。

墳丘の斜面は、戦前この古墳が民有地であった頃に建物が建てられたり、庭園としてかなり造作が加えられて、旧状を留めているところはほとんどなかった。しかし、第7トレンチで、僅かに葺石が残存するところが確認された。使われている石材は拳大～拳倍大の花崗岩の円礫がほとんどで、付近の河原などから運んできたものと考えられる。

これまでの墳丘斜面部の調査では埴輪等は見つかっておらず、置かれていなかったようである。

地盤の痕跡 今回の調査では、埋葬施設が存在すると考えられた所を括げて調査したところ、黄色粘土・板石・礫の広がりが確認された。また板石と黄色粘土が崩れ込んでいる大きな落ち込みが見つかった。これについては、調査当初は古墳の埋葬施設が戦前の民有地の頃から戦後の公園造成時にかけて崩されたものと思われた。

しかし、墳丘のトレンチ調査で墳丘の盛土が階段状にずれている部分がみつかり、また墳丘盛り土層下の自然堆積層が液状化現象を起こし、上の墳丘盛り土層を貫いて吹上げている噴砂遺構が確認された。このことにより、この大きな落ち込みは、墳丘の地滑りによる陥没であることが判明した。その原因としては、この古墳の基盤である砂層が、地震によって不安定になり、墳丘盛り土の重量に耐えきれず、大規模な地滑りが起こったと考えられる。



fig.38 地震による墳丘の地滑り

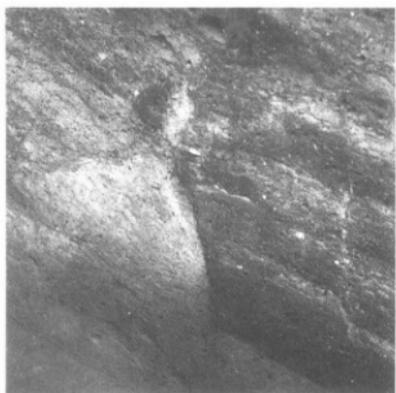


fig.39 墳丘を突き破る墳砂

埋葬施設 埋葬施設は、墳丘主軸には直行する南北方向を主軸とする竪穴式石室である。しかし、前述した地滑りによって、埋葬施設の南側の約半分が高低差約2m崩れ落ちており、また崩れ落ちずに残った北側の半分も、後後に石室の床面まで削平を受けたため、石室を構築する石材はほとんど残っていないかった。そのため、石室の構造や規模は明確ではないが、残存部から推定すると、幅約0.9m、長さ6m弱と考えられる。

残存部から復元できる石室の構築順序は、まず墓壙底に拳大の円礫を厚さ約60cm敷き、その上に粘土をほぼ石室の大きさに置いて、棺床部を造っている。そして、周りにもう一度礫を敷いた後に、壁体を組上げている。



fig.40 地震で崩壊した石室

この石室で特徴的なことは、石室の南端から75cmのところで石室を区切る障壁を設けていることである。この障壁は1枚の板石を立てており、石室内に棺を安置する主室と副葬品を収める副室とに間仕切っている。

石室を構築する石材には安山岩の偏平な板石が使われているが、仕切り石は安山岩ではなく石英斑岩が使われている。石室の内面や仕切り石にはすべて、赤色顔料が塗られている。

控え積みには、壁体と同様の板石・やや大きめの円礫・砂・粘土を組み合わせて使用している。

墓壙は棺床レベル以下では2段掘りであることが確認されたが、それより上部に関しては、削平を受けていることと、地滑りによる崩壊によって明らかにはできなかった。排水溝は確認されていない。

天井石は5枚が崩れ落ちた状態で検出された。このうち4枚は石英斑岩で、1枚は緑泥

片岩である。推定される石室の全長からはもう1枚天井石があった可能性がある。これらの天井石と天井石との継ぎ目には薄い緑泥片岩で目地止めがされている。また天井石の内面にも赤色顔料が塗布されている。

天井石の上は、棺床に使われている粘土と同様の粘土で、厚さ15cmほど覆っている。

石室に使われている安山岩・緑泥片岩・石英斑岩等の石材はこの付近では産出されず、遠くから運ばれてきたものである。

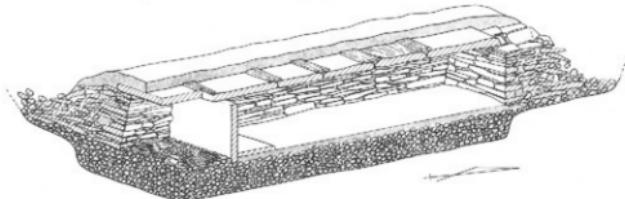


fig.41 石室想定復元図

出土遺物 鏡 鏡は、以前の調査で出土しているものも含めて全部で12面が出土している。出土状態は何れも崩壊した埋葬施設の間からの出土で、原位置を保っているものはない。しかし、すべて主室側に置かれていたと考えられる。

1号鏡 獣帶鏡 内区の一部の6.2cmのみが残存する破片である。これは、昭和60年度の第1次調査の際に出土したもので、棺床の上面から出土しているが、原位置は保っていない。

半肉彫7獸式の獣帶鏡の一部と考えられる。残っている破片の文様は内側から芝草文・櫛齒文・素文帯・有節重弧文・素文帯・櫛齒文・獸帶（小乳）となる。

2号鏡 三角縁吾作四神四獸鏡 まとまって出土した鏡群のうちで一番北から出土した鏡である。崩れた石室石材の間から出土しているため、多くの破片に割れているが、ほぼ完全な形に復元できる。

直径は22.4cm。二対の神像と一対の獸像の間には松笠文があるが、一対の獸像の間には草花を模した文様を配している。銘文には「吾作明竟甚大好上有神守及龍虎身有文章口銜巨古有聖人東王父西王母渴飲玉飢啖食棗壽如金石長相保」とある。同范（型）鏡には出土地不明の泉屋博古館所蔵M25鏡がある。

3号鏡 三角縁吾作三持五獸鏡 2号鏡のすぐ南から出土した鏡である。この鏡も多くの破片に割れているが、ほぼ完全な形に復元できる。鉄劍または鉄槍が背面に付着して出土している。

直径は22.5cm。1号鏡に似た銘文「吾作明竟甚大好上有神守及龍虎身有文章口銜巨古有聖人東王父西王母渴飲玉飢啖食棗壽如金石」がある。同范鏡には京都府椿井大塚山古墳出土鏡・岐阜県伝可児市出土鏡・千葉県城山1号墳出土鏡がある。

4号鏡 三角縁神獸鏡 棺床粘土の南の搅乱土中から出土した鏡である。

外区と銘帶の一部の約10cmのみが残存する破片であるため、全体の文様は明らかでない。残存する文様のうち内区部分では、櫛齒文は斜行し銘帶部分には有心円文があるが、破片のため銘文部分は存在しない。類似の鏡としては、京都府芝ヶ原11号墳・兵庫県水原古墳出土鏡がある。

- 5号鏡** 三角縁陳是作五神四獸鏡 3号鏡のすぐ南西の地滑り斜面中位から出土した鏡である。ひびが入ってはいるが完形で出土している。棺床粘土と考えられる黄色粘土に約2cmが埋まつた状態で出土したが、埋納状態を表しているかどうかは明らかでない。直径は21.8cm。1号鏡に似た銘文「[君]陳是作甚大好上有神守『宜』及龍虎身有文章口銜巨『宜』古有聖人東王父西王母渴飲玉注飢食棗長相保」がある。同範鏡には兵庫県牛谷天神山古墳出土鏡がある。
- 6号鏡** 画文帶環状乳神獸鏡 5号鏡のすぐ南西の地滑り斜面下位の石材に挟まつた状態で出土した鏡である。肉眼では完形であるがレントゲン写真によるとひびが入っている。直径は15.4cm。東王父・西王母・伯牙・黄帝などの四神と四獸が描かれている。半円方形帶には13の方格があり、それぞれに4文字の銘文がある。銘文はまだ全てが判読できていないが、「吾作明竟・幽凍三商・天王日月・天王日月・…・位至三公・…」の銘文が読める。
- 7号鏡** 神人龍虎画像鏡 7~12号鏡は石室を主室と副室に分ける仕切り石と、その北側の崩れ落ちているやや大きめの石材の間からまとめて出土している。この鏡群は主室の南端に置かれていたと考えられ、北側の石材に貼りついた状態で出土しているが、地滑りにより崩れ落ちているため原位置は保っていない。直径は18.5cm。鉢を挟んで神像と獸像がそれぞれ一対と二神像の両側には仙人が描かれている。一方の神像の横には「大王公」の傍題がある。銘文は「田氏作明竟□□□有服者男為公卿女為諸王曾年益壽子孫番昌千秋萬歳不知老長宜賈市兮」とある。
- 8号鏡** 三角縁吾作四神四獸鏡 7号鏡の下から鏡面を上に向けて9号鏡と重なって出土している。直径は19.8cm。銘文には「吾作明竟甚大工上有王喬以赤松師子天鹿其彝龍天下名好世無雙」とある。同範鏡には福岡県石塚山古墳・広島県中小田1号墳・大阪府万年山古墳・京都府椿井大塚山古墳の出土鏡がある。
- 9号鏡** 三角縁吾作徐州銘四神四獸鏡 直径は22.4cm。銘文には「吾作明竟幽律三剛銅出徐州影鑄文章配德君子清而且明左龍右虎傳世右名取者大吉保子宜孫」とある。同範鏡には京都府椿井大塚山古墳・奈良県佐味田宝塚古墳・岐阜県内山1号墳がある。
- 10号鏡** 三角縁神獸鏡 外区の一部と銘帶部分のみ残存する破片である。銘帶部は「西王母」「飢食」の部分のみである。西求女塚古墳3号鏡と同範鏡である。
- 11号鏡** 画文帶環状乳神獸鏡 直径は17.1cm。東王父・西王母・伯牙・黄帝などの四神四獸が描かれている。半円方形帶には13の方格があり、それぞれに「天王日月」の4文字の銘文がある。
- 12号鏡** 半肉彫獸帶鏡 直径は14.2cmを計る。いわゆる「上方作」系獸帶鏡である。鉢座は有節重弧文の内側に8個の小乳とその間に銘文と芝草文を配したものである。銘文は「孫」が判読できるのみで、あとは不明である。主文は六像式で、1人の仙人と5匹の獸が描かれている。銘帶は「……作鏡真大巧……」のみ判別できる。
- 以上出土した鏡のほとんどには、繊維が付着しており、布にくるんで副葬していたことがわかる。



fig.42 5号鏡



fig.43 6号鏡



fig.44 7号鏡



fig.45 9号鏡

石製品 碧玉製の紡錘車形石製品が副室側から1点出土している。直径6.8cmで中心の厚さ1.5cmを計る。段は2段で濃緑色をしている。

鉄製品 鉄製品としては、主室側からは剣または槍の破片が数点と小札が1点出土している。剣または槍は特に鏡に付着したものもあり、鏡と同様に棺の付近に置かれていたと考えられる。

副室からは多数の鉄製品が出土している。鎧に覆われているものや、破片になったものが多いため現在のところ器種の判明するものとしては、剣・刀・鉤・鎌・ヤリガンナ・斧・鑿・ヤス等がある。

土 器 石室が崩れ込んだ落ち込みに堆積した土の上層から、頭部に稜をもつ小形丸底壺・鼓形器台・高坏・低脚坏・スタンプ文のある壺形土器等いわゆる山陰系土器と呼ばれる土器器が多数出土している。これらの土器は、その出土状況から墳丘上で行われた祭祀に伴う土器であると考えられる。

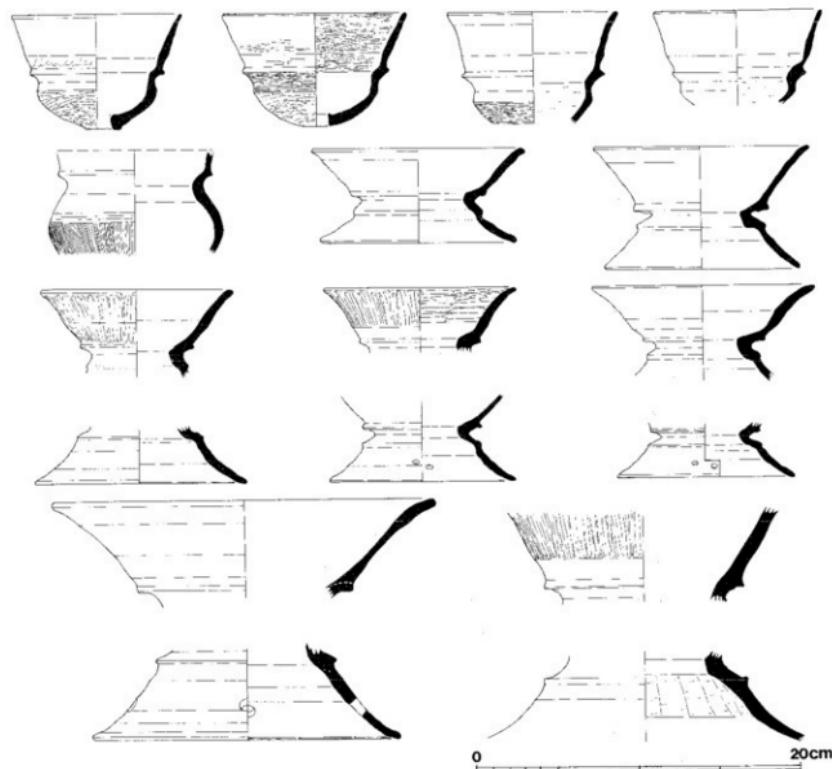


fig. 46 出土土器実測図

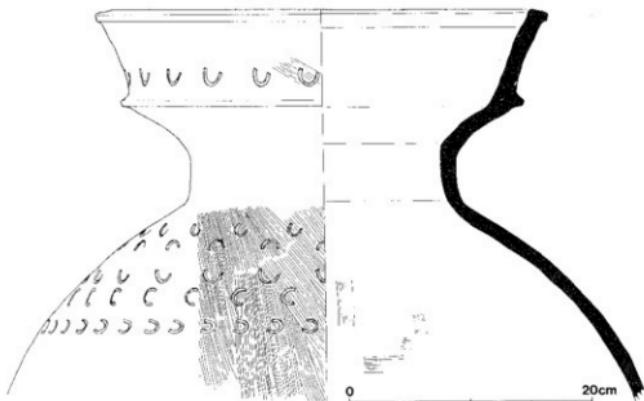


fig.47 スタンプ文のある壺形土器実測図

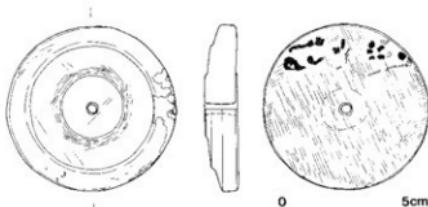


fig.48 細錐車形石製品実測図

3. まとめ

これまでの西求女塚古墳の発掘調査成果をまとめると以下の通りである。

1. 古墳の全長は120m前後で、後円部の直径は約70mの前方部が東向の前方後円墳である。
2. 墓葬施設は後円部の中央部に、竪穴式石室が造られており、石室内は棺を納める主室と、副葬品を納める副室とに分けられている特異な構造であった。
3. 副葬品として12面の鏡と鉄製品の剣・槍等が出土した。
4. 副葬品の他に山陰系の土器が墓上の祭祀に使われていた。
5. 石室の構築材料に他の地方の石材を大量に使っている。
6. 墳丘全体と竪穴式石室は地震による地滑りでかなり崩れている。
7. 斜面には葺石が存在したが、埴輪等は置かれていなかった。

但し、今回の報告は、調査が終了してまだ間もないため出土遺物の整理・調査はまだ進んでいないことや、前方部はほとんど調査されていないので全体の明確な規模・形状は明らかになっていない。このため、築造時期や被葬者の性格等は今後これらの調査が進んだのちに明らかにしていきたい。

なお、平成6年度第7次調査の結果、当古墳は前方後方墳であることが判明した。詳細は、平成7年度刊行の「西求女塚古墳 第5次・第7次発掘調査概報」を参照されたい。

6. 都賀遺跡 第4次調査

1. はじめに

都賀遺跡は、六甲山系の南麓、都賀川東岸の標高約40m前後の扇状地上に立地している。

この遺跡は、昭和62年9月に実施した都賀住宅地区改良事業に先立つ試掘調査で、弥生時代の遺物包含層が確認され、その存在が明らかになった。昭和63年度末にかけて、妙見山麓遺跡調査会によって、仮設住宅建設予定地(160m²)について発掘調査が実施された(第1次調査)。その結果、弥生時代中期の方形周溝墓2基、土坑・溝の他、鎌倉時代の土坑等が検出された。また、平成元年6月~10月にかけて、妙見山麓遺跡調査会によって、改良住宅予定地(410m²)について発掘調査が実施された(第2次調査)。その結果、弥生時代中期の方形周溝墓2基、弥生時代後期~古墳時代前期初頭頃の竪穴住居5棟・溝・ピット、奈良時代末~平安時代初頭頃の掘立柱建物1棟・溝・土坑・ピット、鎌倉時代前半の溝・土坑・ピット等が検出された。

平成4年7月~平成5年3月にかけて、当教育委員会が、改良住宅予定地(600m²)について発掘調査を実施した(第3次調査)。調査の結果、弥生時代中期の方形周溝墓4基、弥生時代後期~古墳時代前期頃の竪穴住居4棟・溝・ピット、奈良時代末~平安時代初頭の掘立柱建物1棟・溝・土坑・ピット、鎌倉時代~室町時代の溝・土坑・ピット、江戸時代頃の井戸・溝・土坑・ピット等を検出した。

今回は、第3次調査区の西隣の改良住宅予定地について、発掘調査を実施した。

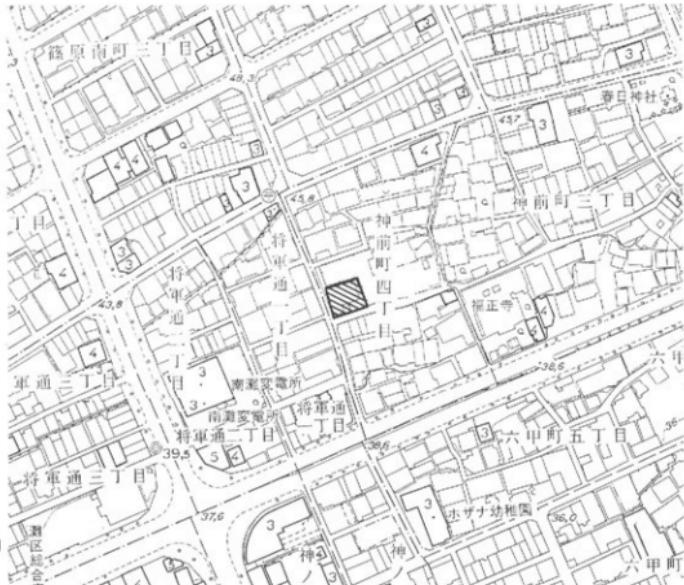


fig.49
調査地点位置図
1 : 2500

2. 調査の概要 現地表下 0.4 ~ 0.6m (標高 42.30 ~ 62.60m) で検出された遺構面である。江戸時代の土坑 2 基、溝 2 条、ピット数か所を検出した。

- 第1遺構面
- SK 01 楕円形の土坑で、 $1.2 \times 2.2\text{m}$ 以上、深さ 10~15cm である。埋土内より、須恵器・土師器・瓦器・弥生土器が出土している。
 - SK 02 楕円形の土坑で、 $1.7 \times 2.7\text{m}$ 以上、深さ 10~15cm である。埋土内より、須恵器・土師器が出土している。
 - SD 01 東西方向にのびる溝状遺構で、幅 45~65cm、深さ 10~20cm である。埋土内より、土師器が出土している。
 - SD 02 南北方向にのびる溝状遺構で、幅 60~80cm、深さ 10~15cm である。埋土内より、須恵器・土師器・陶器が出土している。
- 第2遺構面 現地表下 0.5 ~ 0.7m (標高 42.20 ~ 42.50m) で検出された遺構面である。鎌倉時代頃の溝 2 条、鎌倉時代~室町時代頃のピット数か所を検出した。
- SD 03 南北方向にのびる溝状遺構で、幅 2.1 ~ 3.4m、深さ 25~40cm である。埋土内より鎌倉時代の須恵器・土師器・瓦器が出土している。
 - SD 04 東西方向にのびる溝状遺構で、幅 60cm 以上、深さ 10~15cm である。埋土内より、土師器が出土している。

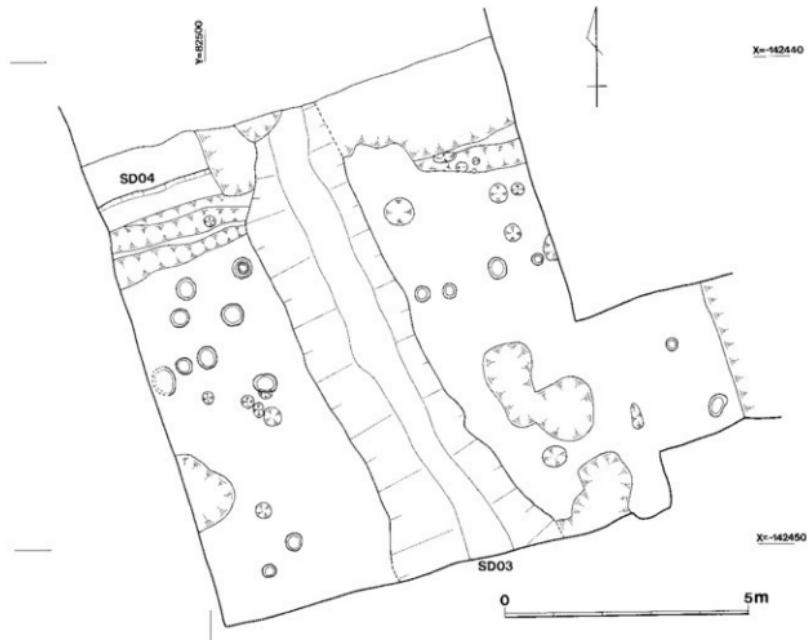


fig.50 第2遺構面平面図

第3遺構面 現地表下 0.6 ~ 0.9m (標高 42.10 ~ 42.30m) で検出された遺構面である。奈良時代末 ~ 平安時代初頭頃の土坑 2 基・ピット数か所を検出した。

SK 03 楕円形の土坑で、 $2.2 \times 1.4\text{m}$ 以上、深さ 10 ~ 15cm である。埋土内より、土師器・弥生土器が出土している。

SK 04 楕円形の土坑で、 $0.6 \times 1.3\text{m}$ 、深さ 5 ~ 10cm である。埋土内より、勾玉・土師器・弥生土器が出土している。勾玉は碧玉製で、全長 1.7cm、厚さ 3.5mm である。片面より穿孔しており、穿孔の直径は 2.0mm である。勾玉の時期については、古墳時代中期頃と考えられる。

第4遺構面 現地表下 0.7 ~ 1.0m (標高 41.90 ~ 42.10m) で検出された遺構面である。弥生時代後期末 ~ 古墳時代前期初頭頃の堅穴住居 2 棟・土坑 1 基・ピット数か所・古墳時代前期 ~ 中期頃のピット数か所を検出した。

SB 01 方形の堅穴住居で、北側の約 4 分の 3 については第 2 次調査時に調査を完了しており、今回は、南端の約 4 分の 1 を検出した。

全体の規模は、南北 6.0m × 東西 6.0m、床面までの深さ 30 ~ 40cm である。主柱穴は 4 本で、床面中央に炉跡が検出されている。周壁溝は、幅 20 ~ 30cm、深さ 10 ~ 20cm で、全周している。ベッド状遺構は、幅約 1.0m、床面との比高差 10 ~ 20cm である。出土遺物とし

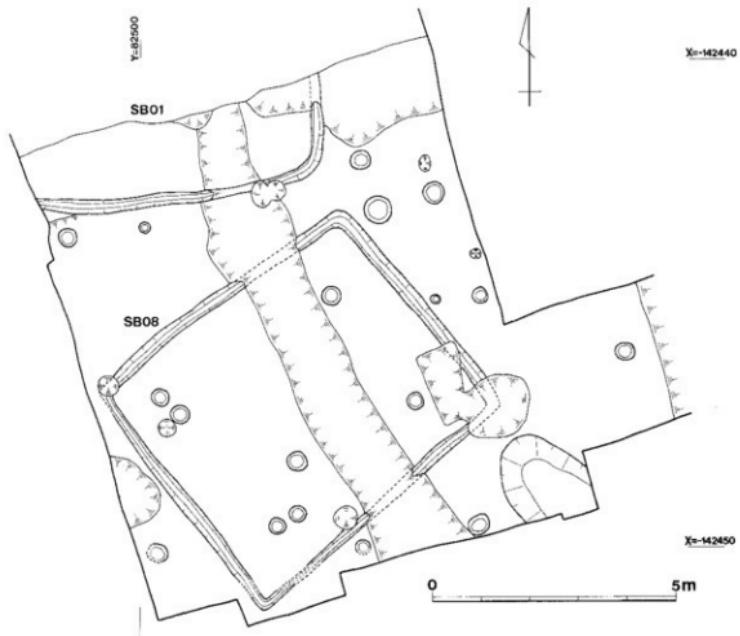


fig.51 第4遺構面平面図

て、土師器・弥生土器が出土している。

SB 08 方形の堅穴住居で、全体の規模は、南北 5.6m × 東西 6.6m、床面までの深さ 10cm である。主柱穴は 4 本で、周壁溝は幅 20~30cm、深さ 10~20cm で全周する。土師器・弥生土器が出土している。

SK 05 楕円形の土坑で 1.7 × 2.0m 以上、深さ 20~40cm である。埋土内より、土師器・弥生土器が出土している。

第 5 遺構面 現地表下 0.9 ~ 1.2m (標高 41.80 ~ 42.00m) で検出された遺構面である。弥生時代後期頃の土坑 2 基・溝 1 条・ピット数か所を検出した。

SK 06 楕円形の土坑で、1.2 × 1.0m、深さ 10~15cm である。埋土内より、遺物は出土しなかった。

SK 07 楕円形の土坑で、1.1 × 0.9m、深さ 10~15cm である。埋土内より、遺物は出土しなかった。

SD 07 南北方向にのびる溝状遺構で、幅 0.9m 以上、深さ 10cm 以上である。埋土内より、遺物は出土しなかった。

第 6 遺構面 現地表下 1.1 ~ 1.4m (標高 41.60 ~ 41.80m) で検出された遺構面である。弥生時代中期頃の土坑 2 基・溝 2 条・ピット数か所を検出した。

SK 08 楕円形の土坑で、1.5 × 0.8m、深さ 25~30cm である。埋土内より、縄文土器・弥生土器が出土している。

SK 09 円形の土坑で、直径 0.7m、深さ 10cm である。埋土内より、遺物は出土しなかった。

SD 06 東西方向にのびる溝状遺構で、幅 0.8 ~ 1.4m、深さ 10~15cm である。埋土内より、弥生土器が出土している。

SD 08 幅 1.2m 以上、深さ 10cm 以上である。埋土内より、遺物は出土しなかった。

縄文時代早期の 遺物包含層 現地表下 1.4 ~ 1.6m (標高 41.50 ~ 41.80m) で検出された遺物包含層である。縄文時代早期の押型土器・石鏃・サヌカイト剥片等が出土している。

3.まとめ 今回の調査により、当地域周辺では、古くは縄文時代早期から生活が営まれたことが判明した。また、弥生時代中期には、方形周溝墓が多く造られるようになった。今回までの調査で、6 基以上確認されている。但し、この時期の住居跡は現在のところ、当地域周辺では確認されていない。

一方、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて堅穴住居が造られ、人々が生活するようになり、その後も古代・中世から近世を通じて、現代に至るまで連続と人々が生活を営んできたことがわかつてきた。

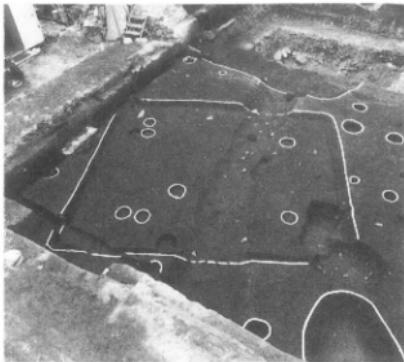
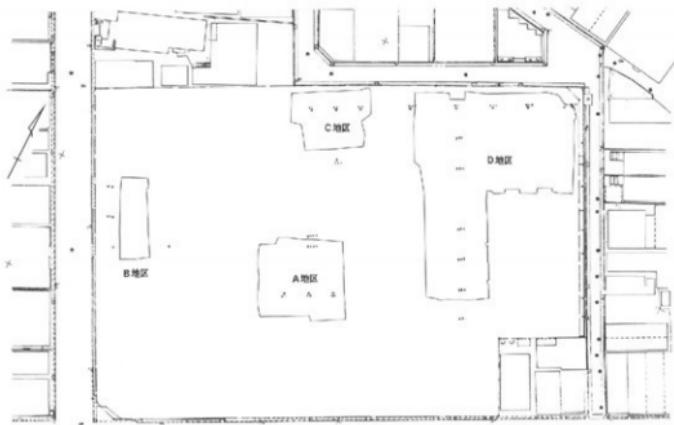


fig.52 SB 08

7. 日暮遺跡 第5次調査

1. はじめに

当調査区は、老人健康センター他建設工事予定地で、埋蔵文化財に影響を与える部分について調査を開始した。しかし、当初旧建物の基礎によりすでに破壊を受けていると考えられていた部分についても包含層、造構面が広がることが確認されたため、この部分についても基礎を撤去した後に調査を実施した。



2. 調査の概要 敷地内には、5か所の調査区が存在する。便宜上、A～E地区とした。
- A地区 調査区の南約4分の3ほどは擾乱により、第1遺構面は完全に削平されて、さらに一層下の明黄灰色粗砂層が露呈している。石組遺構2基、土坑1基、溝、ピット等が検出された。
- 石組遺構1 調査区のはば中央において検出された集石遺構である。幾度かの補修、造り替えがおこなわれており、初期の段階においては、南側の楕円形の周囲に、縁石状に比較的大きく偏平な石を巡らせていたようである。その後、規模を縮小して縁石が巡らされ、集石は最終段階のものであると考えられる。初期の遺構については、北側の一部および西側が地下室により削平されているため、形状等は確定できないが、平面形が瓢箪形の深さ90cm前後の掘り込みである。北側に1m、南側に4mほど弧状に残る列石がこれに伴うものと考えられる。規模縮小後の遺構は、東側の2×3mほどの袋状の部分に70cm幅ほどの溝が取りついた形をとる。長さは削平のため不明である。周囲には、人頭大の石が巡らされ縁石状を呈する。縁石の内側の上層は、拳大の石が一面にみられる。また中～下層には、やや大きめの石が入れられている。これら集石の厚さは40cmほどである。
- 石組遺構2 調査区の南西において検出された2列の石組であるが、両端ともに基盤による擾乱で削平されており抜がりは不明である。北側3.0m、南側2.0mほどが残る。2ないし3段分の石が組まれているが、組み方は雜で石の大きさもばらつきが見られる。
- SD 51 調査区の西側において検出されたL字状の溝である。幅40cm、深さ15cmを測る。



fig.55 A区空中写真



fig.56 石組遺構1

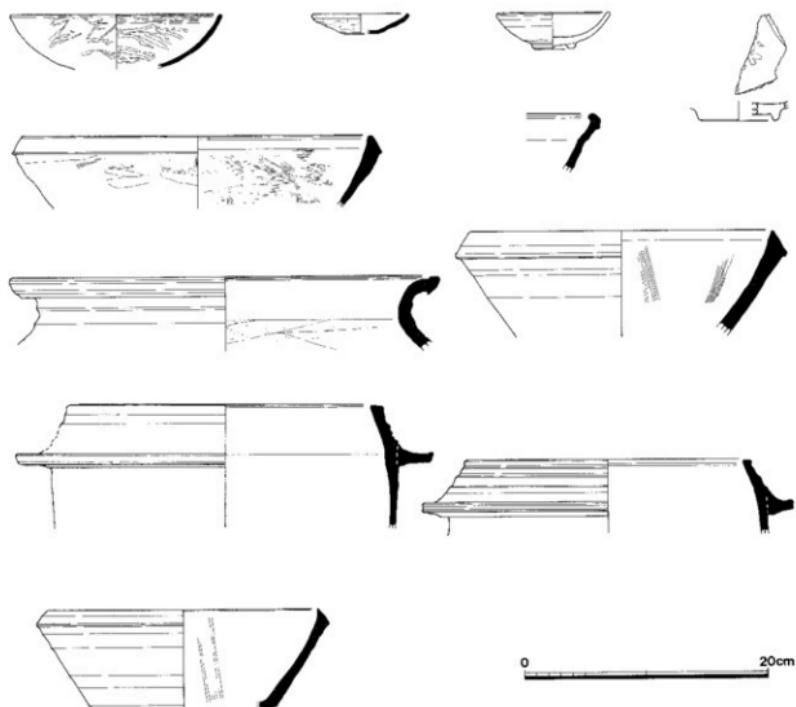


fig.57 A地区石組遺構1出土土器実測図

- ・ ピット群 調査区の南東部には方形および円形のピットが集中する。何棟かの建物が切り合うようであるが、削平と攪乱により不明である。
- B 地区 盛土以下、遺物を僅かに含む包含層を経て、地山である黄褐色砂質土となる。地表下3.0mまで断ち割り調査を行ったが、黄褐色砂質土以下のいずれの層からも遺構、遺物は検出されなかった。
- C 地区 中央部においては、旧建物の基礎が残存し大きく削平されている。据立柱建物1棟、土坑2基、落ち込み状遺構、ピット等が検出された。
- SB 01 2×3間以上の規模をもつ建物である。北側は調査区の外へ延び、東側は削平により不明である。
- SK 01 直径1mほどの円形の土坑で、深さ70cmを測る。上部30cmほどがややラッパ状にひらく。
- SK 02 直径1mほどの円形の土坑で、深さ40cmを測る。
- ピット 01 直径30cmのピットで、土師器の小皿が1枚出土した。東側半分は攪乱により壊されている。

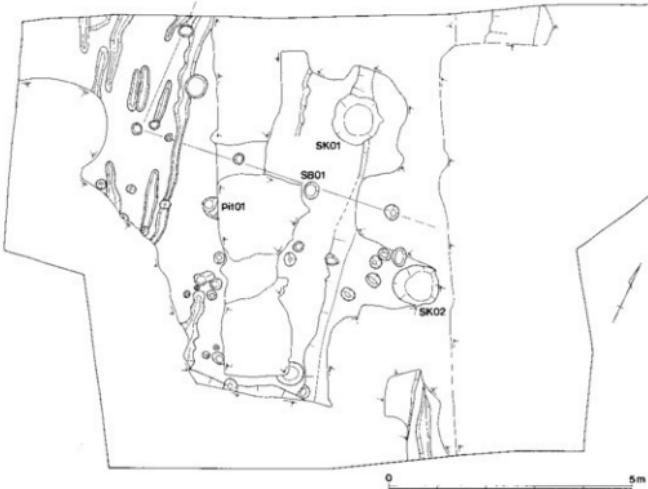


fig.58 C地区遺構平面図

- D地区** 北側約半分は旧建物の基礎により大きく削平されている。南側において2面、北側において1面の遺構面を確認した。
- 第1遺構面** 調査区南側約3分の1ほどで確認された暗灰色土をベースとした中世～近世後半にかけての遺構面である。
- 落ち込み 東西4.6m、南北3.0m、深さ10cmほどの不定型の落ち込みである。
- 耕作痕 全域で幅数～40cmほどの東西方向にはしる溝を検出した。遺構の残りは悪く、深いものでも10cmほどである。耕作痕であろう。
- 第2遺構面** 調査区の全域をとおして認められる遺構面であるが、東側では削平が著しいため、さらに下層が露呈している部分もみられる。掘立柱建物3棟、溝、土坑、ピットなどが検出された。
- SB 02 調査区南部において検出された南北2間×東西2間の掘立柱建物である。柱間は、南北1.8m、東西2.3～2.5mである。柱掘形の直径は22～30cmで、柱痕跡は確認できなかった。
- SB 03 調査区南部において検出された掘立柱建物で、南北2間×東西2間以上である。SB 02とはほぼ並行している。
- SB 04 調査区北部の西端において、隅丸方形の掘形をもつ2間分の柱穴が検出された。柱間は1.6mほどで、建物は東へ拡がるものと考えられる。柱掘形は擾乱により半裁された状態であるが、60cm程度の規模をもつ。
- SK 12 調査区中央部において検出された1.4×2.0mの隅丸方形の土坑である。深さ60cmで、断面形U字状の掘り込みである。埋土中層に焼土層がみられる。
- SX 13 調査区中～南部にかけて延びる幅2.0～2.8m、長さ10.0mの溝である。深さは30cmほ

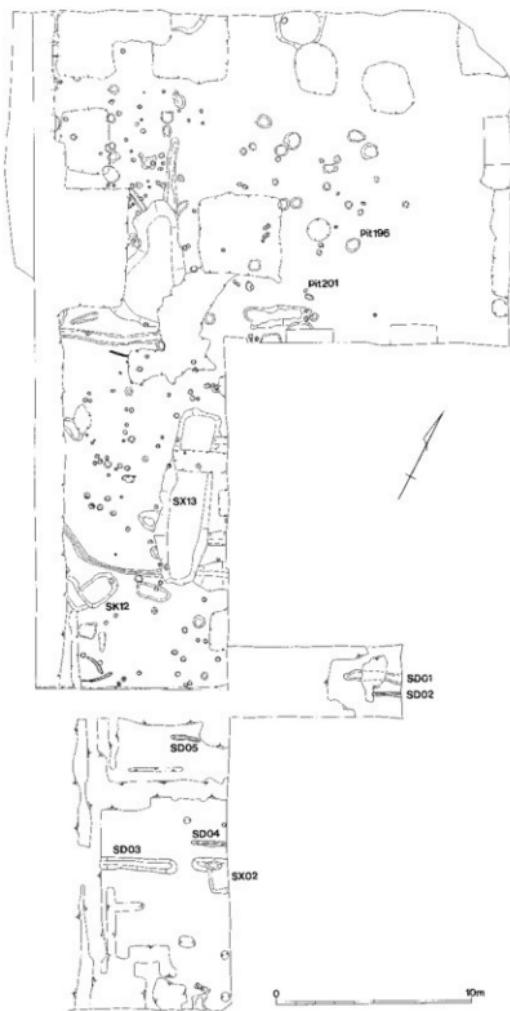


fig.59 D区遺構平面図

どである。

ピット 196 検査区中央部において検出された70×50cmほどのピットで、深さ15cmをはかる。土師器の小皿が1枚出土した。

ピット 201 直径15cmほどのピットである。銅鏡（北宋鏡）が8枚重なった状態で出土した。周辺には削平のため確定できないものの、隅丸方形のピットも数基存在することから、これらを柱掘形とする建物の地鎮に関わる遺構の可能性がある。

E 地区 第1遺構面では、擾乱が激しく、中世以降の鶴溝と考えられる溝5条と落ち込み2基を確認した。出土遺物には、土師器細片がある。

第2遺構面 第2遺構面では、ピット27基、土坑5基、不整形の落ち込み2基などを確認した。ピットは直径20~30cmで、掘立柱建物を構成するには至らない。出土遺物は全く確認できなかつたため、遺構の時期は特定できない。

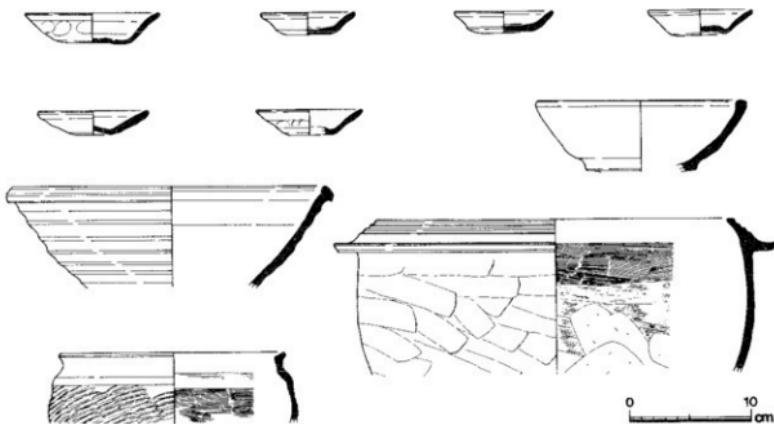


fig.60 SX 13 出土土器実測図

3.まとめ

今回の調査においては、掘立柱建物4棟、集石遺構2基をはじめとして土坑、溝、ピット等の遺構が検出された。

なかでもA区において検出された集石遺構については、他に例のない遺構であり、その構造、使用目的等は不明のままである。

当初、地下室等の大きな削平により遺構面の存在があやぶまれたにもかかわらず、このように敷地内各所に遺構が残存していることが確認され貴重な成果であった。ただ、遺構は平安～室町時代を中心とするものであり、従来知られている日暮遺跡のように、古墳時代の遺構面は確認されなかった。また距離的にも1～3次調査地と比べてやや離れている。さらに今回の調査のD区においては、東に行くに従い遺構が希薄になっていく、などの成果を踏まえると、異なる遺跡として捉えたほうが良いかもしれない。

8. 日暮遺跡 第7次調査

1. はじめに

当該地は、中小河川によって形成された沖積地先端から低位段丘面に立地している。調査地は、ほぼ北東から南西方向に緩やかに傾斜する地形である。今回の調査は、住宅付寺院建設に先立つもので、当該地の敷地のほぼ全域の約190m²、南北14m、東西13mについて発掘調査を実施した。

fig.61
調査地点位置図
1:2500



2. 調査の概要

調査は盛土及び無遺物層を重機により掘削し、それより下層部分については人力による掘削を行った。

第1遺構面

現代盛土及び旧耕土を除去したのち、暗褐色砂質土を基盤層とする第1遺構面となる。幅約20~30cm、深さ3~5cmの比較的浅い溝が東西方向に數十条、ほぼ等間隔で検出された。溝内からは土師器の細片が出土したのみで、時期については不明である。また、この溝を切るように、幅約60cm、深さ約10cmの南北方向の溝が一条検出された。近世の磁器・瓦が出土した。

第2遺構面

暗褐色砂質土を除去した後、褐灰色シルト混砂質土上面において溝2条と長方形状の遺構を検出した。

SD 101 最大幅1.8m、深さ10~20cmを測る比較的浅い溝で、西側の肩が調査区外になる。土師器片が少量出土したのみである。

SD 102 幅約30cm、深さ約5cmを測り、調査区の中央を南北方向にのびている。土師器片が数点出土したのみで、時期については不明である。

SX 101 長さ2.5m、幅85cm、深さ約10cmを測る長方形の浅い落ち込み状遺構である。遺物は土師器片が少量出土したが、時期については不明である。

第3遺構面

- 黒褐色砂泥シルトを基盤層とする第3遺構面では、竪穴住居4棟、土坑7基、集石遺構3基、落ち込み状遺構6基、溝2条、ピット多数を検出した。
- SB 201 調査区の北西隅で確認した方形に近い竪穴住居で、南東部分しか検出されなかった。検出面から床面までは約15cmである。直径約35cm、深さ9cmの南東側にあたる主柱穴を1基検出した。なお、柱穴底には石が置かれていた。土器器の細片が少量出土したが、時期については不明である。
- SB 202 南半分がSB 203や擾乱によって削平され、西侧が調査区外になるため正確な規模は判らないが、方形の竪穴住居と思われる。検出面から床面までは約30cmである。北東隅で直径約15cm、深さ7cmの浅いピットを検出したが、主柱穴とは考えにくい。遺物の出土はなく、時期については不明である。

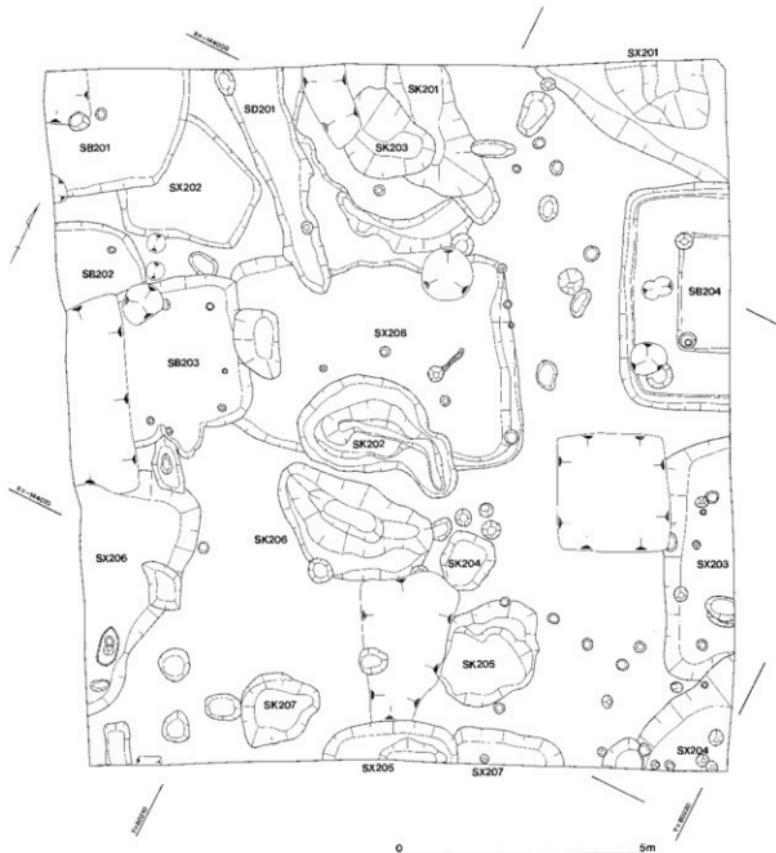


fig.62 第3遺構面平面図

SB 203 南北 3.1m、東西確認長 2.3m の方形の竪穴住居で、西側部分は擾乱によって削平されている。検出面から床面までは約 40cm である。ピットは 6 基検出したが、いずれも直径 10~20cm、深さ 10~15cm の比較的浅いもので、主柱穴と考えにくい。また、ベッド状造構や周壁溝は確認できなかった。土師器の細片が出土しただけで、時期については不明である。

SB 204 調査区の東側で確認した南北 4.6m、東西確認長 2.3m の方形の竪穴住居で、東半分は調査区外になる。検出面から床面までは約 40cm である。また、幅約 25cm、深さ約 7cm の周壁溝とベッド状造構を確認した。主柱穴は西側の 2 基を確認したが、各柱穴はそれぞれ直径約 35cm、深さ約 60cm で南西側の主柱穴は柱痕が確認された。出土遺物から、古墳時代前期初頭の竪穴住居と考えられる。

SK 201 調査区北側で、SK 203 に切られて確認された椿円形の土坑である。長さ 3m 以上、幅 1.6m 以上、深さ約 50cm を測る。遺物の出土はなく、時期については不明である。

SK 202 調査区のはば中央で確認した集石造構である。長さ 3.5m、幅 2m、最深部約 75cm を測る不整椿円形の土坑で、中央部では拳大の花崗岩が集中した状態で検出された。土師器の小片が僅かに出土したのみで、造構の性格や詳細な時期については不明であるが、おそらく古墳時代前期であろう。

SK 203 SK 201 を切ってつくられた椿円形の土坑である。長さ 2m 以上、幅 1.6m、深さ約 60cm を測る。土師器の細片が少量出土しているが時期については不明である。

SK 205 造構の西側の肩を一部擾乱によって削平をうけているが、円形に近い土坑である。長さ 2.4m、幅 1.9m 以上、深さ約 25cm を測る。遺物は土坑の上層で投棄された状態で出土した。土坑中央部の土器検出面では焼石と、厚さ 15~20mm の焼土が確認された。出土遺物から古墳時代前期前半頃と考えられる。

SK 206 SK 202 の南側で接するように確認された土坑である。長さ 3.4m、幅 2m、最深部は 1m を測る椿円形の土坑である。遺物は全く含まれていなかったため、時期については不明である。

SK 207 調査区の南側で確認した不整円形の土坑で、SK 202、SX 205 と同じく集石造構である。長さ 1.8m、幅 1.5m、深さ約 50cm を測り、土坑の中央部で拳大の花崗岩が投棄された状態で出土した。遺物は出土せず、時期については不明である。

SX 202 SB 201 によって切られた方形の造構で、底面は平坦である。造構検出面からの深さは約 10cm を測る。遺物の出土も少なく、造構の性格は不明である。

SX 203 調査区の東隅で確認された造構で、東側が調査区外にのびるため、規模・形状等については不明であるが、南北長 5m を測り、底面はほぼ平坦である。

SX 205 最大幅 2.8m、深さ約 40cm の集石造構である。拳大の花崗岩が密集した状態で検出された。造構内には遺物は含まれず、時期や性格については不明である。

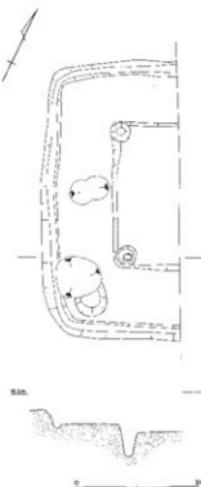


fig.63 SB 204 平・断面図

SX 206 最大長 5.2m、最大幅 2.5m、深さ30cmを測るが、西側が調査区外にのびるため規模・形状等については不明である。一か所に土器が集中して検出され、甕が多く、高杯も含まれる。庄内式併行期に相当すると考えられる。

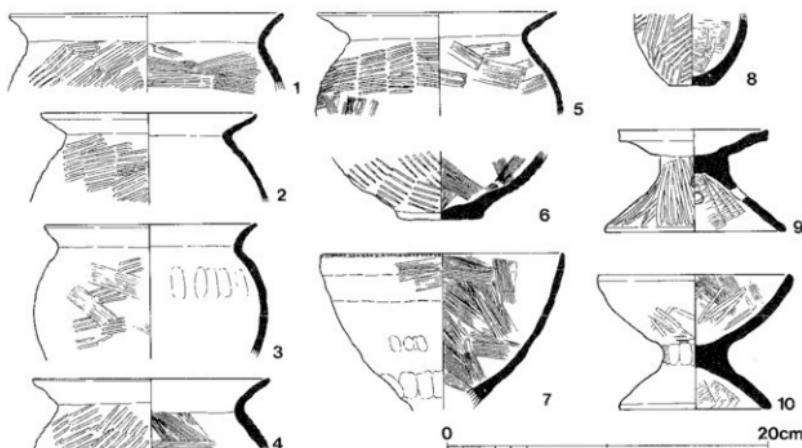


fig.64 SX 206 出土土器実測図

SX 208 調査区のほぼ中央で確認した南北長 4.5m、東西長 5.7m 以上、検出面からの深さ約20cmを測る方形の遺構である。当初、遺構検出面で方形のプランが検出されたため、堅穴住居を想定していたが、周壁溝、柱穴等は確認されなかった。遺物は土師器片が少量出土したのみで、時期については不明である。

SP 01～06 調査区の南西側で確認された方形や楕円形の掘形をもつピット群である。それぞれ南北に直線的に並ぶが、間隔が不規則なため建物の想定は難しい。ピットはそれぞれ、長さ60～100cm、幅50～75cm、深さ20～30cmを測る。遺物は七輪器の小片が出土したのみで、時期については不明である、各ピットの埋土は同じである。

3.まとめ 今回の調査では、近世（第1遺構面）、中世（第2遺構面）、弥生時代後期末～古墳時代前期前半（第3遺構面）の遺構面が検出され、特に第3遺構面では豊富な遺構・遺物が確認できた。

堅穴住居は4棟確認できた。SB 201～203について明確に時期を特定できる遺物が出土していないので、時期ははつきりしないが、遺構の切り合い、上層の土器の出土状況から、古墳時代前期頃と考えられる。SB 204は周壁溝、ベッド状遺構が確認され、唯一時期の特定できる堅穴住居である。

また、3基の集石遺構を確認したが、同様な遺構が第4次調査でも確認されている。土坑の中に石塊を多量に投棄することの性格については判明しなかった。

当該地における集落は、第3・4・7次調査の結果から考慮して、微高地に弥生時代後期末～古墳時代前期前半の集落が縦起的に営まれていたと考えられる。

9. 祇園遺跡 第1次調査

1. はじめに

祇園遺跡は、天王川左岸の扇状地の扇頂付近に位置する。天王川は有馬道沿いに流下し平野部に抜け、石井川と合流して湊川となる。この遺跡の存在する地域は平野とよばれ、この地名が治承4年の福原遷都に際し安徳天皇内裏となった平清盛の別業のあったという「平野」の地名と合致し、当地に福原旧都の中枢があったものと推測されている。今回の調査地点の西にあたる湊山小学校の北三町ほどの所から、かつて多数の瓦・礎石が出土したという。しかし、その後は発掘調査の例も少なく、福原旧都の具体的な解明を行うまでは至っていない。

この遺跡についても中世の遺物の散布することがこれまで知られていたが、発掘調査の機会がなく、その内容は明らかでなかった。

今回、神戸三田線の拡幅計画にともない、試掘調査を行ったところ、その予定地にも埋蔵文化財の包蔵されていることが確認された。この結果にしたがい、工事予定地の発掘調査を行うこととなった。今年度はその北部について行った。



2. 調査の概要

調査の結果、縄文時代・弥生時代・平安時代・室町時代・江戸時代の遺構および遺物、鎌倉時代の遺物が確認された。調査地は北西から南東への傾斜をもち、遺構面は南部では間層をはさみ2面検出されたが、中部および北部では1面となっている。

江戸時代

調査区北部で柱穴、南部で土坑（SK 10）が検出された。

柱穴

SP 40 では瓦が、SP 41 では燈明皿が出土している。

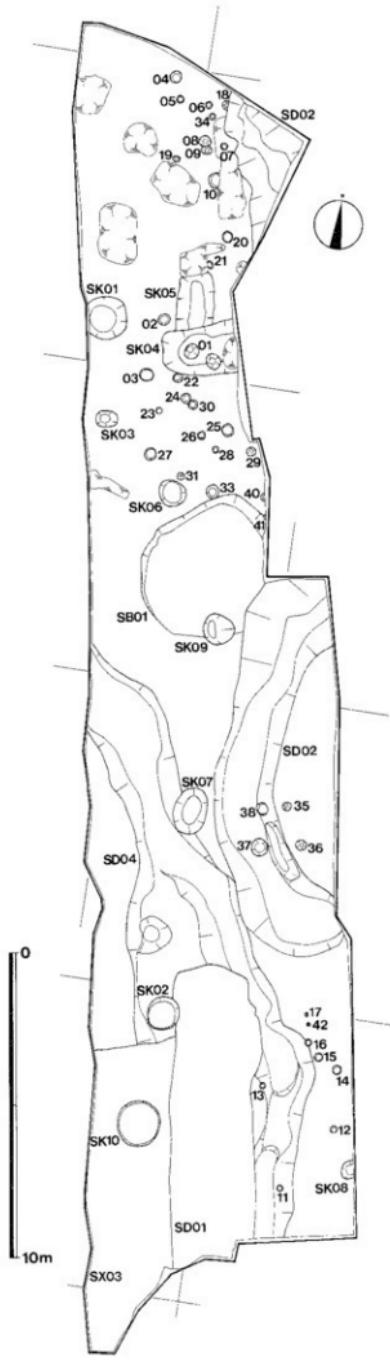


fig.66 造橋平面図

SE 01 室町時代の盛土（SX 03）を掘り込む平面円形の井戸である。径約1.4m、深さ約80cmをはかる。埋土の最下層は砂混じりの黒色シルトで、この層から焼瓦および染付けの磁器破片が出土しており、この遺構が埋められたのが江戸時代以降であることを確認できる。

室町時代 調査区の南部で石組の溝（SD 01）・柱穴（SP 11・13等）が検出された。またこの溝を構築するに際しては、斜面地を平坦面に造成していることが上層の観察から確認される。その際、谷状の窪地には埋め土を行っている（SX 03）。

SD 01 その両側に自然石を積んだ石組はその基底に置かれたものが残っていたに過ぎない。石組の裏込めからは縄文・平安・室町時代の遺物が出土しており、この溝が構築されたのは室町時代と推定される。

溝の埋土からは江戸時代の磁器・陶器が出土しており、江戸時代まで機能していたものと考えられる。なお、この溝の廃絶後、この石組に重なる位置で切り石を積んだ石組構が構築されているのが調査区南壁部分で確認できる。

この造構からは平安時代末の瓦がかなり多量に出土しており、福原旧都関連の遺物として注目される。

SX 03 谷状の窪みを埋めたものである。土壤化の程度から往時の表土であると推定される最上層からは、江戸時代の遺物も少量出土するのに対して、それ以下の層から出土するものは室町時代までのものに限られる。このことから、この造構が室町時代におこなわれ、その上面が江戸時代に至るまで地表であったと推定できる。なお、この盛土内からは鉢帯の右製丸鞘1点が出土している。

この北端では東西方向の石組が検出された。比較的大きな石が平坦面を上にむけて並べられていくように見える。この石組の中から室町時代（15世紀頃か）の羽釜が出土した。

平安時代 調査区の北部で柱穴（SP 01・02）・土坑（SK 04）が検出された。

SK 04 深さ約20cm、約80×120cm以上の平面隅円方形の土坑で土師器小皿が出土している。

弥生時代 調査区の北～中部で溝（SD 02）、北部で竪穴住居（SB 01）・土坑（SK 01・05・06・09）が検出された。

SD 02 残りのよい北部分で、幅約1.3m、深さ約70cmをはかる断面V字形で北から南へのびる溝である。弥生時代末から古墳時代初めの土器が出土している。

SB 01 柱穴も確認されず、後世の流失のため平面形もはっきりしないが、竪穴住居と考えられる。床面上からは砾石・土器が出土している。間層をはさんで埋土上層からは鐵鎌とともに多量の土器が投棄されたような状態で出土している。床面・埋土上層の土器とともに弥生時代末のものである。

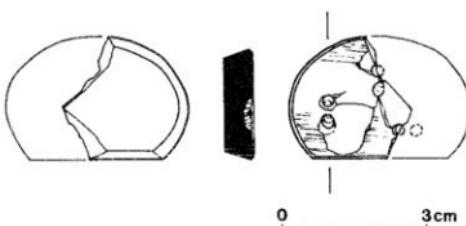


fig.67 SX 03出土丸窓実測図

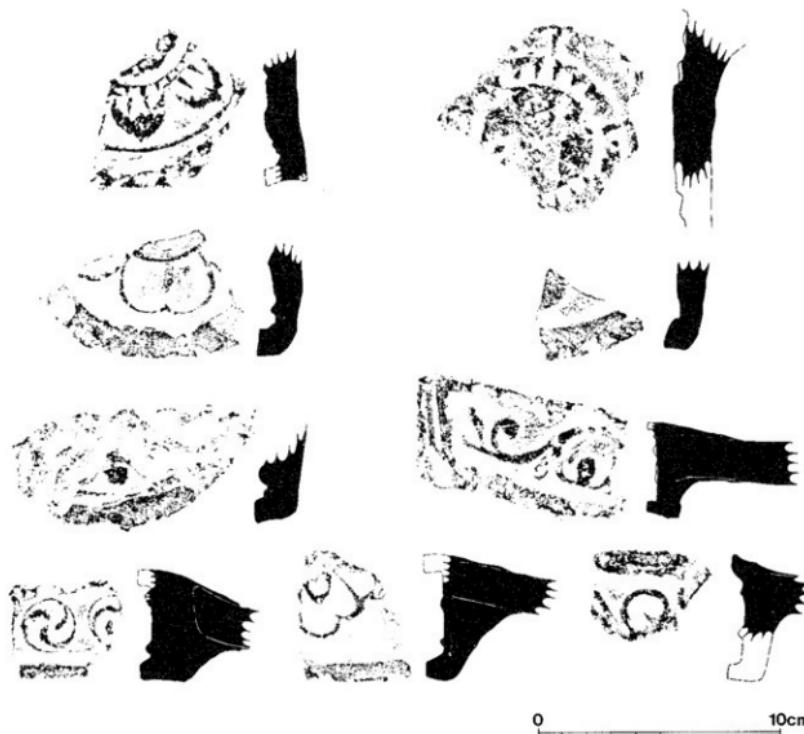


fig. 68 出土瓦拓本

SK 04 長さ 1.3m 以上、幅約 60cm、深さ約 25cm の平面長槽円形の土坑。SK 04 に切られる。弥生時代末の土器が出土している。

縄文時代 調査区中～南区で流路 (SD 04) が検出された。確認された最大幅約 5.0m、深さ 80cm をはかり、北西から南東に流下する。

埋土から早期・前期の縄文土器片、サヌカイト製の石器が出土している。

3.まとめ 本遺跡において縄文時代・弥生時代末期などの遺構・遺物が確認されたのは新知見であった。しかし、神戸市では他の地域においても六甲山系から平野部に移る傾斜の変換点で東灘区森北町遺跡、灘区篠原遺跡など同様の時期の遺跡が確認されており、その共通性が注意される。

また、遺構については柱穴が数基検出されたにすぎないが、平安時代末期の遺物が多く出土したことが特に注目される。瓦の存在は瓦葺き建物の存在を予想させ、その年代観から福原旧都関連の遺構の存在することを予想させる。今後の調査の進展によって福原旧都の様相があきらかになると考えられる。

くさかべきた 10. 日下部北遺跡 第3次調査

1. はじめに

日下部北遺跡は、有野川の右岸に位置し、平成2年に県道三木・三田線の自歩道設置工事に伴う試掘調査により発見された。平成3年度に行った発掘調査（第1次調査）では、鎌倉時代の遺構が確認されている。今回の調査は、自歩道設置のため、いずれも幅4mで長さ約44mと30mの範囲である。

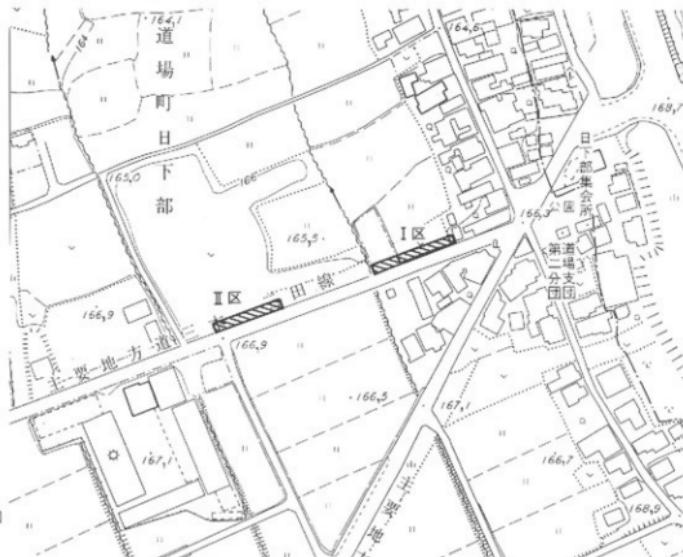


fig.69
調査地点位置図
1 : 2500

2. 調査の概要

I 区 現況地表面より約85cmは、現代の盛土、水田土層で、その下層に暗黄褐色砂質土（厚10cm）、灰褐色砂質土（厚15cm）の順に堆積している。遺構面は、暗黄褐色粘質土あるいは

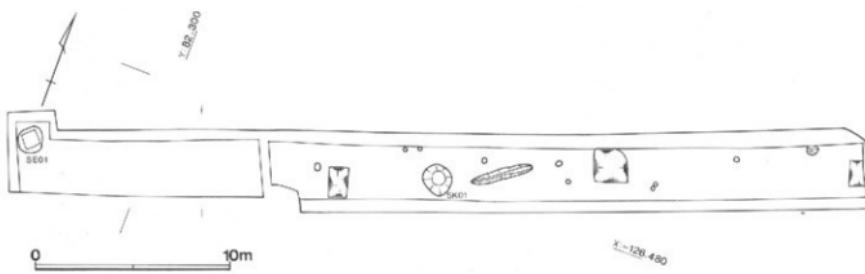


fig.70 I区遺構平面図

淡黄灰褐色極細砂で、東半部では砂礫を多く含む土層面となっている。遺構面直上の灰褐色砂質土層には中世の須恵器・土師器片が含まれているが、量的には僅かである。

検出された遺構は、溝状遺構1条、土坑1基、井戸1基、ピット10か所である。

SK 01 径1.5m、深さ0.6mのほぼ円形の土坑で、掘形が二段掘りの形状をなしている。土坑の堆積土内より、礫と土師器皿2点が出土した。これらの遺物は土坑内中位の灰色粘土層上面より出土している。

SE 01 調査地西端で検出された井戸である。掘形の平面形は、一辺1.3mの正方形の三隅に辺をもつ不整な七角形で、深さ1.2mである。井戸枠は縱方向の板材を内法で一辺80cmの正方形に組み、横棟と四隅の柱で固定している。水溜めは、曲物の桶の底板を除いた物が転用されていた。曲物は、直径54.5cm、深さ36.4cmである。井戸内の埋土からは、須恵器・土師器の細片が僅かに出土した。

I区の遺構の時期は、出土遺物が僅少ではあったが、鎌倉時代頃と考えられる。

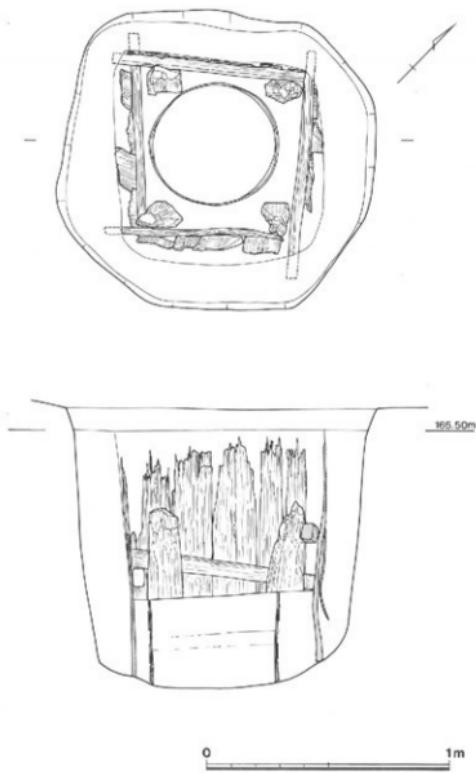


fig.71 SE 01 平・立面図

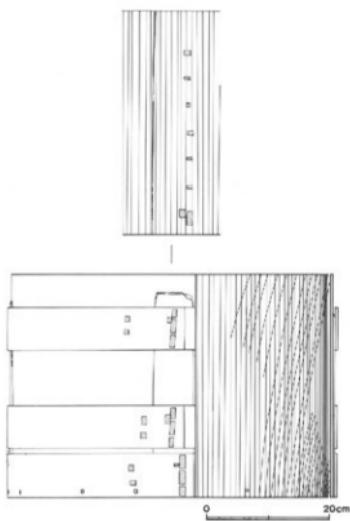


fig.72 SE 01 出土曲物

- II 区 I 区より約50m西に位置する調査地で、平成3年度の第1次調査地との中間にあたる。調査地は近年に、1.4mの埋土がなされており、その下層に現代水田層がある。この現代水田層のはば直下が遺構面となり、遺物包含層（暗灰発色粘質土）は調査地東半部に僅かに存在するだけである。遺構面は、暗茶褐色粘質土あるいは黄褐色粘質土層面であるが、これらの層は薄く、その下層の灰褐色砂礫層が現れているところが多い。検出された遺構は、溝、柱穴、土坑、不定型な落ち込みおよびピットである。
- SD 01 調査地東端にある幅4m以上、深さ20cmの溝状の落ち込みである。その埋土は灰褐色粘土で、堆積状況から流路状のものと考えられる。埋土より、須恵器、土師器の土器類、木製品などが出土している。遺物から、8世紀半ば頃に埋没したと考えられる。
- 土 坑 土坑としたものは7基あるが、いずれも不整形で比較的浅く、用途は不明である。
- 柱 穴 ピットは51か所検出され、調査地西半部の多くは明らかに柱穴と判別できるが、調査範囲の制約もあり建物として捉えることはできなかった。おそらく3棟以上は存在するようである。
- SX 01～03 不整形な落ち込みで、深さは10～30cmである。これらは形状からみて、人為的に掘削されたものかは不明である。SX 01～03の埋土には、非常に多量の土器が含まれていたが、出土状況からは、埋土とともに流入したものと考えられる。出土した土器は須恵器片、土師器細片であり、8世紀後半のものを中心とする。
- 調査地東半のこのSX 01～03の上面には、暗灰褐色の遺物包含層が堆積していた。この上層より出土した土器には、須恵器・土師器・縁軸陶器・黒色土器がある。これらの出土土器の時期は7世紀代から9世紀代までと幅が見られるが、8世紀代のものが量的には多い。また、奈良時代の帶金具が出土した。

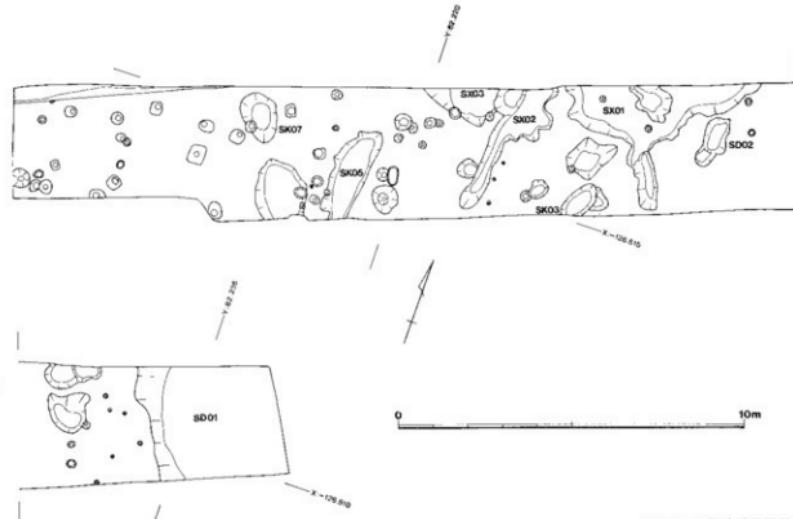


fig.73 II区遺構平面図

3. まとめ

これまで日下部北遺跡の周辺では、古墳時代・平安時代以降の遺跡は知られていたが、今回の調査で新たに奈良時代の遺構・遺物が発見された。奈良時代の遺構が確認されたII区は、地形的に有野川と有馬川に挟まれた微高地に位置しており、I区及び第1次調査地の地盤より、比較的安定していると見られる。奈良時代の遺跡の範囲は、調査結果からみてII区を中心に南北に拡がると考えられる。

平安時代以降の遺跡は、I区や第1次調査地で確認されており、この周辺の広範囲に存在するものと推測される。

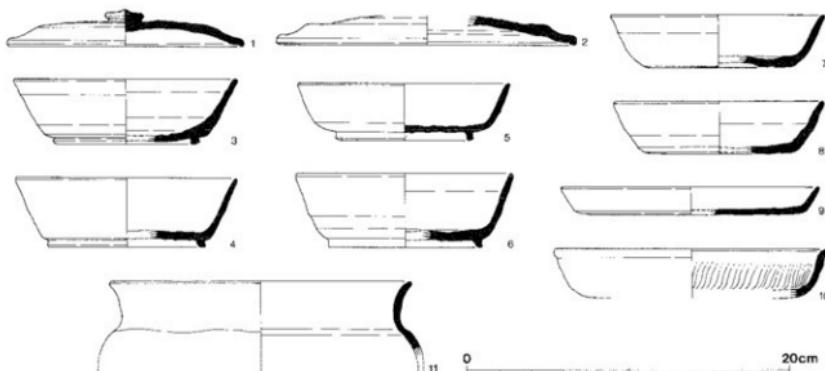


fig.74 SK 05 出土土器実測図 (10・11: 土師器 他は須恵器)

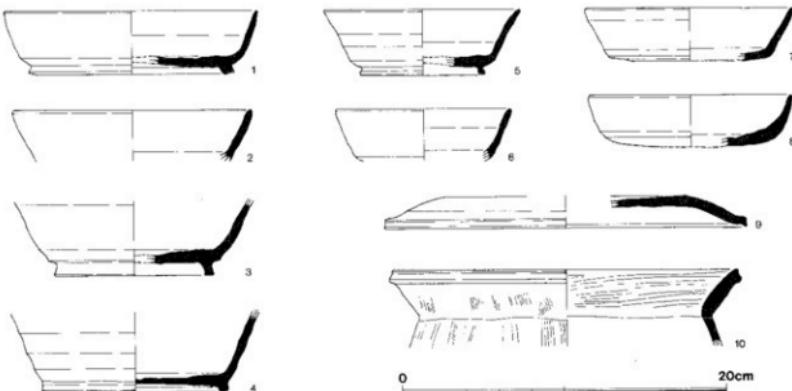


fig.75 土坑・溝出土土器実測図 1～3・5・6: SD 01 4: P-18 7: SK 07 8: SK 03 9: SD 02 10: P-26
(10: 土師器 他は須恵器)

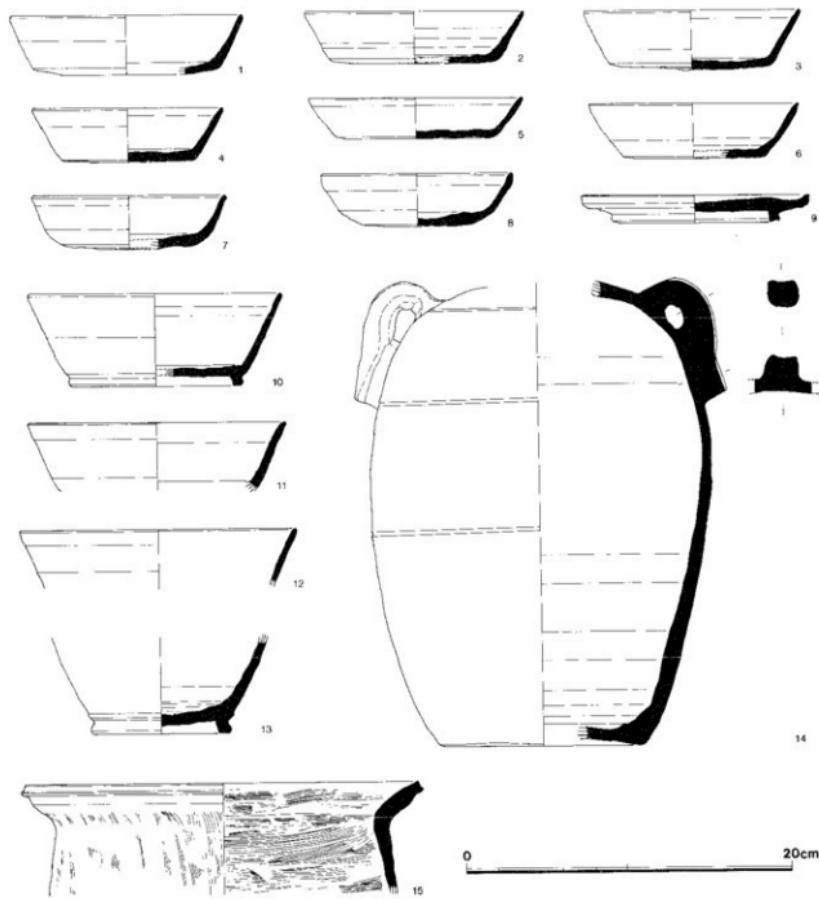


fig.76 SX 01 出土土器実測図 (15: 土師器 他は須恵器)

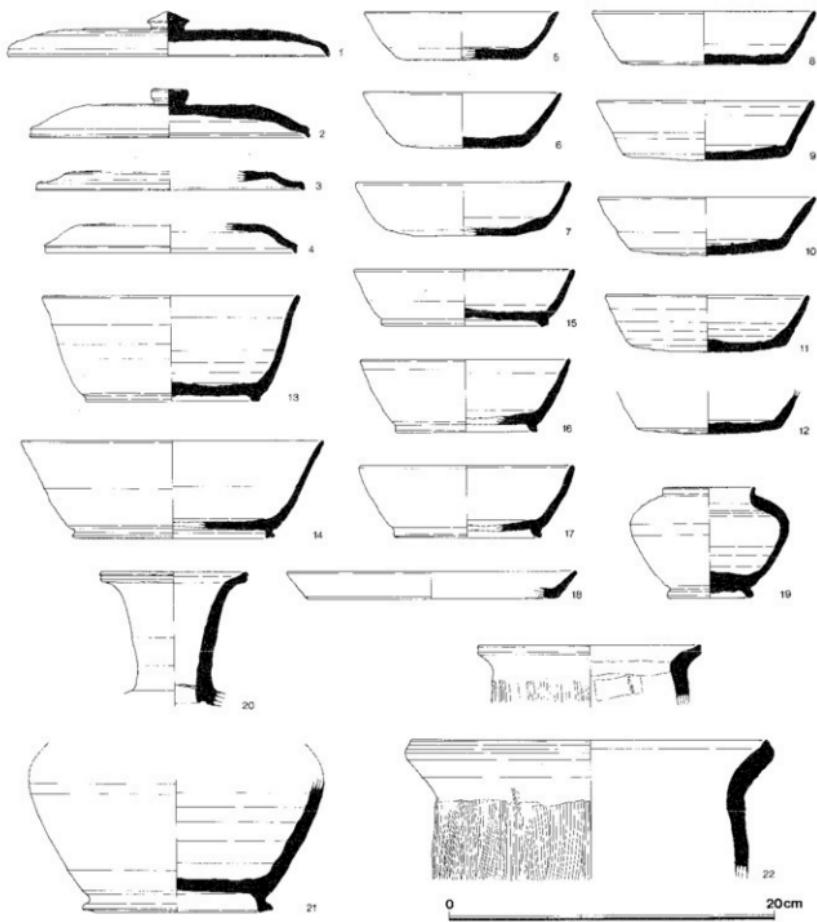


fig.77 SX 02・03出土土器実測図 (11・16・17 : SX 03 他は SX 02 22・23 : 土師器 他は須恵器)

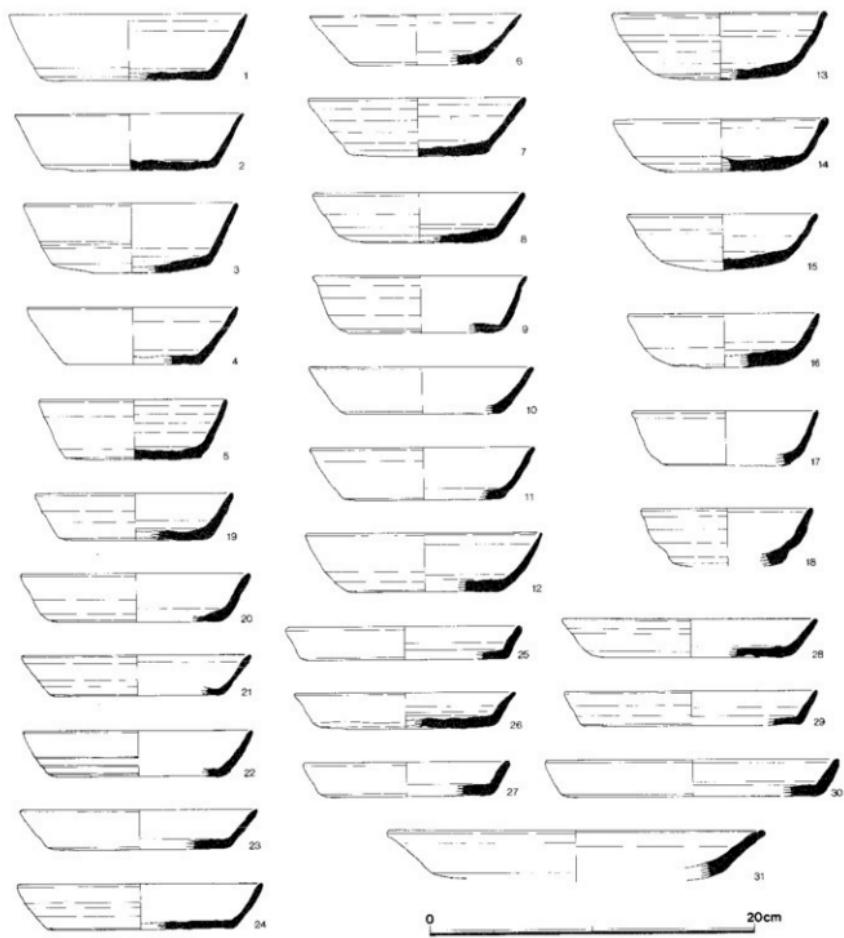


fig.78 II区包含層出土須恵器実測図

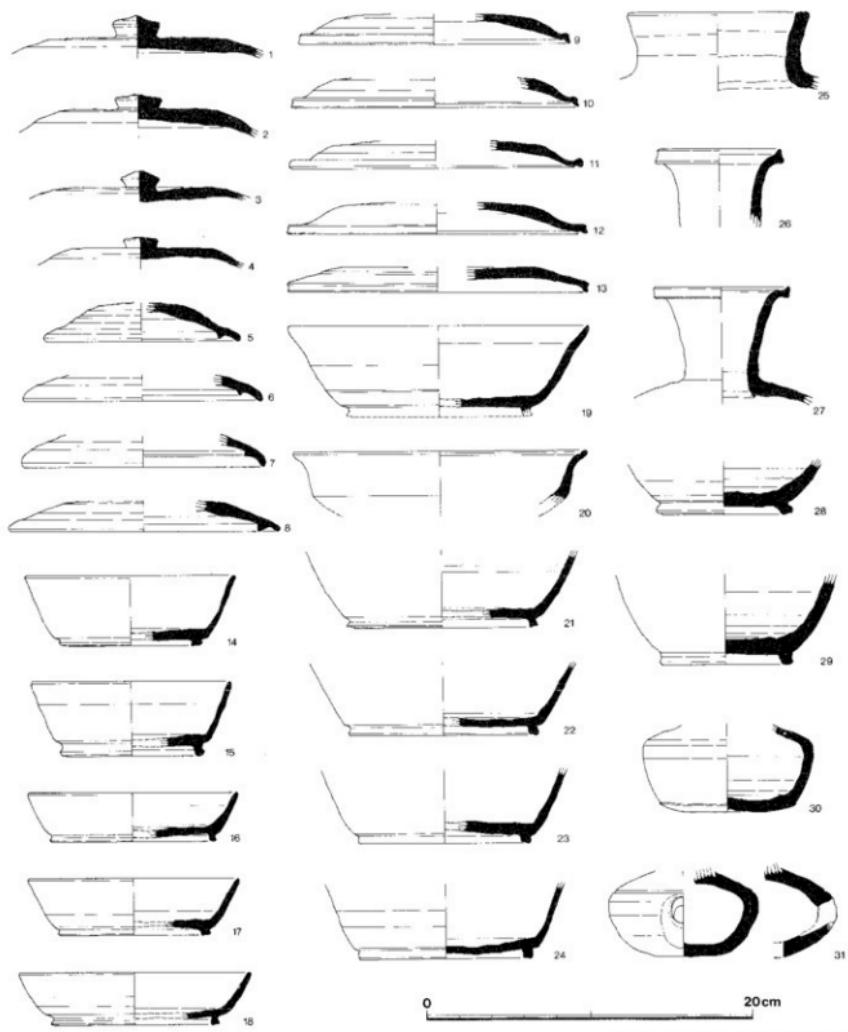


fig.79 II区包含層出土須恵器実測図

ほくしん 11. 北神ニュータウン内 第21・22地点遺跡

1. はじめに

神戸市域の北東部から三田市南部の丘陵部には、兵庫県、神戸市と住宅都市整備公団が「神戸三田国際公園都市」として、総面積約2000ha、計画人口約14万人という大規模な住宅・工業団地の造成、建設工事を行っている。三田市側には、北摂・三田ニュータウン、神戸市側には、六甲北ニュータウン等の街作りが計画・実施されている。

このなかで、北神戸第1～3地区事業地域内の遺跡（以下、北神ニュータウン内遺跡とする）は、昭和45～46年の西神、北神地域埋蔵文化財分布調査によってその存在が明らかとなり、昭和54年から発掘調査を実施し、縄文時代～室町時代の遺跡が確認されている。

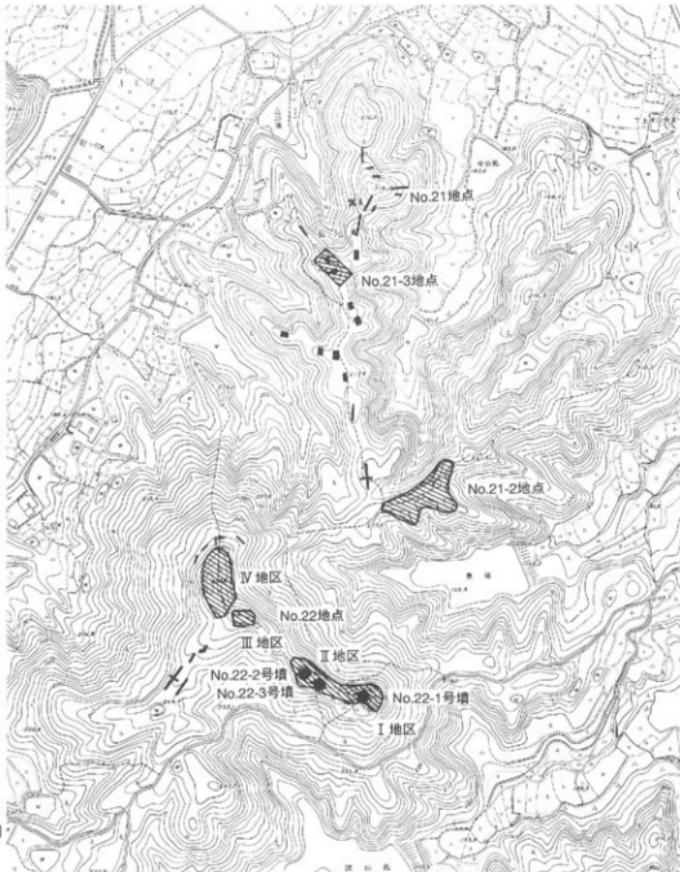


fig.80
調査地点位置図
1 : 5000

2. 調査の概要 北神戸第2地区ではこれまでの分布・試掘調査によって山城の存在が確認され、現況保存の予定となっている北神ニュータウン内遺跡No.20・21地点周辺の試掘調査を行い、遺跡の範囲を確定した。また、今年度工事が予定されている範囲で、埋蔵文化財が確認された2か所の部分について発掘調査を実施した。さらに、古墳が発見されたNo.22地点周辺の尾根の埋蔵文化財試掘・発掘調査を実施した。

No.21地点周辺 昭和61年度の試掘調査によって、No.20地点では、土坑墓や基壇状の段をもつ礎石建物跡が確認され、山城であることが明らかになっている。

しかし、No.21地点より南の尾根については、当時は未買収地の部分があり、山城の範囲を明らかにすることができなかつた。そのため、今年度は、山城の範囲確認の試掘調査を再度行つた。

尾根上を中心にNo.21-G～Zの合計21カ所の試掘ポイントを設定し、このうちNo.21-Iトレンチで、炭の詰まつたピットと平安時代末～鎌倉時代の土器を確認した。また、No.21地点周辺のトレンチでは、山城の堀を検出した。その他のポイントでは、遺構・遺物ともに確認されなかつた。

No.21-2地点 No.21地点の南約320mの東へ派生する尾根上にあり、逆三角形の平坦な人工改変地が広がつてゐる。当初、山城の廓の一部ではないかと考えられ、発掘調査を行つたが、遺構は確認できず、弥生土器、石鎚、須恵器、土師器、銅鏡（寛永通寶）が斜面の流土中から出土した。

なお、土層観察によると、平坦面では、薄い耕作土層と思われるような、土壤化が進んだ上層が、表土（腐植上層）直下からはほぼ全域で確認されており、耕作地として利用されていた可能性が高い。また、立ち割り調査の結果、尾根の頂部を削平し、その土で南北の斜面を埋めて平坦面を形成したことが判明した。地形の改変が行われた時期は明らかでないが、調査前の状況は、アカマツ林となっており、それらの中には40～50年輪を数えるものが少なくなつたため、それ以前の造作であると考えられる。

No.21-3地点 No.21-Iトレンチでは、炭の詰まつたピットと平安時代末～鎌倉時代の土器を確認したため、その部分を中心にして調査区を設定した。調査の結果、試掘調査で確認された遺構のほか、尾根の頂部をやや下がつた南斜面から土坑、ピットが検出され、石鎚、平安時代末～鎌倉時代の須恵器碗や銅鏡（寛永通寶）が出土した。また東斜面では、弥生時代（中期？）の土器が発見されている。

No.22地点（熊ノ望I地区） No.22地点の東端のピークにあたり、標高は約251mである。ここは眺望が開け、北東方向の宅原の集落を眼下に見ることができる。

No.22地点1号墳 調査前の状況は、頂部が平坦地となり、そのほぼ中央に三角点が設置されていた。樹木の成育は疎らで、小さなアカマツが生えていた程度である。南側は、造成工事のため、ピークの一部がカットされていた。また、西側は、自然崩壊で大きく抉られ、さらに頂部へ上がる道の部分も深く削られていた。この西側の自然崩壊の崖面に古墳時代の須恵器片が散乱しており、古墳の存在が窺われたため、発掘調査を実施した。

表土を除去し、流土の再堆積層である褐色系の極細砂を除去中に、斜面から50～10cm大の多量の石材（合計約630個、石質は凝灰質砂岩）が散乱した状態で出土した。

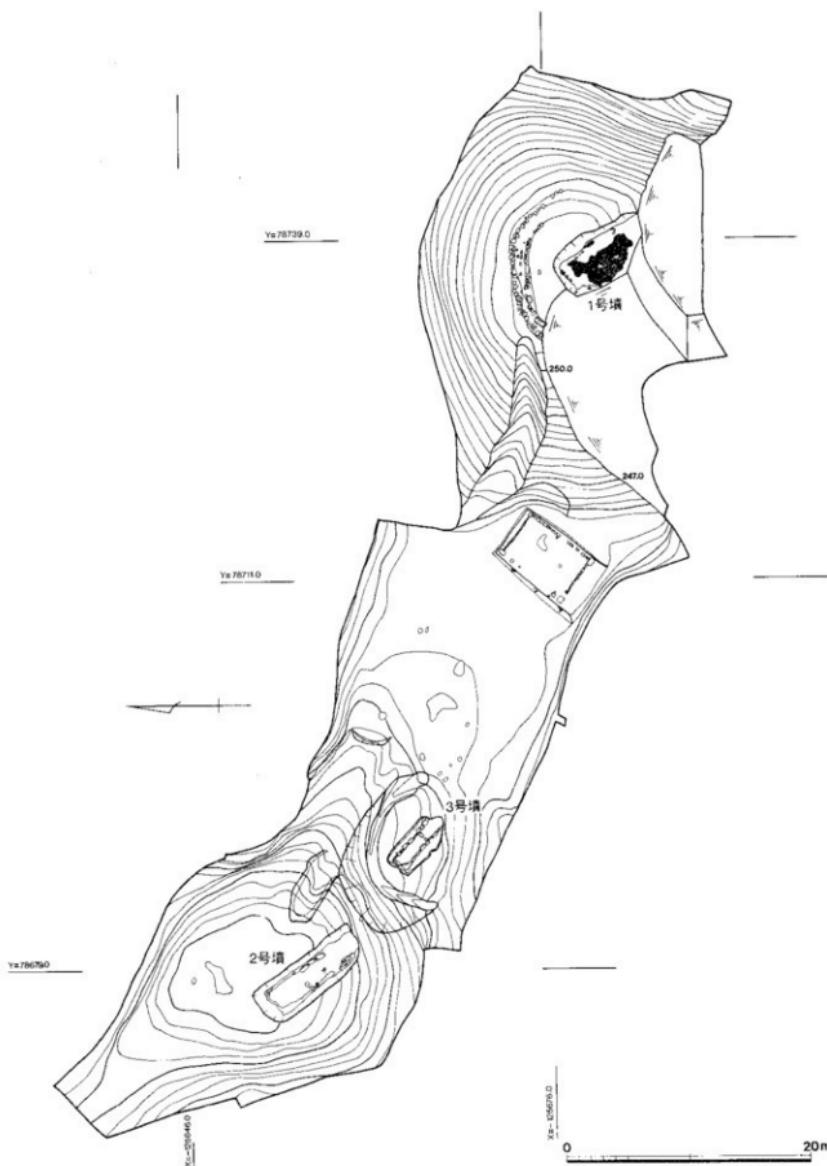


fig.81 No.22地点 I · II · III 拆迁区平面图

外護列石 また、傾斜変換点付近からは、石が列状に弧を描いて並んでいるのが確認された。この石列は、15~110cm大の石を上下2列に1石ずつ並べており、部分的に3石積み重ねるところもある。約15m分残存しているが、造られた当時に巡らされた範囲は明確ではない。

墳丘は、後世の削平と自然崩壊が著しく、正確な平面規模と高さは不明であるが、復元すると直径12~14mの円墳と考えるのが妥当であろう。



fig.82 №22地點 1号墳 平・立面図

埋葬施設 調査前の状況では、墳頂部が平坦に削平されており、埋葬施設の様子については、全く想定することができなかった。しかし、南端部の流土を除去してゆくと、部分が崖み、その部分から崩れた石材が多く出土しはじめ、板状の石が敷かれた状態で検出されるに至って横穴式石室の存在することが明らかになった。

横穴式石室は、掘形の残存長8m、最大幅4.5m、検出された最大の深さ0.8m、南東方向に開口し、主軸はS34°Eである。西側は自然崩壊によって崩れ、崖面になっており、南端は、造成工事によって削られている。側壁、奥壁ともに石のはほとんどは抜き取られ、原位置を保つものは数石しかなく、石室平面の形状については明確ではない。床面は、10~40cm程度の板石が隙間無く並べられており、それらの石に赤色顔料の付着した部分が確認された。

石材は、石室、外護（区）列石とともに凝灰質砂岩を使用している。これらの石は、この付近で産出し、当地点付近の崖面にも露頭しているのが見受けられる。



fig.83 №22地点 1号填石室 平·立面图

遺物 遺物は、床面からは鉄製品が1点、須恵器壺片が出土したのみであり、床面からやや遊離した状態で、須恵器高杯の壊部が出土した。その他の遺物はすべて石室を埋める堆積土と石材の抜き取りの穴から破片で出土した。

その他の遺構 A、D区の境界部分で、土坑（SK 01）が確認された。これは、長径約2.5m、短径約1.5m、深さ約35cmの楕円形で、上層には褐色極細砂、中層には炭を多く含んだ極細砂、下層には褐色系の極細砂、最下層には薄い炭層という堆積状況を呈している。古墳時代の須恵器の小片が出土したが、この遺構が石室を埋める堆積土を掘り込んでおり、出土遺物の示す時期の遺構であるとはいえない。

小結 I地区では、1基の古墳（No.22地点1号墳）が確認された。この古墳は、外護（区）列石を持ち、床面に板石を敷く横穴式石室を埋葬施設とする。石室はその形状は明らかでない。また、周辺の斜面からは多量の石材が散乱して出土しており、これは、石室の石を外して斜面に投棄したものと考えられる。

また、石室を埋める堆積土の観察では、西側～中央部にかけては土砂がほぼ水平堆積になっているのに対し、東側は、堆積土の上層から側壁の基底石のあった部分まで掘り抜かれた状態が確認できた。また、西側の水平に堆積した土砂からは須恵器が小破片になって出土しており、側壁や奥壁が残っていた時期に石室内が荒らされ、さらに時期を異にして東側の側壁があった部分が掘りこまれ、石材が抜き取られていることが判った。

石敷床面の遺物は極めて少なく、追葬のためかたずけられている可能性はあるが、2次床の面は確認できなかった。しかし、1号墳周辺から出土した須恵器はおよそ6世紀後葉～7世紀初頭頃の年代があてはまり、時期差が認められることから、追葬を行った可能性は否定できない。

石室が破壊された時期は、墳頂部が平らに削られた時期と関わりがあり、この時期に平坦面にSK 01を掘ったようである。SK 01の目的は、明らかではないが、後に述べるII地区およびII地区拡張区の近世末～近代初頭の修験道関係の遺構と深く関わっていると推察される。この段階で古墳の墳丘が削平されたと考えられる。



fig.84
No.22地点
1号墳全景

No.22地点 I 地区に続く西側の尾根で、標高 249.8m である。頂上は平坦地になっており、そのほど
(熊ノ望Ⅱ地区) は中央に最近まで役行者をまつる祠が建てられていた。祠の周辺には、樹齢 100 年を超えるヒノキ、アカマツが生えていた。

I 地区に、古墳があることから、II 地区からも発見される可能性が高かったが、後世の造作により、頂上部分が相当削平されており、その存在は不明であった。当初は近世～近代の遺構が確認されたのみであったが、南斜面で須恵器、石材等が散乱して出土し、頂上部が古墳である可能性が濃厚となってきたため、平坦面の精査をさらに続けたところ、近世～近代の石敷遺構や擾乱坑がある部分に重なって南東～北西にかけて幅約 3.5m、長さ約 10m、深さ約 1.0m の石室の掘形が発見された。

埋葬施設 石室の堆積土内からは、石材（凝灰質砂岩）の破片や少量の須恵器・土師器・ガラス小玉 3 個・碧玉製管玉 1 個・鉄製品（鉄釘？）が出土した。調査の結果、石室の石材が完全に抜きとられ、掘形のみが残存したものであることが判明した。掘形の検出状況から幅約 2.5m、長さ約 8～9m の横穴式石室が存在したものと考えられる。南東方向に開口し、主軸は S 37° E である。

出土遺物 石室内の堆積土から出土した遺物の下限時期は、7 世紀初頭頃である。追葬の有無は、明らかでない。また、後述の 3 号墳との間の斜面付近から、須恵器の甕 2 個体が破片となって出土した。いずれの古墳に伴うものかは判然としないが、2 号墳石室内からかきだされた遺物とみなされる。

周溝 頂上部分が祠を造るため、相当削平されており、墳丘の盛土も遺存していないが、わずかに周溝の底と思われるものが平坦面の北東部で確認されている。それから推定した墳丘の規模は直径約 10～12m 程度の円墳である。



fig.85 No.22地点 2号墳全貌

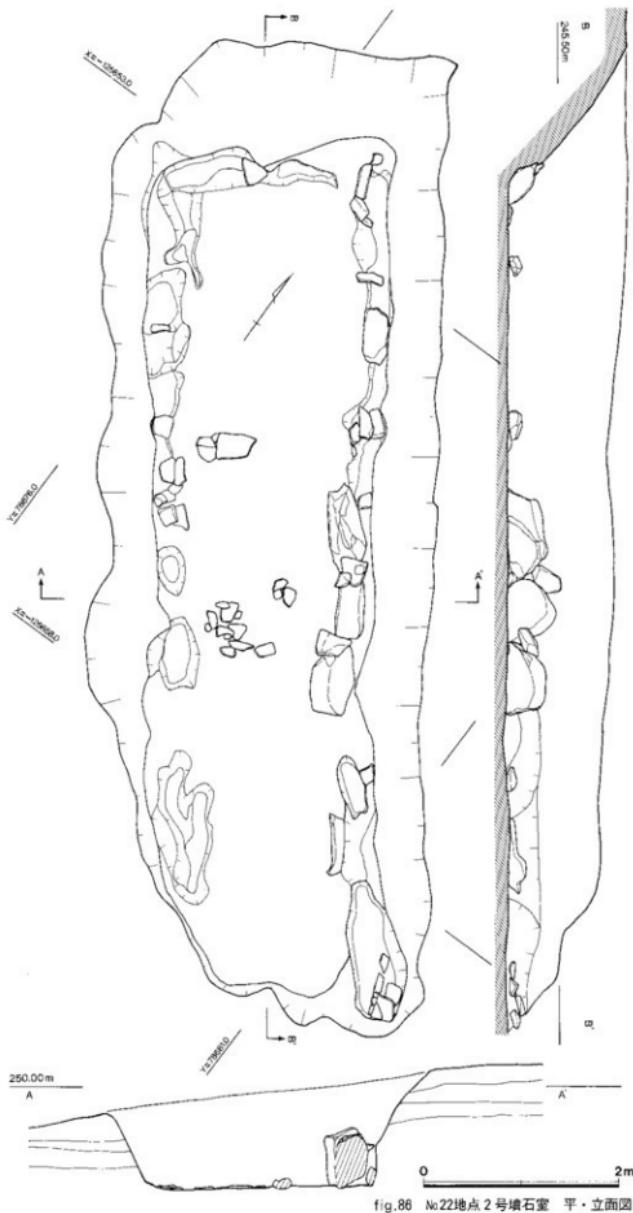


fig.86 No.22地点 2号填石室 平·立面图

石敷遺構 2号墳の石室掘形は、石材を抜かれた後に埋没し、その上に5~20cm大の板石を敷き詰めた遺構が設けられた。これは、最近まで建っていた祠の南西に並ぶように造られており、この上に小規模な別の祠が建っていたようである。この二つが同時に併存していた可能性はあるが、最近まで建っていた祠の前身の建物と考えることができる。周辺からは、鉄釘（寛永通寶？）、鉄釘が出土している。

地鎮遺構 石敷をはずすと、一辺約40cm、深さ約8cmの方形の土坑が検出された。壁面が焼けており、炭が詰まっていた。これは石敷を設ける際に何らかの宗教的な儀式を行った痕跡であり、おそらく祠建立の際の地鎮めを行った遺構と推察される。

また、役行者をまつる祠の基礎部分では、浅く掘り窪めた穴の中に炭を充満させ、それを2枚の棧瓦で蓋をする遺構や、約1m四方の大きさで、火を焚いた痕跡が確認されており、同様の性格の遺構であると考えられる。

また、この祠を挟んで東西と南に直径が60~70cm、深さ10~15cmの大きさで、粘質土が充填されたピット3基が確認されているが、その性格は明らかでない。

小 結 熊ノ望II地区では、横穴式石室を埋葬施設とする古墳1基（No.22地点2号墳）、近世～近代の修驗道に関係する遺構が確認された。石室は、石材がほとんど抜き取られており、形態は定かでない。また、抜き取られた石材は古墳の近くの斜面では発見できなかった。1号墳と同様に、相当重量のある石材を取り扱うという徹底した破壊を行っている。

No.22地点 熊ノ望I・II地区の間は、18×30m程の緩傾斜地と平坦面になっている。当初、I・II

(熊ノ望II地区) 地区の尾根頂部に古墳があると想定し、調査を先行させたため、この間は未調査となつて拡張区) いたが、II地区東端の緩傾斜地で石列を発見し、調査区を拡張・精査を行ったところ、古

No.22地点 墳が1基確認された。古墳は、墳丘の土がほとんど流失しており、わずかに周溝と石室が

3号墳 確認されたのみであった。周溝は、長径約8~9mの楕円に近い半円形で、山側は斜面を

周溝 削って掘り込んでいるが、谷側では検出できなかった。一部、後世の削平は認められるが谷側には、造られていないようである。周溝内から、須恵器壺片が出土し、付近の斜面から発見されたものと接合する。



fig.87
No.22地点
3号墳石室

埋葬施設 傾斜に斜交する状態で、横穴式石室が確認された。これは、掘形の規模が長さ約6m、幅約2.5m、石室の内法長約4.5m、幅約1.8mの無袖式である。南東に開口し、主軸の方向はS48°43' Eである。石室は破壊が著しく、基底部の石を残して、凝灰質砂岩の石材が内部に崩落したり、抜き取られたりしている。また、石室が崩壊する前に盜掘を受けていたらしく、一部の床面が削られていた。

開口部には、閉塞石が残っていた。また開口部から1.5m奥には、仕切石が2石あり、そこから奥に遺体を安置したと考えられる。なお、石室内からは、遺物は出土しなかった。

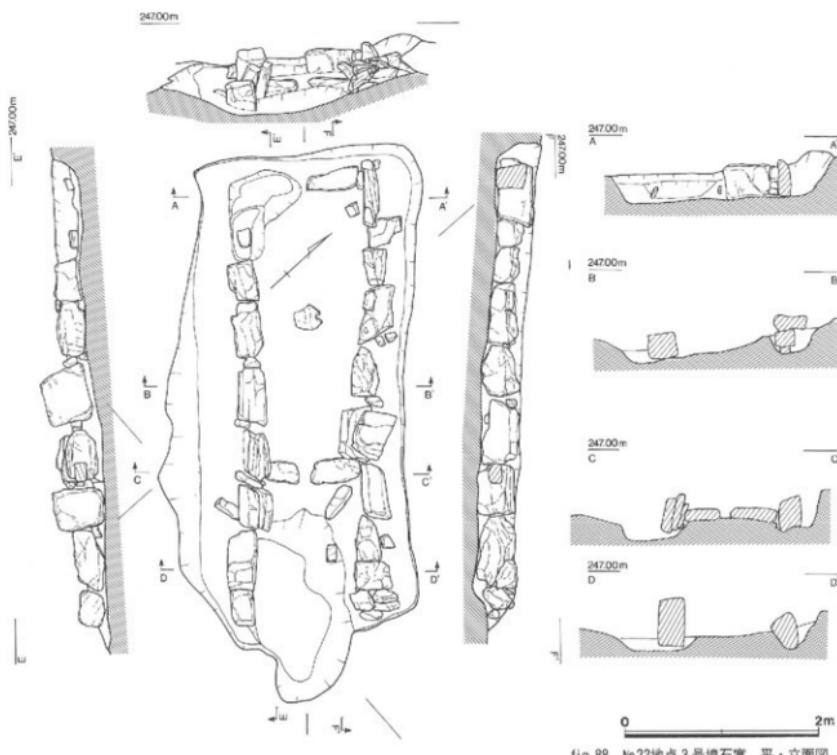


fig. 88 №.22地点 3号墳石室 平・立面図

平坦面の造成 I地区・II地区間の平坦面は、北東から南西に延びる尾根鞍部の緩斜面を削って平らにしており、両側の斜面に削った土を盛っていることが確認された。また、I地区に接する**礎石柱建物** ところでは、斜面の一部を削って平らにし、そこに6×4mの長方形の規模で、凝灰質砂岩をコの字型に並べた建物基礎が発見された。これは、四隅に0.7×0.4～0.3×0.2m大の四角い石を置き、それをつなぐ様に、小さめの石を外側に面を揃えて並べていた。このことから、四隅の石が柱の礎石となり、列石のない一辺（平坦面の方を向いている）が入

口のあった構造の建物が想定される。

基礎跡内からは、浅い土坑1基、ピット1基が発見され、炭が埋土中に入っていた。また、周辺からは、銅・鉄錢、銅製の小さな鈴、近世～近代の陶磁器片が発見された。また、鉄釘18本と鉄製品（クサビ・カスガイ）が基礎跡の南西側でまとまって出土した。

平坦面の遺構 平坦面のほぼ中央で、およそ 6×4 mの範囲で、厚さ約1cmの炭層が広がっているのが発見された。また、炭の入ったピットが平坦面に散在していた。

また平坦面からは、鉄釘、銅・鉄錢（寛永通寶？）数十枚、明治初年～10年代の銅貨が出土した。それらの出土位置は、ある程度のまとまりが認められる。

小 結 熊ノ望Ⅱ地区拡張区では、横穴式石室を埋葬施設とする古墳1基（No.22地点2号墳）、近世～近代の修道院関係の遺構・遺物が発見された。古墳は今回見つかった3基のうち、一番小さいものであるが、唯一、石室の規模・形状が判るものである。石室内は盜掘を受けており遺物は発見されなかった。このため、時期は明らかではないが、石室の規模・形状等から7世紀頃と考えられる。

平坦面では、洞跡と考えられる礎石建物や、土坑、ピットが検出された。また、大量の鉄釘、銅・鉄錢、明治初年～10年代の銅貨が、ある程度のまとまりをもって出土した。近世末～近代初頭に、柴燈護摩等の行場として用いられた際の奉賽錢や器物の釘であることが判る。

No.22地点 No.22地点（熊ノ望）I地区からIV地区の間にある尾根の最高所、標高約258mの頂きを（熊ノ望Ⅲ地区）中心とする地区である。地形からみて古墳が存在する可能性が高いため、調査を行ったが、表土（腐植土層）直下が、硬質な赤褐色砂からなる地山層となっており、遺物・遺構は確認できなかった。

No.22地点 No.22地点の尾根で西端に位置し、標高約257mをピークとする地区である。調査区の北（熊ノ望Ⅳ地区）端に人工的に造られた平坦面と 2.1×2.5 mの長方形の石造りの基壇があり、当初、山城の可能性がある地点とされていた。ここからは、長尾川の流れる谷が一望できる。地形からみて、周辺の尾根に古墳が存在する可能性があるため、発掘調査を行った。

調査の結果、炭を多く含む土坑、ピットを確認した他、基壇がある平坦面付近では、近世～近代の陶磁器、銅錢（寛永通寶）、鉛製の鉄砲玉が出土した。

遺 構 3.8×1.8 m、深さ約10cmの隅円方形の土坑で、埋土には、炭が多く含まれる。斜面下SK 01 の短辺は直線に近く、上方のそれは円弧を描く。遺物は出土していない。

ピット群 基壇のある北端部の平坦面とその付近の斜面から、ピットが13基確認されている。いずれも埋土に炭が入っており、根固めの石を入れているものがあった。

基 壇 2.5×2.0 m、高さ約40cmの長方形を呈し、 40×20 cmほどのけんち石を二段に積み上げている。西側の短辺に平らな石を積み上げた踏み石を付設する。裏込め石は、けんち石と同質のものである。内側に積まれた土は、周辺の地山を削った土を使用している。基壇の石を取り除いた後、地山を精査したところ、直径85×65cm、深さ約15cmの深いピットを確認した。

小 結 SK 01は炭の出土状況と検出位置からみて、後述のIV地区周辺試掘調査で確認された火葬場と関わりがあるかもしれないが、詳らかではない。また、ピット群は、検出された場

所からみて、基壇上の建物（祠）で行われた祭祀に関わる遺構である可能性が強いが、確定できない。基壇については、釉薬の付いた土師器の小片が盛土より出土したのみであり、造られた時期は明らかでないが、平坦面から出土した遺物が近世～近代のものであること、基壇の横に植えられたヒノキがおおよそ100年輪を数えることから、少なくとも明治中期以前の構築物であることは間違いない。

3.まとめ

今回の調査では、古墳時代後期の横穴式石室を埋葬施設とする古墳3基と近世末～近代初頭の修驗道関係の遺構・遺物等が発見された。

古墳群については、以下のことが考えられる。まず、古墳群の立地であるが、四方に広がった尾根が集まる高所に位置し、眼下に見える長尾川の氾濫原からは、約80mの比高差がある。この地点に達するには、深い谷の急斜面を登ってゆかねばならず、当初、古墳の存在を想定するのが困難なところであった。また、この付近の尾根には古墳は確認されず、高所に独立して立地する古墳群であると言える。

3基の古墳、特にNo22地点1号墳の立地するピークからは、北・東・南の方向に眺望が開け、特に北東の方向（長尾町宅原付近＝当時の集落址が存在する）が遠望できる。また、反対に宅原付近からもその地点がよく視認できることから、当時のムラがそこから望め、かつ、ムラからも古墳のある尾根を遙かに仰ぎ見ることのできる場所が選ばれている。つまり、古墳築造の際の選地にあたって、構築の利便性よりも眺望を重視したことが指摘される。

しかし、石室の開口方向は全て南東であり、開口部からは、南側の谷を望むことしかできず、この点では眺望が優先されたとはいえない。これについては、周辺の同時期の古墳の開口方向や立地を踏まえながら、報告書作成の段階で再度検討したい。

No22-1号墳は、外護（区）列石を有していた。これは、兵庫県下では、但馬地方に比較的多くみられる。また、この古墳の石室には石敷が設けられており、丁寧な造りの古墳であるといえる。

古墳は、尾根の2つの頂部とその間に設けられており、地形からみた占地の順序は、1号墳→2号墳→3号墳の順位が考えられるが、1号墳と2号墳との時期差が出土遺物では、認められず、さほど時を隔てない時期の築造を想定することは可能である。

また、3号墳は2号墳の横穴式石室開口部直下に周溝を掘っており、その位置関係から2号墳の機能（埋葬・追葬）が完了した後に3号墳を造ったと考えられる。

石室はいずれの古墳も崩壊し、1・2号墳の側壁・奥壁はほぼ全壊、3号墳は、わずかに基底石を残すのみであった。この破壊状況から考えると、副葬品をねらった盗掘にしては、重い石材を持ち上げ、移動するという大変な労力をかけていることから、石材採集を目的として、石室を破壊した可能性は否定できない。

1・2号墳とその間ににある平坦面からは、近世末～近代初頭の修驗道関係の遺構・遺物が発見された。特にこの付近の地名「熊ノ望=熊野坊（峰）」が、発見された磁石建物に由来することは充分想定することができる。また、平坦面で確認された炭層と出土した遺物（鉄釘・銅・鉄鋸数十枚、明治初年～10年代の銅貨）は、この地が柴燈護摩等の行場として用いられた際の奉賽錢や器物の釘であることを示唆している。

りゅう が つば 12. 龍ヶ坪遺跡 第3次調査

1. はじめに

龍ヶ坪遺跡は、昭和60年度におこなった六甲北有料道路2期築造に先立つ分布調査で土器片が散布する地域として初めて知られるようになった。翌年、試掘調査を実施した結果、平安時代の土器片を含む遺物包含層とピット2か所が確認され、龍ヶ坪遺跡は平安時代の集落遺跡であることが明らかになった。試掘調査に引き続いて、道路築造部分約1000m²について本格的な調査を実施した。その結果、掘立柱建物3棟、土坑4基が検出され、平安時代集落の状況が明らかにされるとともに、サヌカイト・チャートのチップ群が検出され、縄文時代の石器工房と推定される遺構の存在が明らかになった。

その後、市道長尾線改良工事に先立つ試掘調査が実施され、六甲北有料道路の東側水田においてピットと遺物包含層が確認されるとともに、西方200mの丘陵頂部で平安時代の土器を伴う集石遺構が確認された。試掘調査に引き続き、善入川の橋脚部予定地で調査を実施した結果、掘立柱建物跡2棟と東西溝が確認された。この東西溝は、善入川改修工事に伴う兵庫県教育委員会の調査で検出された平安時代の土器を多量に含む溝に続くもので、溝の埋め土からは比較的まとまった量の平安時代の須恵器が出土した。

今回の調査は、善入川橋脚部の西側に続く道路敷予定地（A・C区）と、試掘調査で集石遺構が検出された丘陵頂部（B区）で実施したが、B区については三尊谷遺跡として別途報告することとした。

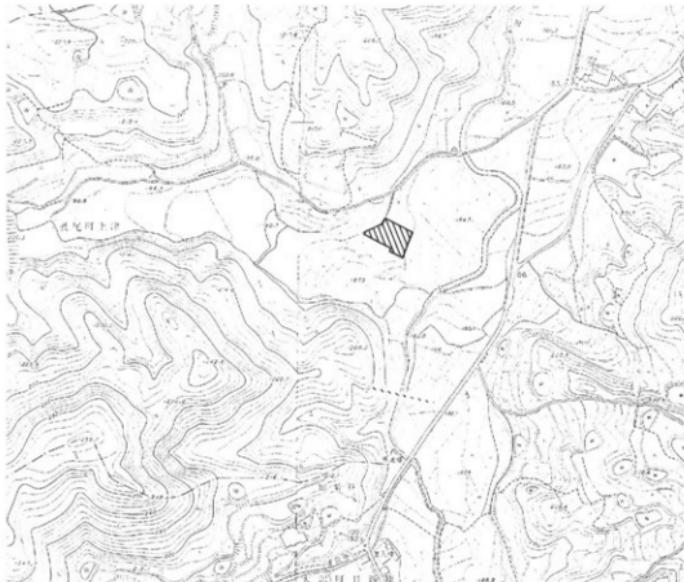


fig.89
調査地点位置図
1 : 5000

2. 調査の概要

調査は、河川改修時に旧水田面から 1.5 ~ 3.0m の高さに盛られた土砂を重機械によって除去することから開始した。旧耕土より下層については人力掘削により調査を進めた。

遺跡の基本的な層序は、旧耕土、床土、水田造成土、そして下層には部分的に暗灰色粘性砂質土層が堆積し、調査区域の大部分では、水田造成土の直下が淡黄褐色粘質土ないしは淡褐色粘性砂質土層の地山となっている。遺構検出面はほぼ南東に傾斜する段丘の地山面であるが、近世における開田によって段状に削平を被っている。検出された遺構は、掘立柱建物 5 棟、溝 3 条、土坑 5 基である。



fig.90 遺構平面図

SB 01 検査区東部で検出した3×3間以上の東西棟の掘立柱建物である。南北7.5m、東西4.2m以上の規模をもち、柱間距離は梁間で2.5m等間隔、桁行きで2.1m等間隔を計測する。柱掘形は、直径35~40cm前後の円形で、直径15cm前後の柱を据えていたと考えられる。柱掘形のうち北西と南西の隅柱は35cm前後と深いが、他の柱掘形の深さは20cm前後と比較的浅い。建物の棟方向は座標北に対して75°西に採っている。建物の西側には1.1mの庇を設けている。

SB 02 検査区西部で検出した3×2間の東西棟の掘立柱建物である。東西7.0m、南北5.7mの規模

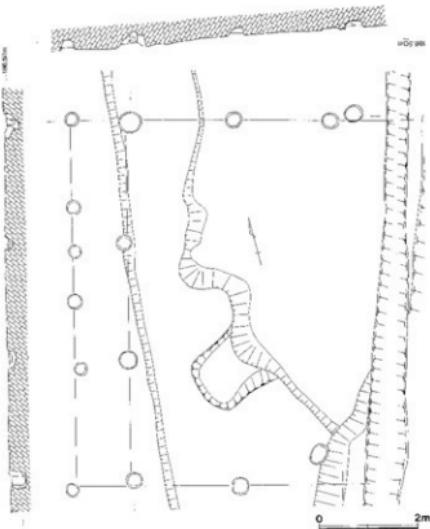


fig.91 SB 01 平・断面図

で、柱間距離は梁間で2.85m間隔、桁行きで2.2m等間隔を計測する。柱掘形は直径30~40cm前後の円形掘形で、径20cm前後の柱痕跡を残すものが5か所ある。南西の隅柱では柱材が遺存していたが、柱材の内部は灰色粘土に置き替わっていた。柱掘形の深さは、隅柱で深く30cmを計測するのに対して、SB 01と同様に間柱は15cm前後の深さで、何れも浅く掘られている。建物の棟方向は真東西を探っている。

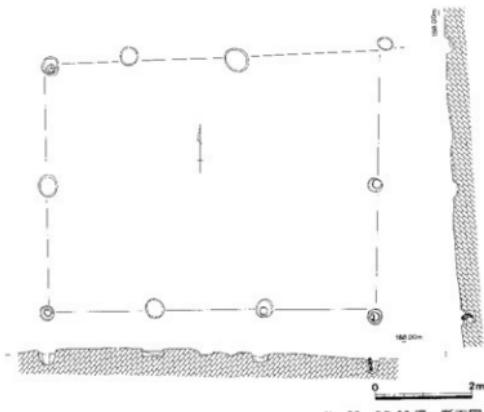
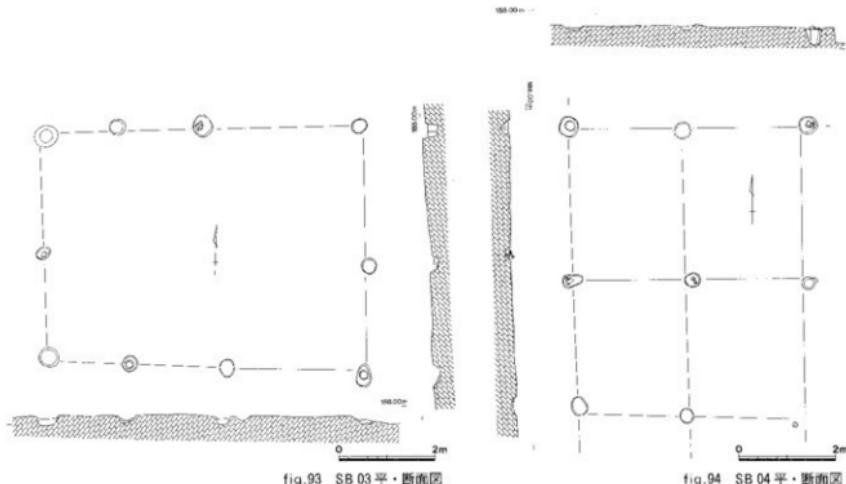


fig.92 SB 02 平・断面図

SB 03 SB 02と重複する3×2間の東西棟の掘立柱建物である。東西6.7m、南北4.7mの規模で、梁間は西側で2.3m等間隔、東側では南よりに梁柱を設ける。桁行では、西よりに桁柱を設け、西よりの柱間で1.5m等間隔、東よりの柱間で3.0mを計測する。柱掘形は直径30~40cmの円形掘形で、直径20cm前後の柱痕跡を残すものが2か所確認されている。柱掘形の内、北東部の隅柱は残存する深さが30cmと深く、他の柱掘形については15~20cmで比較的浅い。建物の棟方向は座標北に対して90°西に採っている。

SB 02 と SB 03 は、ほぼ同一方向、同一規模で位置をずらせて建てられており、短時間の間の建て替えが考えられるが、柱掘形の切り合い関係がなく、掘形内からの出土遺物はいずれも細片である点などから、時期及び建物の前後関係については不明である。

SB 04 SB 02 と SB 03 の東隣に検出した 2×3 間以上の掘立柱建物と当初考えられたが、昭和 61 年度に実施した第 1 次調査の平面図と接合した結果、第 1 次調査で検出された SB 03 の西桁が SB 04 の西桁と方向・柱間とも一致している。さらに、SB 04 の東桁が第 1 次調査では SB 03 に付属する柱穴と認められなかった 2 か所の柱穴と方向が一致する。以上から、第 1 次調査検出の SB 03 と今回検出の SB 04 が同一の建物で、その規模は南北 14.1m、東西 5.0m で 2×5 間の東西棟建物と考えられる。建物の柱間距離は、今回検出した部分で梁間は 2.4m 等間隔、桁行は梁に近い北側で 3.2m、南側で 2.8m を計測する。柱掘形の内、桁柱・梁柱は直径 30~40cm の円形であるが、建物内側の柱掘形は直径 20cm の円形で比較的小さいことから束柱であった可能性がある。柱掘形の深さはいずれも 15cm 前後と浅いが、北東の隅柱については深さ 30cm を計測し、深く良好に残存していた。建物の棟方向は座標北方向を探り、SB 02・03 の棟方向に直交して建築されている。



SB 05 SB 02 と SB 03 の西側に検出した 2×2 間以上の南北棟の掘立柱建物様の遺構であるが、柱列にやや乱れがあり不明である。建物とすればその規模は、東西 3.5m、南北 3.0m 以上を計測する。梁柱は北側にはりだして棟持ち柱様となっている。梁間は西側で 2.4m、東側で 2.2m ある。桁行は、西側で 2.0m、東側で 1.7m ある。柱掘形は直径 30cm 前後の円形で、その内の 3 か所の柱掘形で柱痕跡が残っていた。柱掘形の深さは 20cm 前後を計測する。建物の棟方向は座標北に対して 40° 東を探っている。

SD 01 平成 3 年度に兵庫県教育委員会の河川改修工事に伴う調査と第 2 次調査で確認された東西溝の西側継続部分を調査区の北西部で検出した。溝は、第 2 次調査の調査区域より一段

高い水田面で検出したため、後世の削平を被らず、溝の上層部を遺存させていたため、幅2.3m、深さ45cmを残存させていた。溝の断面形は漏斗状をしており、下層部の一部では断面V字状になっている。溝は調査区の北辺沿いをやや蛇行しながら東に流れるが、調査区北東部の丘陵との傾斜変換部で南に屈曲する。屈曲部から南西の部分は傾斜変換部沿いに溝があったと推定されるが、削平されていて浅く、3.0m程度しか残存していなかった。また、屈曲部は近代の搅乱によって削平され滅失していた。溝の埋土の第2層暗灰色粘性砂質土から須恵器甕口縁部片や坏、土師器皿などの土器が比較的まとまって出土したが、下層部では遺物は出土しなかった。

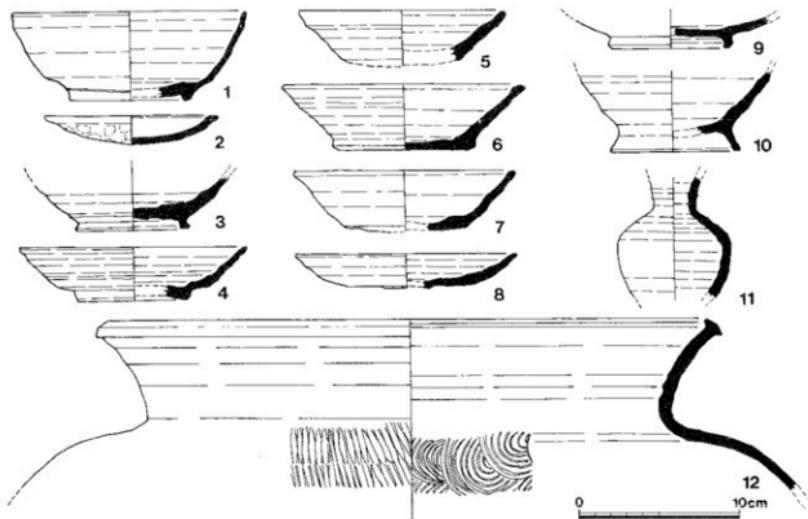


fig.95 SD 01出土土器実測図（1：黒色土器 2：土師器 3～12：須恵器）

SD 02 据立柱建物SB 04の中央北よりから東西に延びる溝である。延長12.5mが確認でき、東側は水田造成のために切り下げられて欠失している。溝の幅は40cm、深さは5cm程度で、断面形はU字状である。埋土は、炭化物を多く含む灰色粘性砂質土で、須恵器・土師器・黒色土器の細片が出土した。

SD 03 調査区の南辺で検出した幅1.1m、深さ10cmの溝で、溝の断面形はU字状である。溝の埋土は灰色砂質土と黄色粘質土の混じる土で、遺物の出土はない。

SK 01～03 調査区中央で検出した幅30～60cm前後、深さ5～10cm前後の溝状の落ち込みである。溝内の埋土は、灰色砂質土が堆積し、須恵器・土師器の細片が出土した。近世遺物の出土はないものの、近世以前の耕作痕跡と考えられる。

SK 04 据立柱建物SB 04に付属する溝と考えられるSD 02によって中央を切られる直径1.0m、深さ2～4cm前後の円形の深い落ち込みである。埋土内に焼土が含まれ、須恵器片が出土した。

SK 05 挖立柱建物 SB 04 の北西部で検出した不定形土坑である。南北 2.8m、東西 1.4m で深さ 2 ~ 4 cm 前後を残存させている。埋土には、焼土と炭化物が含まれ、黒色土器 5 個体、土師器が比較的まとまって出土した。

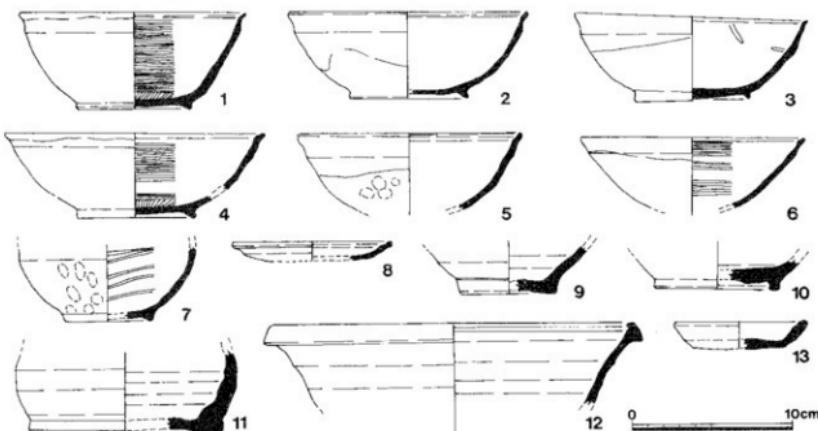


fig.96 土坑出土土器実測図 (1~7 : SK 05 8 : SK 04 9 : SK 02 10~13 : 包含層)

3.まとめ

今回の調査は、昭和61年度に実施した第1次調査と平成3年度に実施した第2次調査の調査地域の空白を埋め、龍ヶ坪遺跡の集落構造を明らかにすることができた。

調査地域の旧地形を復元すると、北側に丘陵が迫り、北西から南東方向に緩やかに傾斜する段丘面に立地する遺跡であるといえる。しかし、段丘と北側の丘陵の間には深い谷が南西から北東に走り、この谷に面した地域では、試掘調査においても遺構・遺物は発見されていない。遺跡の中心部分である掘立柱建物群は、上記の南東緩斜面に検出されたが、後世に削平を被り、柱掘形は浅く痕跡をとどめるにすぎないものもあり、一部の柱掘形は欠失しているものもあると考えられる。また、遺跡が傾斜地に存在する点などから、ある程度の盛り土による宅地造成も行われたと推定される。

掘立柱建物は第1~3次調査を通じて9棟が検出された。この内、ほぼ真南北方向に建物方向を探る第1次調査のSB 01・02、第2次調査のSB 01、第3次調査のSB 02~04の各掘立柱建物が同時期に存在した可能性が想定される。また、第2次調査のSB 01を除く6棟の建物が調査地域の南西部に集中してほぼ同時に建築されていることから、これらの建物群が居宅として機能していたことを窺わせる。これらの建物群の時期は、第3次調査のSB 04に付属する可能性が高い SK 05・SD 02 出土の土器から10世紀後半を遡らない時期とすることができる。

一方その他の掘立柱建物については、第2次調査のSB 02の柱穴内から出土した須恵器坏身が9世紀前半に比定されることから、9世紀以降に集落形成の端緒があり、10世紀後半には比較的大規模な居宅が造営され、SD 01 出土土器の示す11世紀に至るまで集落が営まれたと考えられる。

かみおなだ 13. 上小名田遺跡

1. はじめに

上小名田遺跡は、八多川によって形成された平野部に広がっており、中世の大規模な集落遺跡であることが明らかになっている。

今回の調査は平成4年度から実施されている同地域の土地改良事業に伴うもので、試掘調査によって埋蔵文化財の存在が確認されている部分（IX区～XII区）について調査を実施した。

2. 調査の概要

調査地の基本層序は、現代の耕作土・床土の下層に、旧耕作土層、古代から中世の遺物包含層が存在し、その直下が遺構面となる。遺構面が現在の地表面から浅い部分では包含層は存在せず、耕作土直下が遺構面となる。逆に遺構面が深い部分では、2時期の遺構面が存在する。

以下、地区ごとに概要を示す。各区に設けた小区は、これまでに実施された調査に従い、現在の圃場毎に設定した。

IV-4区 今回の調査区域の中で最も遺構の集中する地区で、溝（SD 01 幅約50cm、深さ10cm）を有する掘立柱建物（SB 01 6間×2間以上）や、その建物に伴うと考えられる土坑（SK 01～04）などが検出された。

IV-5区 IV-4区の南側に連続する地区で、土坑（SK 05）と大小のピットが検出された。

IV-6区 IV-4区の北側で検出された谷状の落ち込み遺構（SX 01）の範囲内に含まれる地区である。基盤層が南から北に向けて下り傾斜しており、その基盤層の上面で土坑状遺構を検出している。

	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形 状		長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形 状
SK 01	8.5	7.0	1.5	不整椭円形	SK 04	24.0	13.0	2.0	隅丸方形
SK 02	10.5	7.0	1.0	隅丸方形	SK 05	8.0	5.0	1.5	不整椭円形
SK 03	8.0	7.0	3.0	椭円形					

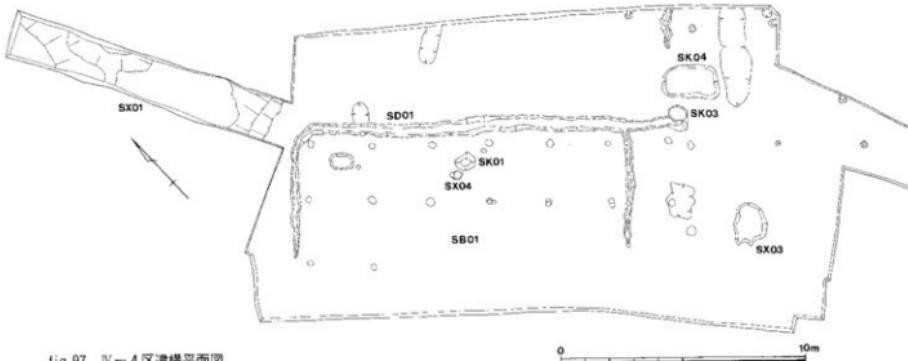


fig.97 IV-4区遺構平面図

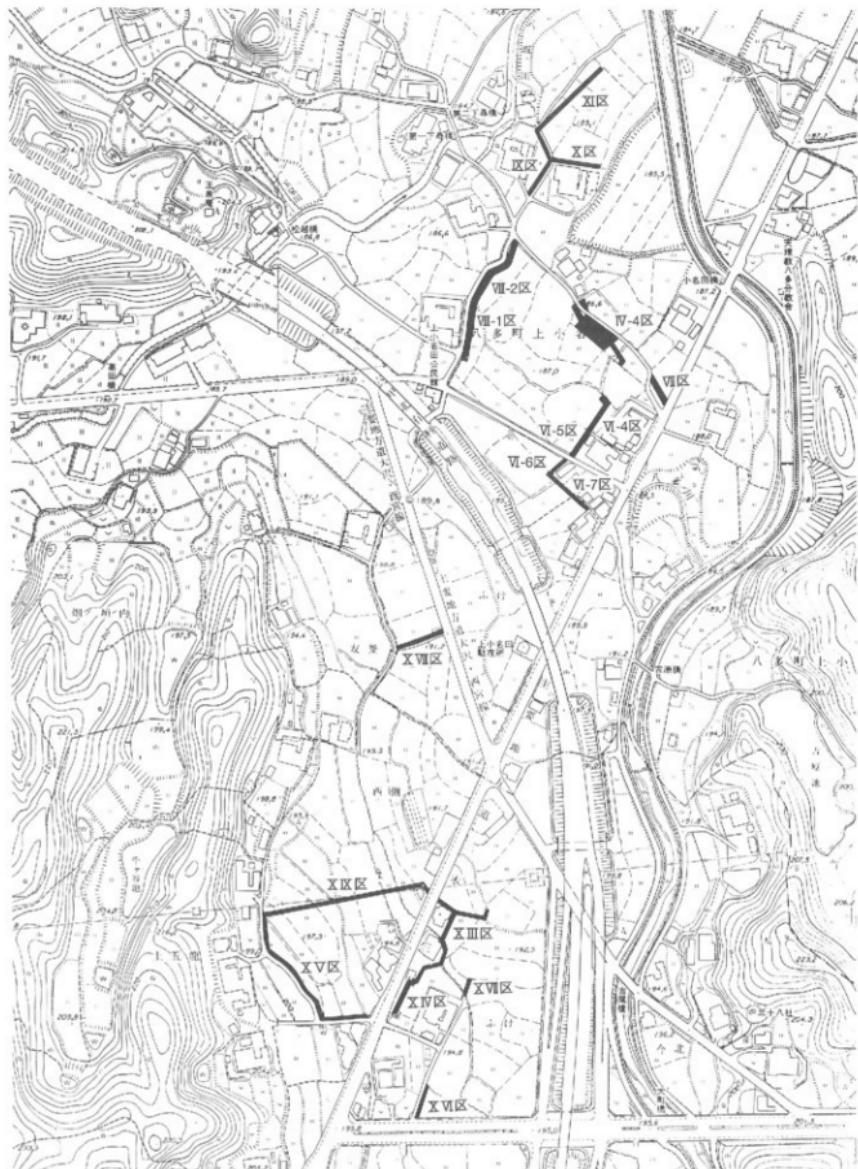


fig.98 調査地点位置図 (1 : 4000)

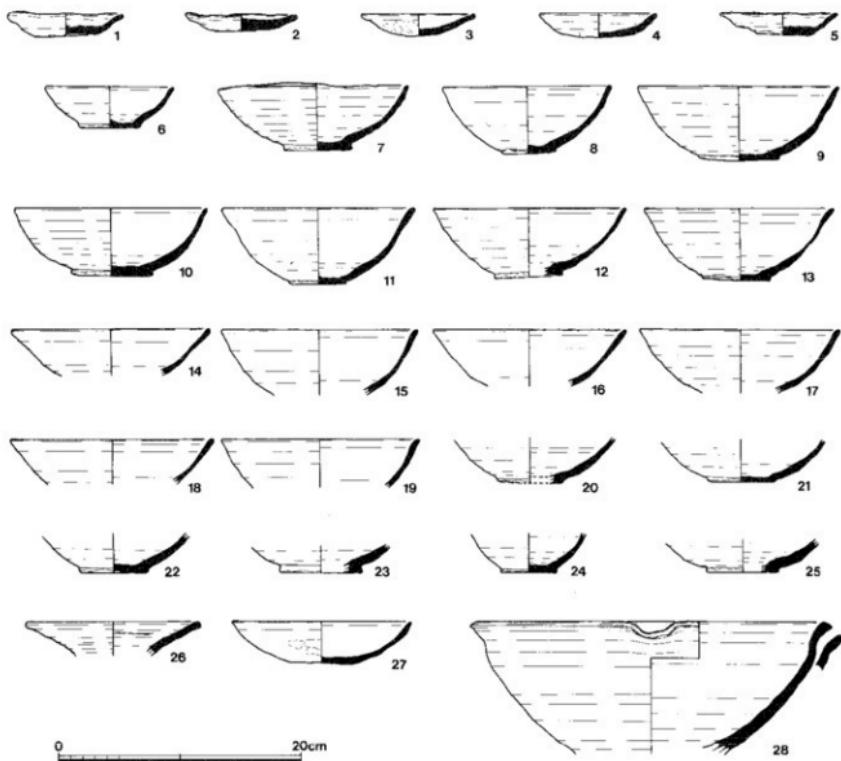


fig.99 IV-4区出土土器実測図
 (SK 01 : 1~3、6~9、16~22 SK 03 : 12 SK 04 : 13、16 P - 3 : 10 P - 6 : 28 P - 7 : 11 P - 13 : 4、5、15)
 (SD 01 : 23、27 SX 01 : 14 SX 04 : 24、25)

VI-3～5区 造物包含層が厚く堆積している地区であるが、その下層の基盤層の上面で遺構は検出されなかった。また、VI-3、4区で確認された落ち込み状遺構(SX 02)は前年度調査のVI-2区において確認された流路の西側肩部になる可能性がある。

VI-6区 昭和62年度からの数回にわたる隣接地域の調査で、南東から北西に流れる埋没河道が確認されており、その支流と考えられる流路の肩部が確認された。

VI-7～8区 VI-7で、小規模な土坑状遺構が1か所検出されたのみである。また、基盤層がVI-7区からVI-8区に向けて上り傾斜になっており、VI-8区の東端部では現地表下30cmで検出される。

VII区 造物包含層を有するものの、基盤層(地山層)の上面で遺構は検出されなかった。

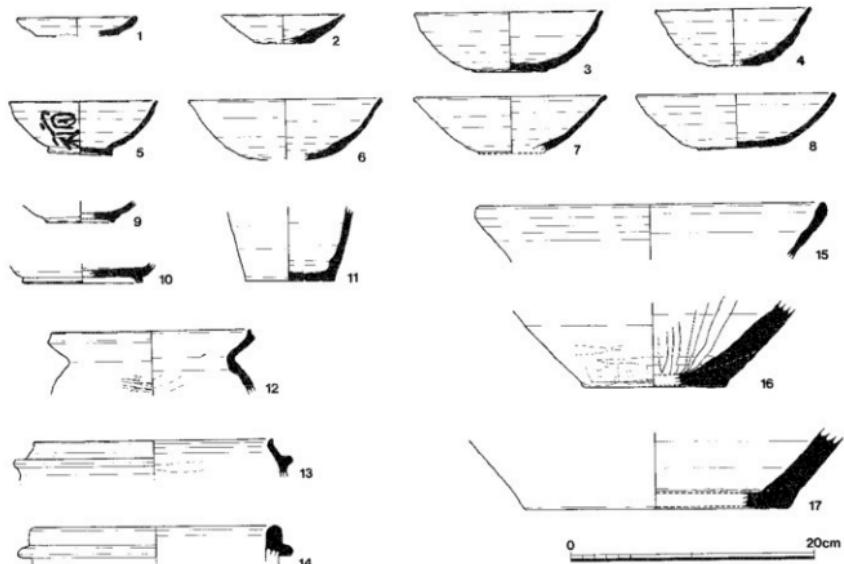


fig.100 VI・VII区出土土器実測図
 (流路上層：4、13 流路下層：1、5～8、10、11、16 IV-4包含層：2、9、12、14、15 VI-7包含層：3)
 (VI-2包含層：17 9：瓦器 14：石鍋)

VII-1区 基盤層（地山層）が著しく削平されている地区で、現代耕土の直下が基盤層となっており、遺構は検出されなかった。

VII-2区 昭和62年度からの数回にわたる隣接地域の調査で確認された、河道の本流部分の延長と考えられる流路が確認された。地区中央部で本流部分の東側肩部を確認しており、そこから基盤層が東方向に上がり傾斜になっている。基盤層の上面では遺構は検出されなかった。

遺構 現代耕土及び旧耕土層から平安時代後期～近世の遺物が確認されている。また、中世遺物包含層から出土した遺物は11世紀後半～13世紀前半のものが中心である。

遺構内から検出された遺物としては、IV-4区のSB 01柱穴内、SD 01、SK 01・03・04の埋土中より11世紀後半の遺物が検出された。また、谷状の落ち込み遺構（SX 01）の下層からは11世紀後半の遺物が、上層からは11世紀後半～13世紀前半の遺物がそれぞれ検出された。

VI-6・VII-2区の流路からは、奈良時代から平安時代後期までの各時期の遺物が検出されたが、そのほとんどが12世紀後半のものである。その他、木製品が2点と自然木が数点確認されている。

IX区 近世以降の流路及び土坑等が検出された。

SD 01 深さ130cm程度の流路で、肩部には護岸のための杭や、方形に張り出す部分があり、人工的な施設だと考えられる。流路内により、中世から近世の遺物が検出されているが、出土

状況から、近世以前の遺物は他所からの流入と考えられ、近世の遺構と推定される。埋土上層より、五輪塔の一部が2個体分出土している。

五輪塔 花崗岩製の火輪部は、表面が風化しており剥離は不明である。凝灰岩製の宝珠部は、一部欠損しているが、手斧痕が明瞭に遺存している。

X 区 耕土直下で土坑等の遺構の痕跡が検出されたが、耕作によって削平されており、詳細は不明である。

XI 区 幅3m、長さ70mの調査区である。現状の圃場ごとに南から1～3区と呼称した。

遺構面となる基盤層は、1区から2区中程までは黄色シルト混じり極細砂で、2区中程から3区までは灰褐色極細砂混じりシルトである。

検出できた遺構には、古墳時代中期末の竪穴住居1棟と鎌倉時代前半から後半にかけての土坑、溝、落ち込み、ピット等多数の遺構がある。

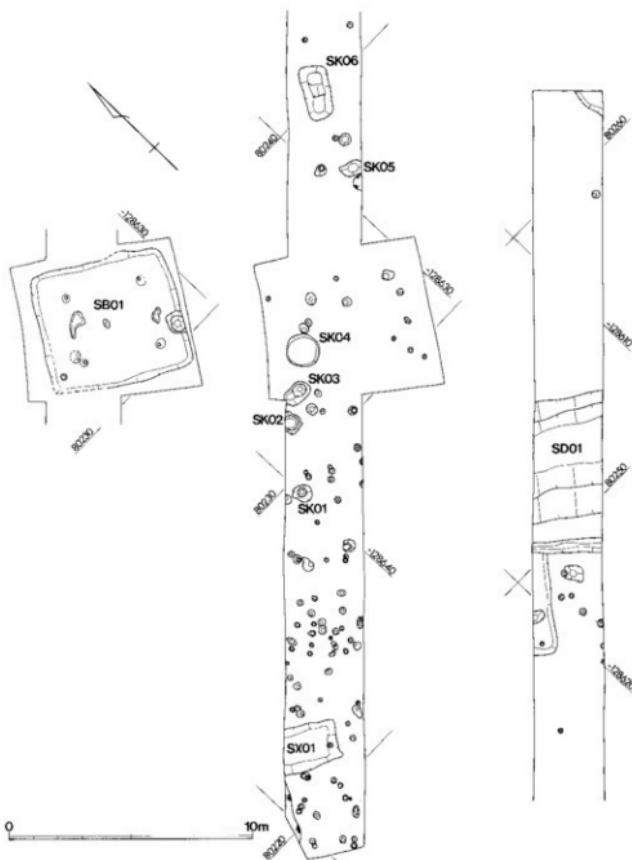


fig.101
XI区遺構平面図

SB 01 調査区のはば中央部、1区北端で検出した方形の堅穴住居で、その全容を把握するため、東西両方に調査区の拡張を行った。

長辺5.8m、短辺5.4mの方形堅穴住居、壁高は10cmである。周壁溝は確認出来なかった。床面には主柱穴4基と土坑1基、ピット4基、浅い落ち込み等が確認できた。4基の主柱穴のそれぞれの柱間は2.6~3.1mで、いずれも直径約10cm、深さ50~70cmの柱痕が確認できた。さらに、床面中央のピットも直径約10cm、深さ25cmの柱痕があるため5本柱の可能性もある。

出土遺物は、床面の北西沿いで焼土

塊とともに須恵器壺身、土師器甕がまとまった状態で出土した。本来はカマドが付設されていたものと考えられるが、後述するSK 04によって破壊されたと考えられる。また、中央部では須恵器甕の口縁部を、南隅では土師器甕を検出している。これらの遺物から、SB 01は6世紀前葉のものと考えられる。

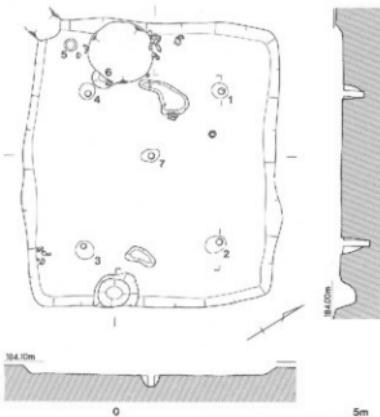


fig.102 SB 01 平・断面図



fig.103 SB 01 全景

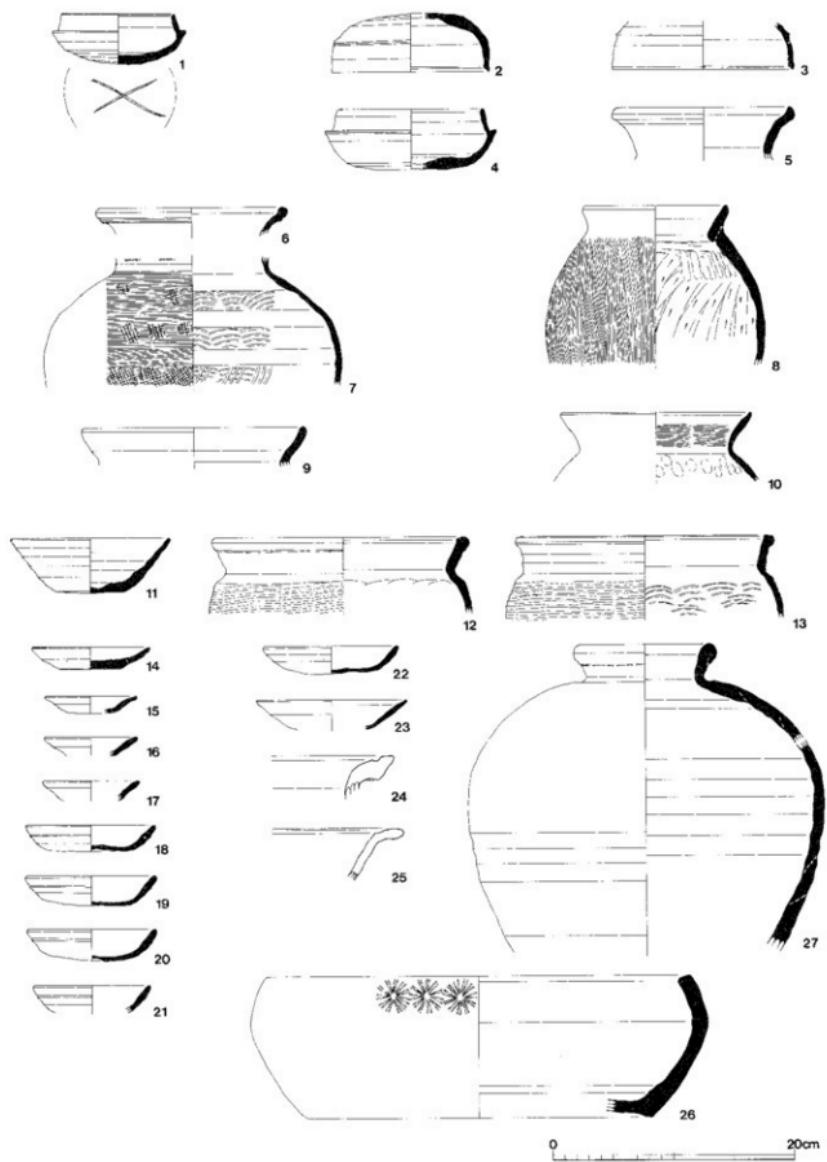


fig.104 Xizhou site出土土器実測図 (1~10 : SB 01 11~13 : SX 01 14 : SX 02 15~21 : SK 05 22~26 : SK 06 27 : SP 07)

- SK 01 上面は、直径約70cmの円形で、中層以下は直径約30cmとなる遺構である。柱材が抜き取られた後、石と陶器・須恵器が投げ込まれたピットと考えられる。出土した須恵器・陶器から14世紀前半代のものと考えられる。
- SK 04 直径約1.5m、深さ55cmの円形の土坑で、SB 01を切っている。埋土には灰色砂質土と黄色粘質土が大きなブロックで含まれており、人為的に埋めたものと考えられる。出土遺物には須恵器・土師器の細片が少量ある程度で、中世に属すると考えられる。
- SK 05 長辺80cm、短辺60cm、深さ20cmの楕円形の土坑である。完形品を含む土師器皿が7枚出土した。14世紀前半代のものであろう。
- SK 06 長辺1.5m、短辺80cm、深さ50cmの楕円形の土坑で、北短辺の壁面に貼りついた土師器皿を1枚確認した。坑底は2段に掘られており、南側半分のみで坑底から5~15cm浮いた状態で薄い炭化層を検出したが、その性格については不明である。また、埋土上層からは、土師器皿・火舎・施釉陶器盤?・丹波甕が出土している。14世紀前半代の遺構であろう。
- SD 01 3区南端で確認した溝状遺構で、最大幅5.4m、最大深さ1.1mである。埋土下層はシルト層で、自然堆積と考えられるが、埋土中層では、多数の拳大~人頭大の礫が投げ込まれた状態で出土している。水田造成の際に人為的に埋められたものであろう。出土遺物は埋土最上層から須恵器・土師器・青磁の細片が出土しているのみで、遺構の時期を決定するには至らない。
- SX 01 幅1.85m、長さ2.5m以上、深さ約30cmの落ち込みである。須恵器椀、土師器鍋等が出土している。13世紀前半のものであろう。
- II 区 西側へ緩やかに傾斜する遺構面から、近世以前の柱穴と土坑が検出された。遺構内より遺物の出土はなく、時期は不明である。
- SP 01 深さ15cmのところから、礎板が検出された。加工痕は確認できなかった。
その他の遺構からは、遺物の出土はないため、時期は確定できないが、遺構面上層の旧耕土層から12~13世紀の遺物が出土しており、当時期の遺構であると考えられる。
- III 区 旧耕土層より、12~13世紀の遺物が出土しているが、遺構は検出されなかった。
- IV 区 柱穴等の遺構が検出された。SP 01~05は、ほぼ直線上に並び、建物としてまとまると考えられるが、調査区の制約により、規模は確認できなかった。遺物の出土はなく、時期は不明である。
- IV-1~2区 12~13世紀の柱穴、用水路、土坑等が検出された。
遺構は検出されなかったが、緩斜面を圃場に開墾した状況が、調査区断面によって観察された。
- 3区 柱穴、用水路、土坑等の遺構が検出された。
- SP 01~05 いずれの柱穴からも遺物の出土はない。建物としてのまとまりも確認できなかった。
- SK 01 長さ60cm、幅40cm、深さ5cmの方形の土坑で、元豊通宝が一枚出土した。
- SD 01 幅約120cm、深さ約40cmの溝状遺構である。現在の農道にほぼ並行して検出された。SD 01に取りつく溝が数条検出されている事から、用水路であると考えられる。埋土から出土した遺物から、12世紀代の遺構であると考えられる。
- 5区 遺物を多く含む流土層が厚く堆積していた地区である。遺構は検出されなかつたが、須

- 恵器、土師器の他に、白磁、瓦器、墨書き土器等が出土した。
- IV 区 耕土層より中世以降の遺物が出土したが、遺構は検出されなかった。
- XVII 区 耕土層より中世以降の遺物が出土したが、遺構は検出されなかった。
- XVIII 区 地山層が削平されており、遺構・遺物は検出されなかった。
- XXI-1 区 緩斜面に開墾された圃場を斜面方向に縦断する調査区で、柱穴、溝、土坑等の遺構が検出された。
直線上に並ぶ柱穴や、土坑等が検出された。調査区東半部では、現耕土直下が遺構面となるが、西半部では10cm程の間層（淡灰色砂質土）を含む。淡灰色砂質土より12世紀代の遺物が出土しており、西半部の遺構は当該時期の遺構であると考えられる。東半部の柱穴は掘立柱建物に伴うものと考えられるが、プラン及び時期は不明である。
- XXI-2～7 区 溝状遺構、ピット等が検出された。
SD 01 と SD 03～05 は、幅40～70cm程度、深さ10～40cm程度の溝で、断面の観察から、XVII 区で検出された SD 01 と同様、用水路であると考えられる。
SD 02 は他の溝とはプラン・形状共に異なり、性格は不明である。
- 8 区 土坑と柱穴が検出された。
SK 01 直径90cm、深さ20cmの土坑である。灰色粘質土層下で炭層が検出されたが、埋土内や壁面に強い火熱を受けた痕跡はない。炭層及び下層からは遺物は出土しなかった。
- SK 02 直径60cm、深さ20cmの土坑で、SK 01 を切り込んで作られている。遺物は出土しなかった。
- 9 区 XVII-5 区と隣接する地区で、遺物を多く含む流土層が厚く堆積しており、遺構面が2面検出された。
- 第1遺構面 第1 遺構面では、溝状遺構、柱穴が検出された。
- SD 06 幅1m、深さ15cmの溝状遺構で、畦畔上に作られており、用水路と考えられる。埋土から多くの遺物が検出された。完形に近い遺物が多く、用水路廃棄時の一括遺物である。廃棄時期は12世紀代である。
- SP 06 柱穴からの遺物の出土はなかった。
- 第2遺構面 第1 遺構面のベース層である淡灰色粘質土層を除去すると、第2 遺構面が検出された。
第2 遺構面では、溝状遺構、柱穴が検出された。遺構内より遺物の出土は無かったが、淡灰色粘質土層から12世紀代の遺物が出土しており、第1 遺構面と大きな時期差はないと考えられる。
- 3.まとめ IV-4 区では、雨落ち溝を有する掘立柱建物やそれに伴うと考えられる遺構が確認されたが、これらは集落の新たな拡張を予見させるものである。また、流路内からは、墨書き土器や白磁などの陶器類なども確認されている。
- XI 区で検出された古墳時代後期の堅穴住居は、上小名田遺跡では初めての発見である。北接する下小名田遺跡では、同時代の遺構が検出されており、八多川流域一帯に古墳時代後期の遺構が分布することが確認された。
- また、XI 区の周辺部がこれまで上小名田遺跡と比定されてきていることから、3 区で確認できた SD 01 の存在は特記できる。調査区南半での遺構の高い密集度をも含めて、館

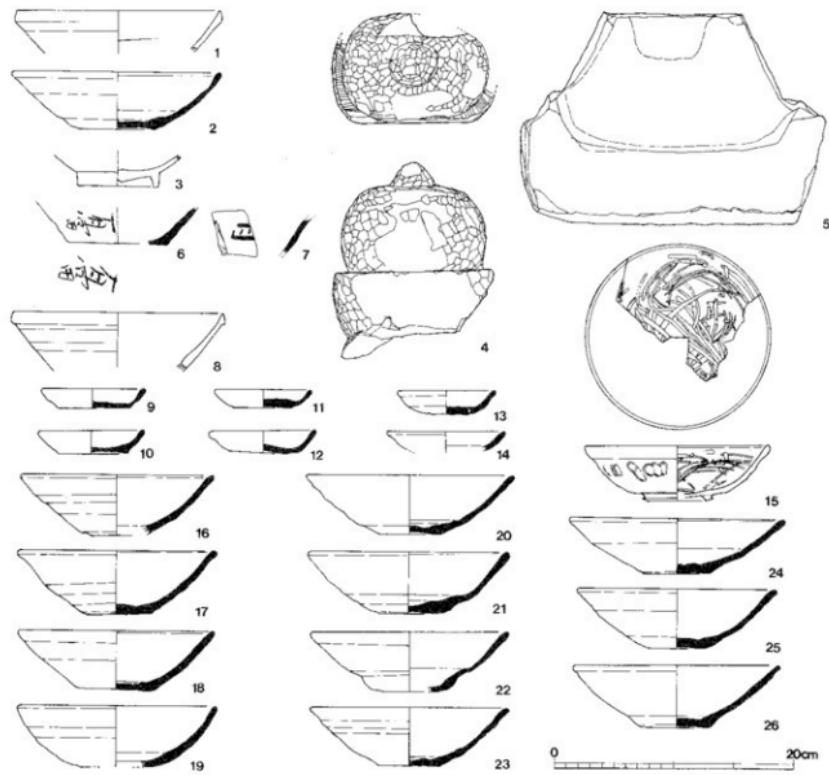


fig.105 IX～XIII区出土土器実測図 (1 : IX-1区 2・3 : IV-3区 4・5 : IX-2区 SD 01 6・7 : IV-5区
8 : IX-8区 9～26 : XIII-9区 SD 01)

跡の存在を想起させる遺構群と言えよう。しかしながら、現状では調査区の制約もあり、その性格を明確にするには至っていない。今後、周辺部の調査状況を鑑みて、検討を加える必要があろう。

IV区及びXII区で検出された用水路や畦は、今までその位置を変えておらず、12世纪代の開渠時の水造り、区画がそのまま継承されている事が確認できた。

IV-4・5区及びXII-9区から出土した遺物量は、今回の調査で出土した遺物量の大半を占めている。また、他の調査区ではほとんど出土しなかった墨書き器や、青磁、白磁等の比率が高いことから、XII区西側の尾根上または斜面上に、12世纪代を中心とする時期の遺構の存在が推定される。

XII区は、斜面上に開渠された圃場を縦断する調査区で、緩斜面の土地利用を示す好例となった。また、圃場改修時に、畦上の用水路に土器を投棄している状況が確認され、何らかの祭祀がおこなわれた可能性が窺える。

おうご はぎわらじょう
14. 淡河・萩原城 遺跡 第1次調査

1. はじめに

淡河城は、播磨国淡河荘地頭職であった中嶋氏が、1276（建治2）年に築城したものといわれている。

その後、中嶋氏は加担していた尼子春久が播磨乱入後撤退するに及び、中嶋氏も西播磨へ退去したのが1510（天文9）年といわれる。

1554（天文23）年、有馬重則が三木別所氏と交戦に及んだ時、三木別所氏の旗下に属していた淡河氏も有馬氏に反することとなった。この結果、淡河城とともに、萩原城も落城したと伝えている。

1560～70年？には三津田城（三木氏志染町）から天正寺城（淡河町）に移った有馬則頼が、萩原城に入城していたと考えられている。

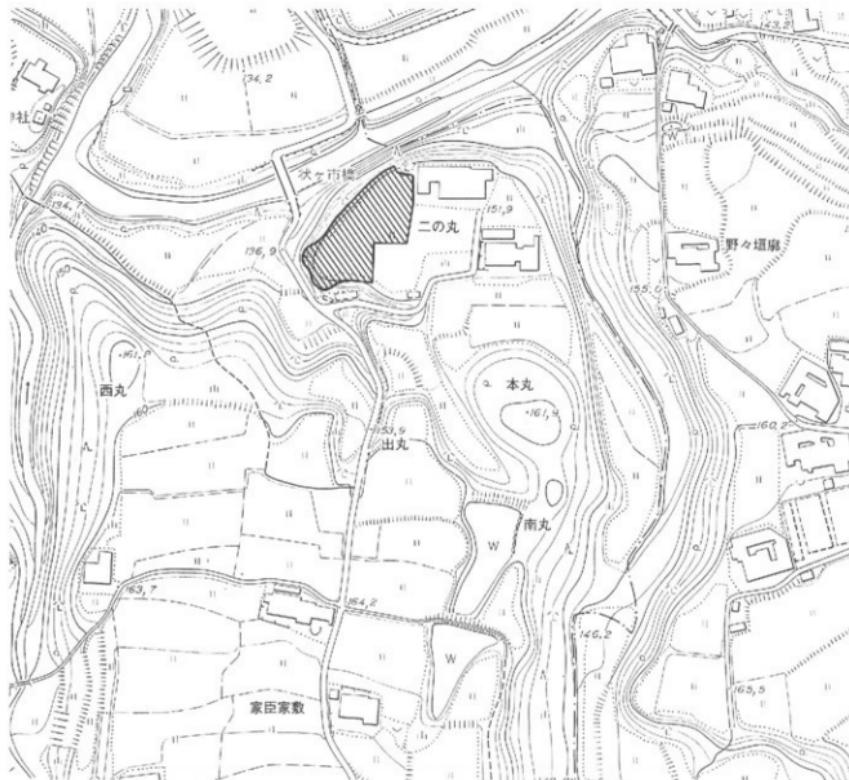


fig.106 調査地点位置図 (1 : 2500)